

風細う吹きてこの浦に着き侍りつること、誠に神の御しるべ違はずなむ。こゝにももし知ろしめすことやおはしつらむ。いとも憚多く侍れどこの由申し給へ。」といふ。良清忍びやかに傳へまゐらす。君、思しめぐらすに、夢現様々静かならず。さとしありし事どもを、來し方行く末残らす思し合せ給ふに、後の世の謗も安からざるべしと憚らせ給へど、誠に神の助にあらむを背くものならば、またこれにもまさりて人笑はれなる目をや見む。我より齡まさる人、もしいは位高く、世の覺、一際優る人には靡き従ひて、そのしるべをたどるべきものなり。「退きて答なし。」と、昔の賢しき人もいひ置きけれ。

○退きて答なし 老子、不_レ退有_レ咎「退カザレバ咎アリ。」による。

げにかく命を極め、世になき目の限りを見盡しつ。更に後の名を厭ふとても猛きことにもあらず。夢の中に父帝の御教ありつれば、また何事をか疑はむと思して御返宣ふ。「知らぬ世界にて珍しき憂の限り見つれど、都の方よりとて言問ひおこする人もなし。たゞ行方なき空の月日の光ばかりを故郷の友とながめ侍るに、嬉しき釣船をなむ。

○嬉しき釣船をなむ 後撰集、「波にのみ満れつるものを吹く風の便り嬉しき海士の釣船。」涙に濡れてのみ過したるに、嬉しき迎船なり。

かの浦に静やかに隠ろふべき隈侍りなむや。」と宣ふ。入道は限りなく喜び、畏り申す。人々、「ともあれかくもあれ、夜の明け果てぬ先に御船に乗せ奉れ。」とて、例の親しきもの四五人ばかりして乗せ奉

りぬ。例の風出で来て飛ぶやうに明石に着き給ひぬ。こゝはたま這ひ渡る程なれば片時の間なれども、なほ怪しと見ゆる風の心なり。濱の揚げにいと心異なり。人繁う見ゆるのみなむ御願に背きける。入道の領じ占めたる所々、海の面にも、山隠れにも、時々につけて興をさかしぬべき渚の苦屋、行をして後の世を思ひ澄ましつべき山水の列に、嚴しき堂建て、三昧行ひ勤め、

○三昧 思を専にして佛道を勤行すること。

この世の設には、秋の田の實を刈り納め、残の齡過すべき稻の倉町など所につけたる見所ありてし集めたり。高潮に怖ぢて、この頃女などは岡邊の宿に移して住ませければ、君をこの濱の館に心安くおはしませす。船より御車に移り給ふ程に、日やうくさし上りて、入道ほのかに君を見奉るより、老も忘れ齡延ぶる心地して笑み榮えて、まづ住吉の神を拜み奉る。月日の光を手を得たる心地して營み仕うまつる、いと道理なり。所の様は更にもいはず、この館を作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などの有様、いはむ方なき入江の水など、繪に描かむにも、至り少なからむ繪師は描き及ぶまじと見ゆ。月頃の御住居よりはこよなく明らかに懐かし。御しつらひなど、いはむ方なくして住ひける様など、げに都のやむことなき所々にも異ならず、艶に眩き様は優り様にぞ見ゆる。

少し御心静まりては、まづ京に御文ども遣し給ふ。京より參れりし使は、いみじき旅に出で立ちて悲しき目を見ること、歎きて、かの須磨に止りたるを召して、身に餘れる物ども多く賜ひて遣はす。睦じ

き御祈の師どもまたさるべき所々に、この程の御有様委しくいひ遣し給ふなるべし。入道の中宮にも、珍らかに蘇生れる様など申し給ふ。二條の院のあはれなりし御返は、書きも遣り給はず、うち置きく、涙押し拭ひつゝ書き給ふ御氣色、いと異なり。「返すく、いみじき目の限りを見盡し果てつる身なれば、今はと世を背き離るゝ心のみまさり侍れど、鏡を見てもと宜ひし御面影の紛るゝ時なきに、

○鏡を見て、須磨の巻、源氏の君京を出づる時、紫の上の歌、別れても影だに止るものならば、鏡を見て慰めてまし。」をいふ。

かく心許なきまゝにてやはと、數多悲しき憂もさし措かれて、

遙にも思ひやるかな知らざりし

浦よりをちに浦づたひして

夢の中なる心地のみして、覺め果てねば、この文もいかに僻事多からむ。」と、そこはかとなく書き亂り給へるも、側目にいと見まほしきは、いとこよなき御志にこそと人々見奉る。人々も各故郷に心細げなる言傳すべかんめり。小止みなかりし空の氣色、餘波なく澄み渡りて、漁りする海士ども誇らしげなり。須磨はいと心細く海士の磯屋も稀なりしを、こゝは人繁きは厭はしけれど、様異にあはれなること多くて、よろづに思し慰まる。

主の入道、いみじう行ひ澄ましたれど、たゞこの女一人をもて煩ひたる氣色、いといとほしきまで時

々漏らし聞ゆ。君の御心地にも昔よりをかしと聞き置き給ひし女なれば、かく思の外に廻りおはしたるもさるべき契あるにやと思しながら、なほかう身を沈めたる程は、行より外の事は思はじ。都の人の、「いひしに違ふ。」と思はむも耻かしう思さるれば、さる氣色たち給ふことなし。事に觸れてかの女の心ばへ有様などなみくならずもありけるかなと、ゆかしう思されぬにしもあらず。入道は憚りて、こゝには自らもをさく參らず、物隔たりたる下の屋にさぶらふ。されど、且暮見奉らまほしう思ひまらせて、いかで思ふ心をかへむと、神佛をいよく念じ奉る。年は六十ばかりになりたれど、いと清げに、行ひさらばひて、人柄の氣高ければにやあらむ、うち餅み老いばぬる事はあれど、古の事をも見知りて、由ある事も混れ、昔の物語などせさせて聞き給ふに、少しづつづの紛れなり。年頃公私に御暇なくて、さしも聞き給はぬ世の故事どもを、入道崩し出で申す。かゝる所をも人も、かくて見ざらましかば、さうくしくやと思し給ふまで興ありと思す事も混る。入道はかう馴れまらされど、いと氣高う耻かしき君の御有様に慎ましうなりて、我が思ふ事を心のまゝにもいひ出でぬを、心許なう口惜しと、母君といひ合はせて歎く。正身は、世にはかゝる人もおはしけりと、君をほの見奉りしにつけても、我が身の程の思ひ知られて、いと遙なる事にぞ思ひける。されば、親達のかく思ひ扱ふを聞くにつけても、似氣なきことかと思ふに、たゞなるよりは物哀れなり。

四月になりぬ。入道は、更衣の御装束、御帳の帷子など由ある様にし出づ。

○御帳の帷子 御帳は帳臺、室の中に設けて、座所、寢所とす。これに掛くる帷子は、夏は生絹、冬は練絹を用ふ。こゝにては生絹に更なるなり。

かくよろづに仕うまつり營むを、君はすゞろなりと思せど、人柄の氣高きに思し免して見給ふ。

京よりもうち頻りたる御訪どもたゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に海の上曇なく見え渡れるも、住み馴れ給ひし故郷の池水に思ひ紛へられ給ふに、いはむ方なく戀しく、行方なき心地し給ふに、たゞ目の前に見やらるゝは淡路島なりけり。○あはと遙に」など宜ひて、

○あはと遙に 古今集、淡路にてあはと遙に見し月の、近き今宵は所柄かも。』による。凡河内躬恒の宮中にての歌。「あは」は、あはは。「淡路島にてあはと遙に見えし月の今宵近く見ゆるは、こゝが雲の上なればなるべし。」の意なり。

あはと見る淡路の島のあはれさへ

残る限なく澄める夜の月

○「躬恒があはと遙に見し月と詠みし淡路の島を眺めつゝ、残る所なく深き感慨を催す夜の月なり。」

久しう手も觸れ給はぬ琴を、袋より取り出で給ひて、はかなく掻き鳴らし給へる御様を、見奉る人も哀れに悲しう思ひあへり。廣陵といふ手を、ある限り弾き澄まし給へば、かの岡邊の家にて、松の響、浪の音に合ひて、心ある若人は身に染みて思ふべかんめり。何とも聞き分くまじき、この面かの面のし

はぶる老人ども、すゞろはしくて濱風を引き歩く。

○濱風を引き歩く 濱邊にて琴の音を聞き、風を引くをいふ。

入道も堪へ難く、行たゆみて急ぎ參れり。「背きにし世の中も、引き返し思ひ出でぬべく侍り。後の世にと願ひ侍る所の有様も思ひ遣られ侍る夜の有様かな。」と、泣くくめで奉る。君が御心にも、京にて折々の御遊、その人、かの人の琴笛の音、もしは聲の出でし様、時々につけて世にめでられ給ひし有様、帝より始め奉りて、もてかしづき崇められ給ひし事、人の上も我が御身の有様も思し出でられて、夢の心地し給ふまゝに、掻き鳴らし給へる聲も心凄く聞ゆ。入道は更に涙も止めあへず、岡邊の家に琵琶、箏の琴、取りに遣りて、入道、琵琶の法師になりて、いとをかしう珍しき手、一つ二つ弾き出でたり。君には箏の琴參らせたれば、少し弾き給ふも、様々にいみじうあはれとのみ思ひまらせたり。さしもあらぬ物の音だに、折に觸るれば優るものなるを、こゝは遙々と物の滞りなき海面なれば、春秋の花紅葉の盛なるよりは、たゞそこはかとなう茂れる蔭どものなか／＼なまめかしきに、水鷄のうち叩きたるは、「誰が門鎖して」とあはれに覺ゆ。

○誰が門鎖して 古歌、「まだ宵にうち来て叩く水鷄かな、誰が門鎖して入れぬなるらむ。」水鷄の鳴くは門を叩く如き音すれば叩くといふ。「まだ宵なるに誰が門鎖して入れぬにや、水鷄の来て叩く音するなり。」

音もいと二なう出づる琴どもを、入道いと懐かしう弾き鳴らしたるに、御心止りて、「これは女の懐かしき様にて、しどけなく弾きたるこそをかしけれ。」と宜ふに、入道はうち笑みて、「君の遊ばし給ふより懐かしき優る音はいづこにか侍らむ。某、弾き傳へたること三代になむなり侍りぬ。かう拙き身にて、この世の事は棄て忘れ侍りぬれど、物の切にいぶせき折々は掻き鳴らし侍りぬるに、怪しう學ぶもの侍りて、自然に師の親王の御手にこそ似て侍れ。山賤の僻耳に、松風をや聞き違へ侍るやらむ。」

○山賤の僻耳に、 聴しき身にて、松風の音を女の琴の音と聞き違へて、感じたるにやあらむと、入道のへり下りていへるなり。

いかでこれ聞し召させてしがな。」と申すまゝに、うちわなきて涙落すべかんめり。君は、「琴を琴とも聞き給ふまじけるあたりに聞かせたる、口惜しきことかな。」とて、押し遣り給ふ。

○琴を琴とも、 拾遺集、「松風に耳馴れにける山伏は琴を琴とも思はざりけり。」こゝは我が琴など物の数にも思ふまじきをいふ。

君、「怪しう昔より箏は女なむ弾き取るものなりける。すべて只今世に名を得たる人々、かいなでの心遣りばかりなるに、こゝにかう弾き込め給へりけるは、いと興ありけることかな。いかで聞くべき。」と宜ふ。入道、「何の憚かは侍らむ。御前に召しても。商人の中にてだにこそ古琴聞きはやす人は侍りけれ。」

○商人の中にてだにこそ、 白樂天の琵琶行といふ詩による。琵琶行は、白樂天潯陽江のほとりに客を送りし時、偶琵琶の聲を聞き、その女を船中に招きて弾かしめしに、この女、もとは唐の都長安の名妓なりしが、今は零落して茶商人の妻となれるものにて、その琵琶の巧なりしこと、その浮沈甚だしき身の上の哀れなりしこと、を詠じたる長篇詩なり。

琵琶なむ眞の音を弾き沈むる人、古も難う侍りしを、かのもの、をさく／＼滞ることなう、懐かしき手など筋異になむ侍りける。いかでかくまねぶにか侍らむ。荒き浪の聲に混るは悲しう思ひ侍りながら、掻き積む物歎かしさの、それに紛るゝ折々も侍り。」など聞ゆれば、君もをかしと思して、箏の琴取り換へて賜はせたり。入道、げにいと過して掻き弾きたり。今の世に聞えぬ筋を弾きつけて、手遣いといはう唐めき、ゆの音深う澄ましたり。

○ゆの音、 左手にて絃を押すをいふ。

伊勢の海ならねど、「清き渚に貝や拾はむ。」など

○清き渚に、 催馬樂、伊勢の海、伊勢の海の清き渚の潮がひに、なのりそや摘まむ、貝や拾はむ、玉や拾はむ。「潮がひ」は、潮の引きたる間。「なのりそ」は、海草、ほんだはら。

聲よき人に謠はせて、君も時々拍子取りて、聲うち添へ給ふに、入道は琴弾きさしつゝめでまゐらす。御葉物など珍しき様にて參らせ、人々に酒強ひ過しなどして、自ら物忘れもしぬべき夜の様なり。

いたく更け行くまゝに松風涼しくて、月も入方（入りかた）になるまゝに澄みまさりて静かなる程に、入道、物語残りなく聞え出で、この浦に住み始めし程の心遣ひ、後の世を勤むる様など、かき崩し（かき崩し）申して、この女の有様も問はず語りに聞ゆ。君は可笑しけれどもさすがに哀れと聞き給ふ節々（せつせつ）もあり。「いと申し難きことなれど、吾が君かう思の外にこゝに移ろひおはしましたるは、もし年頃老法師（おひはふし）の祈り申し侍る神佛の憐みおはしまして、暫しの程御心を惱まし奉るにやとなむ思ひ侍る。その故は、住吉の神を頼み始め奉りてより十八年になり侍りぬ。女の童（わらわ）の幼く侍りしより思ふ心侍りて、年頃春秋毎に必ずかの御社（みやしろ）に参ることをなむし侍る。晝夜の六時の勤にも、

○六時の勤 一晝夜に六回佛前に勤行するをいふ。

自らの蓮（はす）の上の願をばさるものにて、たゞこの女の高き本意（ほんい）かなへ給へとなむ念じ侍る。自らは前の世の契（ちぎ）拙（ちが）くてこそかく口惜しき山賤（やまぢ）となり侍りけめ。親は大臣（おん）の位を保ち給へりき。次々に劣り行き侍らば何の身にかなり侍らむと悲しく思ひ侍れど、この女は生れし時より頼む所なむ侍る。いかにもして都の高き人に奉らむと思ふ心深きにより、數多（あまた）の人の恨を負ひ、身の爲め辛き目を見る折々も多く侍れど、更に苦みと思ひ侍らず。我が命の限りは狭き袖（せまきそで）にもはぐみ侍りなむ。もしかくながら先立ち侍りなば、海の中にも入り失せねとなむ掟（おきて）て侍る。」など、書き止むべくもあらぬことどもを、うち泣き／＼申す。君も様々思しつゞくる折柄なれば、うち涙ぐみつゞ聞し召す。「横（よこ）様の罪に當りて思ひ掛けぬ

世界に漂（たふよ）ふも、何の報（むく）にかと心許なく思ひつるに、今宵の御物語に思ひ合はすれば、げに淺からぬ前の世の契（ちぎ）にこそはとあはれになむ。かく定かに思ひ給ひける事を、など今まで告げ給はざりつらむ。都離れし時より世の常なきもあぢきなく、行より外（ほか）の事なくて月日を経るに、心も皆崩（くづ）はれてけり。かゝる人のこゝにおはすとは昔よりほの聞きながら、いたづら人なれば、忌々（いみ）しき者こそ思ひ棄て給ふらめと、思ひ屈（く）しつれど、さらば導き給ふべきにこそあんなれ。心細き獨寝（ひとりね）の慰めにも。」など宣ふを、入道限りなく嬉しと思へり。入道、

獨寝は君も知りぬや、つれ／＼と

思ひあかしのうらさびしさを

○「つれ／＼と思ひながら明かす明石の浦の、獨寝のさびしさを君も知り給へりや。」

まして年頃思ひ渡り侍る心許なさを推し量らせ給へ。」と申す氣配（けい）、うちわな／＼きたれど、さすがに由あり。君、「されど浦馴れ給ひつらむ人は。」とて、

旅衣うらがなしさにあかしかね

草の枕は夢もむすばす

○「明石に旅寝しては、悲しさに夢も結び難し。」

と、うち解け給へる御様、いとぞ愛敬（あいけい）づき、いふよしなき御氣配（みけい）なる。入道、數知らぬ事ども聞え盡し

たれど、書くもうるさしや。

入道はかつ／＼かなひぬる心地して、涼しう思ひ居たるに、またの日の晝つ方、岡邊に御文遣はし給ふ。心耻かしき様なれど、なか／＼かゝる限にぞ思の外なる人も籠るべかんめると、心遣ひし給ひて、高麗の胡桃色の紙のいはむ方なきに、御手も引き繕ひて、

をちこちも知らぬ雲居にながめわび

かすめし宿の梢をぞとふ

○「行方も知らず思ひわびたれば、入道の尋あるまゝに訪ひまゐらす。」

○「思ふには。」とばかりやありけむ。

○「思ふには、古今集、思ふには忍ぶることぞ負けにける。色には出でじと思ひしものを。」による。

「思ふ」と「忍ぶ」と争ひしが、「忍ぶ」方負けて、色にあらはれしなり。

入道は人知れず待ちまゐらせて、かの岡邊の家に來居たりければ、御使いと耻かしきまで酔はす。御返いと遅し。入道内に入りてそゝのかせども、女は更に聞かず。いと耻かしき御文の様にさし出でむ手つきも慎ましう、君の御程、我が身の程を思ふに、こよなくわびしくて、心地悪しとて寄り臥しぬ。いひわびて入道ぞ御返書く。「いと長く、田舎びて侍る袂に包み餘り侍るにや

ながむらむ同じ雲居をながむるは

思ひも同じ思ひなるらむ

○「君の眺め給ふ同じ空を女も眺むるは、同じ思ひにわぶるなるべし。」

となむ見侍る。いと好き／＼しや。」と申したり。陸奥紙にいたう古めきたれど、書き様由ありげなり。君はげにも好きたるかなと目覺ましう見給ふ。御使にいとめでたき珠裳など被けたり。

○珠裳、美しき裳。裳は婦人の腰より後に垂るゝ禮装なり。

またの日、「宣旨書は見知らずなむ。」とて、

○宣旨書、宣旨は勅命。勅命は自ら書き給はぬより、宣旨書は代書の意に用ふ。

いふせくも心に物を惱むかな

やよやいかにと問ふ人もなみ

○「やよやかにと、問ふ人もなき故に、心許なく物を思ひ悩む。」

○「いひがたみ。」と、

○「いひがたみ、一條院御製、戀しともまだ見ぬ人のいひがたみ心に物の歎かしきかな。」「いひがたみ」は、いひ難き故。「まだ見ぬ人なれば、戀しともいひ難き故、心の中にのみ歎くなり。」

この度はいといたうなよびたる薄様に、いと美しげに書き給へり。女は、「若き女のかゝる御志をめでざらむも、あまり埋れてや見ゆらむ。」と思へど、更に似氣なき身の程のいみじう甲斐なければ、我を

世にある者と尋ね知り給ふもなかく涙ぐまれて、例の更に動なけれど、入道にせめていはれて、浅からず薫染めたる紫の紙に、墨つき濃く薄く粉らはして、

思ふらむ心の程ややよいかに

まだ見ぬ人の聞きか惱まむ

○「まだ見ぬ人」は、前の一條院御製により、源氏の君のまだ見ぬ人、即ち我なり。

○「まだ我を見給はぬなれば、御消息を賜りても、我は御心の深きか、浅きか分らず、思ひ悩むなり。」

手の様、書きたる様などやむことなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり。君は京の事を思し出で、をかしと見給へど、うち頻りて遣はさむも人目慎ましければ、二三日隔てつゝ、つれづれなる夕暮、もしは物あはれなる曙などに紛らはして、女も同じ心に思ひ知りぬべき頃など推し量りて書き交し給ふに、似氣なからず。心深く思ひ上りたる氣色も見ては止まじと思せど、良清が領し顔にいひし氣色も思ひ起され、年頃心づけてあらむを、目の前に違へさせむもいとほしく思し廻らされて、「彼より進み参らば、それにことづけてむ。」と思せど、女はた、やむことなき際の人よりもいたう思ひ上りたれば、心競べにてぞ過ぎける。京の事、かく關隔りてはいよく心許なく思ひ給ひて、「いかにせまし。戯にくゝもあかな。忍びてや迎へ奉りてまし。」と思し弱る折々あれど、

○戯れにくいもあるかな 古今集、ありぬやと試みがてら相見ねば戯れにくきまでぞ戀しき「相見

ずして過し得るかと試に逢はずに居れば、我ながらかゝる戯の情きまで戀しきなり。」我が心から別れたるを悔しと思ふ。

「さりともかくてやは年を重ねむ。今更に人間悪き事を。」と、思し鎮め給へり。

その年、朝廷には物のさとし頻りて物騒がしきこと多かり。三月十三日、

○三月十三日、須磨に落雷あり、源氏の君、故院を夢に見し日なり。

神鳴り閃き雨風騒がしき夜、帝の御夢に、故院の上、御前の御階の下に立たせ給ひて、御氣色いと悪しうて睨みまらせ給ふに、帝、畏りおはします。院、宜ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむかし。いとぞ恐ろしう思して、太后に聞えさせ給ひければ、后、雨など降り空亂れたる夜は、思ふ事をさぞ見侍る。輕々しく思し驚き給ふまじきこと。」と宜ふ。上は、院の睨み給ひしに目を見合はせ給ふと見給ひし故にや、御目いたう煩ひ給ひて堪へ難う悩み給ふ。御慎み、内裏にも後の宮にも限りなくせさせ給ふ。太后の御父太政大臣失せ給ひぬ。道理の御齡なれど、次々におのづから騒がしき事あるに、太后もそこはかとなく煩ひ給ひて、程経れば弱り給ふ。上の思し歎き給ふこと様々なり。なほこの源氏の君、誠に犯なきにてかく沈むならば、必ずその報ありなむと思し給ふ。「今は元の位をも賜ひてむ。」と、度々思し宜ふを、太后、世の謗、輕々しきやうなるべし。罪に怖ちて都を去りにし人を、三年をだに過ぎず赦されむ事は、世の人もいか言ひ傳へ侍らむ。」など、固う諫め給ふに、帝も思し憚

る程に、月日重なりて、御惱ども様々に重りまさらせ給ふ。

明石には、例の秋は濱風の異なるに獨寝も物わびしうて、入道にも折々うち語らはせ給ふ。「とかう紛らはして、こちへ參らせよ。」と宣ひて、こなたより渡り給はむことをば、あるまじきことと思したれど、女はた更に思ひ立つべくもあらず。「いと口惜しき田舎人こそかやうに假に下りたる人のうち解け言につきて、輕々しく語らふことをもすなれ。人數にも思されざらむものゆゑ、我はいみじき物思をや添へむ。及びなき事を思へる親達も、我が世籠りて過す程こそ行末ゆかしく思ふらめ。輕々しく靡きまゐらせたらむ後、なかくに御心をや惱まさむ。」と思ひて、「たゞ君のこの浦におはさむ程、かゝる御文ばかりを書き交さむこそ疎ならぬことならめ。年頃音にのみ聞きて、いつかはさる御有様をほのかにも見奉らむなど遙に思ひ居しを、かく思ひ掛けざりし御住居にて、ほの見奉り、世に並びなきものと聞き傳へし御琴の音をも風につけて聞き、且暮の御有様委しく聞き奉りて、我を世にあるものと思し尋ね給ふなどこそ、かゝる海士の中に朽ちぬる身には餘ることなれ。」など思ふに、いよく耻かしくて、うち解けて見奉ることなどは、露も思ひ寄らず。親達は年頃の祈のかなふべきことと思ひながら、「ふと見せ奉りて、もし數まへさせ給はざらむ時は、いかにめでたき人におはすとも、いみじうつらうもあるべきを、目に見えぬ神佛を頼み奉りて、女の宿世をも知らで。」などと、うち返し思ひ亂れ居たり。君は、「この頃の浪の音に、かの物の音を聞かばや。さらすば甲斐なくこそ。」など、常に宣ふ。

入道は忍びてよろしき日見て、母君のとかく思ひ煩ふる聞きも入れず、弟子どもにも知らせず、我が心一つに起ち居、輝くばかりにしつらひて、十三日の月の華やかにさし出でたるに、たゞ「あたら夜の」と申したり。

○あたら夜の、後撰集「あたら夜の月と花とを同じくは、心知れらむ人に見せばや。」「あたら」は惜むべし。「心知れらむ」は風流を解する。こゝにては我が女を源氏の君に奉りたき意なり。

君は、好きの樣やと思せど、御直衣着給ひ、引き繕ひて夜更かして出で給ふ。御車を二なく造り置きたれど、所狭しとて御馬にて出で給ふ。惟光などはかりをさぶらはせ給ふ。やゝ遠く入る所なりけり。道の程、四方の浦々見渡し給ひて、思ふ同士にて見まほしき入江の月影にも、まづ戀しき人の御事を思ひ出で給へば、やがて馬引き過ぎて京へ赴きぬべく思す。

秋の夜の月毛の駒よ我が戀ふる

雲居にかけれ時の間も見む

○「月毛の駒」は、白にやゝ赤みある馬。「月」を掛く。「雲居」は、空。こゝは都の空。「時の間」も見む」は、しばしにても戀しき人を見たし。

とうち獨ごたれ給ふ。かしこは木深く、いたき所多くて見所ある住居なり。海の面は嚴めしう面白く、これは心細げに住みたる様、こゝに居ては思ひ残す事あらじかすと、住む人の心思し遣らるゝに、物あ

はれなり。○三昧堂近くて、鐘の聲、松の風に響き合ひて物悲しう、

○三昧堂 三昧は思を專にすること。三昧堂は念佛堂。

岩に生ひたる松の根さしも心ばへある様にて、前栽どもに虫の聲を盡したり。こゝかしこの有様など御覽す。女住ませたる方は心殊に磨きて、月入れたる眞木の戸口、氣色ばかり押し明けたり。うち休らひて何かと宣へど、女はかうまで氣近く見え奉らじと思ふに、物歎かしてうち解けぬ心様を、君は、「こよなうも思ひ上りぬるかな。さしもあるまじき際の人だに、かばかりいひ寄りぬれば、心強うはあらぬものを。我がかくやつれたるに侮らはしく思ふにや。」と、口惜しう様々に思し惱めり。心競べに負けむこそ人聞悪けれなど亂れ恨み給ふ様、げに物思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。近き几帳の紐に箏の琴の引き鳴らされたるも、今までしどけなく掻きまさぐりけるよとをかくし思しければ、「この琴をさへや。」など、よろづに宣ふ。

睦言を語り合はせむ人もがな

憂き世の夢もなかばさむやと

女君、

明けぬ夜にやがて惑へる心には

いづれを夢とわきて語らむ

ほのかなる氣配、伊勢の御息所にいとよう似たり。女は何心もなく居たりけれど、いみじう心憂かりければ、近かりける障子の内に心疾く入りて、いかで固めけるにか、いと堅ければ、君は強ひても押し立ち給はぬ様なり。されどいかでかかてのみあらむ。人様いと氣高く、そびえて、心耻かしき氣配ぞしたりける。君はかう淺からぬ契を思すにもいみじくあはれなりと思ひ給ふ。見優りしたるなるべし。常は厭はしき夜の長さも、疾く明けぬる心地すれば、人に知られじと思すにも、心あわたしうて、細やかに語らひ置きて出で給ひぬ。御文は御心の鬼に今日はいと忍びてぞある。岡邊にても、かゝることいかで世に漏らさじと慎みて、御使も事々しくもてなきぬを胸痛く思へり。かくて後は忍びつゝ時々おはす。おのづから物いひさがなき海士の子もや見聞くらむと、少し思し憚る程を、さればよと女君の思ひ歎けば、げにいかならむと、入道も極樂の願をば忘れて、たゞこの君の御氣色を待つことにす。今更に心を惱ますもいとほしげなり。

二條の姫君の、風のつてにも漏り聞き給はむに、戲にても、「心の隔ありける。」と思ひ疎まれむと心苦しう思さるゝも、御志の淺からねばなむめりかし。かの姫君は、かゝる方の事をば、さすがに心止めて恨み給へりしものを、なとてあやなきさびにつけてさ思はれけむなど、合更取り返さまほしう、この人の有様を見給ふにつけても戀しさの慰む方なければ、例よりも御文細やかに書き給ひて、奥に、「誠や、我ながら心より外のなほざり事にて、恨まれ奉りし折々を思ひ出づるさへ胸痛きに、また怪しう物はか

なき夢をこそ見侍りしか。かう問はず語り聞ゆるに、隔なき心の程を思し合はせ給へ。誓ひしことも。など書きて、

○誓ひしことも、古歌「忘れじと誓ひしことを過たば、三笠の山の神もことわれ。」三笠の山の神は、春日明神。「ことわれ」は、是非を裁判して罰し給へ。

「何事につけても

しほくと先づぞ泣かるゝ假初の

みるめは海士のすさびなれども

○「こゝにて見る人は假初の戯に過ぎざれど、我が身の罪にしほくと泣かる。」

とあり。御返、何心なくらうたげに書き給ひて、終に、「忍びかねたる御夢物語につけても、思ひ合はせらるゝ事多かれば、

うらなくも思ひけるかな契りしを

まつより浪は越えじものぞと

○「まつ」は、「待つ」と「松」に掛く。また、契りし心の變らぬを、末の松山浪越さじといふ。末の松山は、陸奥の名所。

○「契りし事を變へ給はぬものと信じて何心なく待ち奉りしに、思ひ掛けなき御音信なりき。」

わいらかなれどもたゞならずかすめ給へるを、いと哀れにうち置き難く見給ひて、その餘波より久しう岡邊の家にも渡り給はず。女君、豫て思ひしも著きに、今ぞ誠に身も投げつべき心地する。

○豫て思ひしも著きに、前々よりうち棄てらるゝこともやあらむと危みし通りなるをいふ。

「行く末短き親ばかりを頼もしきものにして、いつの世に人並々になるべき身とも思はざりしかど、何となく過しつる年月は、何事にか心を悩ましけむ。かういみじく物思はしき世にこそありけれ。」と、よろづに悲しけれど、なだらかにもてなして、憎からぬ様に見え奉る。君も月日に添へてあはれと思し増せど、姫君の心許なく年月を過し給ひ、たゞならず思ひおこせ給ふらむがいと心苦しければ、獨臥しがちにて過し給ふ。繪を様々描き集めて思ふ事ども書きつけ給へる、見む人の心に染みぬべき様なり。いかで空に通ふ御心なるらむ、二條の姫君も、物の哀れに慰む方なく覺え給ふ折々は、同じやうに繪を描き集め給ひつゝ、やがて我が御有様を、日記のやうに書き給へり。いかなる御草子にかありけむ。

年かはりぬ。内に御薬の事ありて世の中様々にのしる。當帝の皇子は、右大臣の御女、承香殿の女御の御腹に男御子生れ給へれど、二つになり給へば、いと幼なし。

○右大臣、この右大臣は太后の父にはあらず。太后の父の右大臣は太政大臣に昇りて、昨年薨去せり。

春宮にこそは譲り給はめ、公の御後見をし世を政つべき人を思しめぐらすに、この源氏の君のかく沈み給ふこといと可憐しう、あるまじき事なれば、遂に太后の御諫をも背きて、赦され給ふべき定出で來ぬ。去年より太后も御物怪に惱み給ひ、様々の物のさとしうち頻り騒がしけれど、いみじき御憤どもをし給ふ験にやよろしうおはしましたれど、帝は御目の惱さへこの頃重くならせ給ひて、物心細く思されければ、七月二十餘日の程に、また重ねて京へ歸り給ふべき宣旨下る。終の事と思ひしかど、世の常なきにつけても、いかになり果つべきにかと歎き給ひしに、かう俄なれば嬉しきにつけても、またこの浦を今はと離れむことを思し歎き給ふ。入道もさるべき事と思ひながら、うち聞くより胸塞がりて覺ゆれど、君、思のごと榮え給ひてこそは我が思もかなふにはあらめなど思ひ直す。この頃は君も夜離れなく語らひ給ふ。六月ばかりより女君、心苦しき氣色ありて惱みけり。かく別れ給ふべき頃なれば、生憎なるにやありけむ。君は、ありしよりもあはれに思して、怪しう物のみ思ふべき身にもありけるかなと思し亂る。女君は更にもいはす思ひ沈みたり。いと道理なりや。昔思の外に悲しき道に出で立ち給ひしかど、さりとも終には行き廻り來なむと、かつは思し慰めき。この度は嬉しき方の御出立なれど、またやは歸り見るべきと思すにいと哀れなり。さぶらふ人々は、程につけて喜び思ふ。京よりも御迎に人々參り心地よげなれど、主の入道は涙に暮れて月も立ちぬ。折さへ物あはれなる空の氣色に、君は、「なぞ心づから、今も昔も、そゞろなる事にて身をはふらかすらむ。」と、様々に思し亂れたるを、心知

れる人々は、「あな僧、例の御癖ぞ。」と見奉るめり。「月頃はつゆ人にもさる氣色見せ給はず。時々這ひ紛れなどし給へるに、この頃生憎に人の心亂し給ふ。」と突きじろふ。少納言の申し出でし始のことなどさゝめきあへれば、良清はたゞならず思へり。

○始のこと 源氏の君、痲病に罹り北山に禁厭し給ひし時、良清始めて明石の入道の女のことを申し出でたり。若紫の巻に出づ。人々は良清の手引にやなどいふに、良清は心苦しく思ふなり。

御出立も明後日ばかりになりて、例のやうには更かさで渡り給へり。これまではさやかにも見給はぬ女君の御容貌など、いと氣高き様して見棄て難く口惜しう思さる。さるべき様にして京へ迎へむと思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰め給ふ。君の御容貌、有様、はた更にもいはす、年頃の御行にいたく面瘦せ給へるしも、いはむ方なくめでたく、女君の心苦しげなる氣色にうち涙ぐみ給ひつゝ、哀れに深く契り給へるは、たゞかばかりを幸にしてもなどか止まざらむとまでこそ見ゆめれど、女君は我が身の程を思ふに物思ひ盡させず。浪の聲も秋の風にはなほ響異なり。鹽焼く煙かすかにたなびきて、あはれ取り集めたる所の様なれば、君、

この度は立ち別るとも 藻鹽やく
けぶりは同じ空になびかむ

○「この度は別れても、鹽を製する煙の同じ空に靡くが如く互に同じく思ひ交さむ。」

と宣へば、女君、

かきつめて海士のたく藻の思ひにも

今はかひなきうらみだにせじ

○「掻き集めたる藻を焚く海士の火の如き思ひなれど、賤しき我が身なれば、恨み甲斐もなき恨はせし。」

哀れにうち歎きて、言少なれども、さるべき折の御答など淺からず聞ゆ。常にゆかしがり給ふ物の音を、更に聞かせ奉らざりつるを、いみじう恨み給ふ。「さらばかたみにも忍ぶばかりの一事、一擧」と宣ひて、京よりもておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心殊なる調をほのかに掻き鳴らし給へる、深き夜の澄めるに、譬へむ方なし。入道、堪へ難く、自ら箏の琴取りてさし入れたり。女君、いと涙さへ催されて止むべき方なきに誘はるゝなるべし、忍びやかに調べたる、いと上衆めきたり。入道の中宮の御琴の音を、またなきものに思ひまゐらせ、華やかにあなめてたと、聞く人の心動きて、御容貌さへ思ひ遣らるゝ、げにいと限りなき御琴の音なり。この女君のは飽くまで弾き澄し、心にくゝ妬き音を優れる。君だにまた耳馴れ給はぬ手などを、心やよしき程に弾きさしたる、飽かず思さるゝにつけても、月頃、など強ひても聞かざりつらむと悔しう思さる。心の限り行く先の契をのみし給ふ。「琴はまた掻き合はするまでの形見に。」と宣ふ。女君、

なほざりに頼め置く一ことを

盡させぬ音にやかけて忍ばむ

○「なほざりに頼ませ置き給ふ一言（一琴）なるべけれど、盡きぬ琴の音と共に長く思ひ出づべし。」

いふともなき口ずさびを、君は恨み給ひて、

逢ふまでの形見に契る中の緒の

しらべはことに變らざらなむ

○「また逢ふまでの形見に残す琴の中の緒の調子は、殊に變らでありたし。」君の心も變らでありたし。

この調變らぬ先に必ず相見む。」と頼め給ふゆり。

○調變らぬ先に、琴の調子は久しき間には自然に變るより、間もなく相見むの意をいふ。

されど、女君はたゞ別れむことのいみじく悲しきに、思ひ咽びたるもいと道理なり。

立ち給ふ曉には、夜深う出で給ひて、御迎の人々も騒がしければ、心も空なれど、人間をはからひ

て、君、

うち捨て、立つも悲しき浦浪の

餘波いかにと思ひ遣るかな

御返

○「浦浪の餘波」は、浪の返りし後にて、こゝは我が立ち出でし後に止る女君の心をいふ。

年經つる苦屋も荒れてうきなみの

返る方にや身をたぐへまじ

○「幾年かを過せし苦屋も、君おはしまさず荒れたる後は、身の憂さに、返る波に身を任せて海にや入りなむ。」

と、うち思ひけるまゝなるを見給ふに、忍び給へどほろ／＼とこぼれぬ。心知らぬ人は、かゝる御住居なれど、年頃といふばかりに馴れ給へるを、今はと思すに、さもあることぞかしなど見奉る。良清などは、君の御志の疎ならず思すなめりかしと、憎くぞ思ふ。人々は嬉しきにも、「げに今日を限りにこの渚を別るゝこと。」など哀れがりて、口々いひて、しほたれあへることどもあめり。されど何かはとてなむ。入道、今日の御設いと嚴めしう仕うまつれり。人々は下の品まで旅の装束珍しき様にて、いつの間にかしけむと見えたり。君の御装はいふべくもあらず。御衣櫃數多掛けさぶらはす。都の苞にしつべき御贈物どもと思ひ寄らぬ限なし。今日着給ふべき狩の御衣に、女君、

よる浪にたち重ねたる旅衣

しほどけしとや人の厭はむ

○「よる浪」は、「たち重ね」といはむ爲の詞。「しほどけし」は、潮に濡れたるをいふ。こゝは涙に濡れしをいふ。

○「葦ち縫ひて重ねたる旅衣の、涙に濡れしを、君や厭ひ給はむ。」

とあるを御覽じつけて、騒がしき折なれど、

形見にぞ更ふべかりける逢ふことの

日數隔てむ中のころもを

○「また逢ふまで日數経べければ、この衣を形見に着更ふべし。」

とて、「志あるを」とて着更へ給ふ。着馴れたるをば遣はし給ふ。げに今一重忍ばれ給ふべきことを添ふる形見なめり。いはむ方なき御衣に匂の移りたるを、いかで人の心にも染めざらむ。入道、「世を背き侍りにし身なれば、今日の御送に仕うまつらぬこと。」など申してかひを作れば、いとほしけれど、若き人は笑ひぬべし。

○かひを作れば、唇をゆがめて泣きぬべき顔するなり。

世を海にこゝらしほじむ身となりて

なほこの岸をえこそ離れぬ

○「世を背きて、數多世を經れど、なほ煩惱を去り得ず。」

「子を思ふ心の間はいと感ひぬべく侍れば、

○子を思ふ 後撰集「人の親の心は間にあらねども子を思ふ道に感ひぬるかな。」による。女君の身の心に掛るをいふ。

境までだに見送り奉らす。思し出でさせ給ふ折侍らば。」など申して御氣色賜はる。君はいみじう物を哀れと思して、うち赤み給へる御まみのわたりなどはむ方なく見え給ふ。「思ひ捨て難き筋もあんなれば、今いと疾く見直し給ひてむ。

○見直し給ひてむ 我が志の淺からぬを知り給ふべし。京に迎ふべきをいふなり。

たゞこの住處こそ見捨て難けれ。いかゞすべき。」とて、

都出でし春の嘆きに劣らめや

年経る浦を別れぬる秋

とて、押拭ひ給へるに、入道はいと物覚えすしほたれまさる。起居もあさましうよろぼふ。まして女君の心地は譬ふべき方なくて、かうしも人に見えじと思ひ鎮むれど、身の賤しきを本なれば、術なきことなれど、うち棄て給へる恨の遣る方なきに、面影添ひて忘れ難きまゝに、猛きことゝはたゞ涙に沈めり。母君も慰めかねて、「何にかく心盡しなることを思ひ初めけむ。すべて僻々しき人の心に從ひける怠りぞ。」といふ。入道、「あなさま、君の思し棄つまじき筋もあれば、さりとも思す所あらむ。思ひ慰

めて御湯などをだに參れ。あな忌々しや。」とて、片隅に寄り居たり。乳母、母君など入道の僻める心はいひ合ひつゝ、「いつしかいかでと年月を頼み過し今や望かなふところ頼みまらせつれ。心苦しき別れを物の始に見るかな。」と嘆くを見るもいとほしければ、入道いと呆けられて、晝は日一日寝暮らし、夜は起き居て、「數珠の行方も知らずなりにけり。」とて、手を押し摺りて御佛を仰ぎ居たり。弟子どもに侮られては、月夜に出で、行道するまゝに遺水に倒れ入りにけり。岩の片側に腰を突き害ひて病に臥したる程になむ少し物紛れける。

君は難波の方に渡りて御祓し給ひて、住吉にも、「道の程平らかにて、やがて色々の願果し申すべき」由、御使して申させ給ふ。俄に所狭くなりて自らはこの度は詣で給はず、異なる御道遙もなく急ぎ京に入り給ひぬ。二條の院におはしましたつきて、都にありし人も御供の人も夢の心地して行き逢ひ、喜泣もいみじきまで立ち騒ぎたり。姫君も、甲斐なしと思し捨てつる命、嬉しう思さるらむかし。いと美しげにねびまさり給ひて、御物思の程に所狭かりし御髪少しへがれたるしもいみじうめでたきを、君は、今はかくて見るべきぞかした、御心落ち居るにつけては、またかの飽かず別れし人の物思ふらむ様、心苦しう思し遣らる。世と共にかゝる方にて御心の暇なきや。かの人の事どもも姫君に宜ひ出で給へり。思し出で給へる御氣色の淺からず見ゆるに、姫君もたゞならずとや見奉り給ふらむ。「身をば思はず」などほめかし給ふも、をかしうらうたく思ひ給ふ。

○身をば思はず 拾遺集、「忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな。」による。
「忘れられし我が身を何とも思はず、誓ひし人の、誓に背きし爲に、命なくなりぬべきを惜む。」

かつ見るだに飽かぬ御有様を、いかで年月隔てつるぞと、あさましきまで思はずに、とり返し世の中いと恨めしうなむ。程もなく元の御位に改りて、員より外の權大納言になり給ふ。

○員より外 大納言には定員あり。定員外の大納言は即ち權大納言なり。

次々の人もさるべきは皆その官返し賜はり給ふ。かく世に許さるゝにつけて、枯れたりし木の春にあへる心地していとめでたげなり。召ありて君、内裏に參り給ふ。御前にさぶらひ給ふに、ねびまさり給ひて、いかでさる煩はしき住居に年經給ひけむと、見奉る女房など、故院の御時よりさぶらひて老いたるは、悲しくて今更に泣き騒ぎめでまらさす。上も耻かしうさへ思し召されて、御装など殊に引き繕ひて出でおはします。上は御心地例ならず月頃經させ給ひければ、いたう衰へさせ給へれど、昨日今日ぞ少しよろしう思されける。御物語しめやかにありて夜に入りぬ。十五夜の月面白う靜かなるに、昔の事かき崩し思し出でられて、しほたれさせ給ふ。物心細く思さるゝなるべし。「昔聞きし物の音ども、聞かで久しうなりにけるかな。」と宣はするに、君、

わたつ海に沈みうらぶれ 蛭の子の

足立たざりし年は 經にけり

○朗詠集、「かぞいろはあはれと見ずや 蛭の子は三年になりぬ足立たずして。」「かぞいろはは、父母。

「蛭の子」は、蛭子の命。古事記、日本書紀に據れば、「伊弉諾、伊弉冉二神の御子、蛭子の命は生れて三年足立たず、葦の舟に乗せて海に流す。」とあり。源氏の君、須磨明石に居しも三年なり。

と聞え給へば、帝、いと哀れに心耻かしう思されて、

宮柱めぐり合ひける時しあれば

別れし春のうらみ残すな

○また古事記、日本書紀に、伊弉諾、伊弉冉の二神、八尋殿を建て給ひ、宮柱をめぐりし事あり。

「宮柱」は「めぐり」といふ爲の詞。

○「悦ばしき時にめぐり會ひたれば、春の頃都に別れし恨も忘れ給へ。」

と、いとなまめかしき御有様なり。故院の爲に御八講行はるべしと、まづ急がせ給ふ。

○御八講 法華經八卷を讀誦する法會。五日間に行ふ。

春宮を見奉り給ふに、こよなく大人びさせ給ひて、君を珍しと悦び給へるを、限りなくあはれと見奉り給ふ。御才もいとこよなく優らせ給ひて、世を保たせ給はむに憚あるまじく賢う見えさせ給ふ。入道の中宮にも、御對面あり。誠や、かの明石には返る波につけて御文遣し給ふ。人には引き隠して細やかに書き給ふめり。「波のよるくゝいかに、

歎きつゝあかしの浦に朝霧の

たつやと人を思ひやるかな

○「歎きつゝ夜を明かしたる明石の浦に、朝霧の立ちて、いと物思し給ふかと君を思ひ遣る。」

かの大貳の五節の女

○大貳の五節の女 五節の舞姫なりし太宰大貳の女、源氏の君と語らひしことあり。大貳京に上る

途中、須磨にて君と消息ありしこと、須磨の巻に見ゆ。

君、かく京に歸り給へば、人知れぬ物思ひも覺めぬる心地して、目くなき作らせて、御文さし置かせけり。

須磨の浦に心を寄せし船人の

やがてくたせる袖を見せばや

○「須磨の浦に心を寄せし我は、そのまゝ歎きつゞけ、涙に朽ちたる袖を見せまゐらせたし。」

君は、手などこよなく優りにけりと見知り給ひて、御返遣し給ふ。

かへりてはかごとやせまし寄せたりし

餘波に袖のひがたかりしを

○「却りて我より君を恨みたしと思ふ。船を寄せ給ひし後の悲しさに、袖は涙に濡れてのみありき。」

ありし日に飽かずをかしと思し、御志の餘波なれば、かう驚かされ給ひて、いと忘れ難けれど、この

頃はさやうの御振舞、更に慎み給ふゆり。花散里の君などにもたゞ御消息ばかりなれば、心許なくなかく恨めしげなりとなむ。

○花散里の君 これも源氏の君の通ひ所。花散里の巻にあり。須磨の巻にも都を立ち出で給ふ所などにあり。

滯 標 みつくし

須磨にてさやかに見給ひし夢の後、君は故院(父帝)の御事を心に掛けまゐらせ給ひて、いかでか沈み給ふらむ罪救ひ奉ることをせむと、

○沈み給ふらむ罪 須磨にて見給ひし夢に、故院、罪に沈み給ふ旨を告げ給へるをいふ。明石の巻にあり。

御心の中に思し歎きければ、かく京に歸り給ひては、まづその御用意し給ふ。神無月(十月)に御八講し給ふ。

○御八講 法華經八卷を五日間に讀誦する法會。

世の人靡き仕うまつること、昔のやうなり。太后(皇太后)なほ御惱重くおはします中にも、遂にこの君を消たすなりぬること、心やましく思しけれど、帝は院の御遺言を思ひ給ひて、物の報ありぬべきこと、思しけるなれば、かく直し給へば、御心地涼しくなむ思しける。時々起り惱ませ給ひし御目もさわやぎ給ひぬれど、大方世に長くえあるまじきこと、のみ心細く思して、常に召ありて、源氏の君、參り給ふ。世の中の事なども隔なく宣ひなどしつゝ、御本意のやうなれば、大方の世の人も、嬉しきことに喜びま

ゐらせけり。明くる年の二月に、春宮、御元服の事あり。十一になり給へど、御齡より大きに大人しう清らにて、内にもいとめでたしと見給ひて、世の中譲りまゐらせ給ふべき事など、懐かしう宣ひ知らせ給ふ。同じ月の二十餘日、御國護の事假(御假位)に仰出で給へば、太后思しあわてたり。帝、「甲斐なき様になりなむも、心のどかに御覽せらるべきことを思ひ侍るなり。」とぞ慰め給ひける。坊には承香殿の御腹の御子居給ひぬ。

○承香殿 女御にて、この時右大臣なりし人の女なり。

世の中改まりて、引き換へ今めかしき事多かり。源氏の君、内大臣になり給ひぬ。左右の大臣數定まりてあれば、かくて加はり給ふなりけり。やがて世の政をし給ふべきなれど、「さやうの事繁き職には堪へずなむ。」とて、致仕(御免)の左大臣攝政し給ふべき由、譲りまゐらせ給へど、左大臣、「病によりて位をも返し奉りてしを、いよく老の積り添ひて、はかしくしき事侍らじ。」と、承け引き申し給はず。されど、他の國にも、時移り世の中定まらぬ折、深き山に跡を絶えたる人だにも、治まれる世には、白髪を

○白髪をいぢぢず 漢の高祖の時、商山に隠れし四老儒が太子に仕へしをいふ。これを商山の四皓といふ。皓は白なり。

病に沈みて返し奉りし位を、世の中變りて、また改めて返り給はむに、更に咎あるまじう、公私定

めらる。さる例ども多かりければ、左大臣もえ争ひ果て給はで、太政大臣になり給ふ。御年も六十三にぞなり給ひける。世の中すさまじきにより籠り居給ひしに、取り返し華やぎ給へば、今まで御子ども、沈むやうにし給へるを、皆各浮び給ふ。取り分きて宰相中將は權中納言になり給ふ。かの四の君の御腹の姫君十二になり給ふを、内裏に參らせむとかしづき給ふ。高砂謠ひし若君も元服して殿上などせさせていと思ふ様なり。

○高砂謠ひし若君、權中納言の次子、母は元の右大臣の四の君。「高砂」は備馬樂の一。高砂謠ひしこと、賢木の巻にあり。

○殿上、昇殿を許さるゝなり。童殿上といふ。

この權中納言は腹々に御子ども、いと數多次々に生ひ出でつゝ、賑はしげなるを、源氏の内大臣は羨み給ふ。大殿腹の若君は人より殊に美しうて、内裏、春宮の殿上し給へば、故姫君の失せ給ひし歎を、大宮、大臣は、また更に改めて思し歎く。されど姫君のおはせぬ後も、たゞこの源氏の君の御光に、よろづもてなされ給ひて、年頃思し沈みつる憂さも餘波なきまで榮え給ふ。君はなほ御心ばへ昔に變らず、折節毎にはこの殿に渡り給ひなどしつゝ、若君の御乳母達、さらぬ人々も年頃まかんで散らざりけるは、皆さるべき事に觸れつゝ、よすが附けむことを思し置きつれば、幸人多くなりぬべし。二條の院にも同じごと君を待ち參らせける人々をば、あはれなるものに思して、年頃の胸明くばかりと思し給ひ、中

將、中務やうの女房には、程々につけつゝ情を見せ給ふに御暇なくて、外歩きもし給はず。二條の院の東なる宮、故院の御處分なりしを、二なく改め造らせ給ふ。花散里の君などやうの心苦しき人々を住ませむなど、思し當て、繕はせ給ふ。

誠や、かの明石の女君の心苦しげなりし事を、いかにと思し忘るゝ時なけれど、公私忙しき紛れに思すまゝにも訪ひ給はざりけり。三月朔日の程、この頃やと思し遣るに、人知れずいと哀れにて、御使遣す。疾く歸り參りて、「十六日になむ、女にて平らかに物し給ふ。」と告げまらる。珍しと疎ならず思はず。などて京に迎へてかゝることをもせさせざりけむと、口惜しう思さる。今行末の事を思すに、「住吉の神のしるべあり、誠にかの女君も世になみ／＼ならぬ宿世ありて、僻々しき親も及びなき心を使ひしにやありけむ。さるにては長き御后にもなるべき人の、卑しき世界に生れたらむは、いとほしう畏くもあるべきかな。この程過して京に迎へてむ。」と思して、東の院急ぎ造らすべき由催し仰せ給ふ。明石わたりには、はか／＼しき人もあり難からむと思し遣りて、故院にさぶらひし宣旨の女は、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、母など失せて、かすかなる世を経けるが、はかなき人にかゝはりて子生みけるを、知る便ありて事の序に語りまらせける人を召して、さるべき様に宣ひ給ふ。かの女はまだ若くて何心もなき人にて、且暮人知れぬあばら屋にてながめ過す心細きなれば、深うも思ひたどらず、君の御あたりを偏にめでたう思ひまらせて、參るべき由申したり。君はいとあはれに思

して、出だし立て給ふ。物の序にのみじう忍び紛れてかしこにおはしましたり。女はさは聞えながら、またいかにせましと思ひ亂れけるに、かゝる御心のいと辱かたじけなきによりづ思ひ慰めて、「たゞ宣はせむま（参り申す）に。」と申す。よろしき日なりければ急がし立て給ひて、「思ひ遣りなきやうなれど、思ふ様異なる事にてなむ。

○思ふ様異なる事 「普通と異なりて后にもと思ふなれば、思ひ遣りなきやうなれど、君を遣すなり。」の意なり。

自らもさる怪しき住居に結ばれたりし例を思ひよそへて、暫しは念じ給へ。」など、事の有様くはしう語らひ給ふ。この家の様、いひ知らず荒れて、さすがに大きな家の、木立など疎ま（疎ま）しげなり。いかでこゝには過（す）しつらむと見給ふ。女は内裏の宮仕時々せしかば、見給ふ折もありしに、今はいたく衰へにけれど、人様若やかにをかしければ、御覽じ棄てられず。とかく戯れ給ひて、「取り返しつべき心地こそすれ。いかに。」と宣ふにつけても、女も、「げに同じうは御身近く仕うまつらば、憂き身も慰みなまし。」と見奉る。君、

かねてより隔てぬ中（詞シキ中ニアラオド）と馴らはねど

別れは惜しきものにぞありける

慕（附帯ヒテ行キタシ）ひ行きやせまし。」と宣へば、女、うち笑ひて、

うちつけ（羨シ當リテシ）の別を惜むかごと（口實トシテ）にて

思はむ方に慕ひやはせぬ

○「羨し當りて我と別れを惜むを口實として、思ふ明石の上を慕ひ行き給ふなるべし。」

馴れくしく聞ゆるをいたしと思す。車にてぞ京の程は行き離れける。君はいと親しき人さし添へて、ゆめ洩すまじく口堅め給ひて遣はす。御佩刀（口止メ）、さるべき物など所狭（守刀）きまで思し遣らぬ限なし。この乳母にも、あり難う細やかなる御（御心付）勞りの程淺からず。入道の思ひかしづくらむ有様思し遣るもほゞ笑まれ給ふこと多く、また哀れに心苦しく、たゞこの事のみ御心に掛るも、淺からぬ契（契）にこそは。御文にも姫君を疎（疎）にもてなし給ふまじき事を返すく、戒め給へり。

いつしかも袖うち掛けむ少女子（自ラハケ、マム）が

世を経てなづる岩の生先（岩ノ如キ）

○「世を経てなづる」は、佛説に、四十里程の大きな石を三年に一度、天女が羽衣にて撫で、磨り盡したる間を一劫といふによる。拾遺集に、「君が代は天の羽衣袴に来てなづとも盡きぬ巖（巖）ならむ。」とあり。「天の羽衣」は、天女の衣裳。極めて軽き物なり。稀に来る天女がその軽き羽衣を以て巖をなづるにては巖の磨り盡くる折なきなり。

○「生先久しかるべき姫君をいつ呼び迎へて自ら育てむ。」

津(つ)の國(くに)までは船(ふね)にて、それよりあなたは馬(うま)にて急(いそ)ぎ着(き)きぬ。入道(いどう)待ち取り喜び長(なが)りまゐらすること限りなし。そなたに向(むか)きて拜(ひら)みて、あり難(あやま)き御心(ごこころ)ばへを思(おも)ふに、いよ／＼いたはしう恐(おそ)しきまで思(おも)ふ。兒(こ)の御様(ごさま)、いとみじきまで美(うつく)しうおはすること類(たぐひ)なし。「げに君(きみ)の御心(ごこころ)に、かしづきまゐらせむと思(おも)したるもうべなりけり。」と、乳母(めのと)は見奉(みまも)るより、かく怪(あや)しき旅(たび)に出(い)で立ちて、夢(ゆめ)の心地(こころ)しつる歎(なげ)も醒(さ)めにけり。いと美(うつく)しうらうたく覺(おぼ)えて扱(あ)ひまゐらす。女君(おんなきみ)も、月頃(つきがら)物をのみ思(おも)ひ沈(しづ)みて、いと弱(よわ)れる心地(こころ)に、生(な)きたらむとも覺(おぼ)えざりつるに、この御心(ごこころ)ばへに少(すこ)し慰(なぐさ)められて、頭(かぶ)などもたげらる。御使(ごつかひ)にも二(ふた)なき志(こころ)を盡(つく)す。御使(ごつかひ)疾(はや)く歸(かへ)りなむと急(いそ)げば、女君(おんなきみ)も思(おも)ふこと少し聞(き)えて、

ひとりしてなづるは袖(そで)の程(ほど)なきに

おほふばかりの蔭(かげ)をしぞ待つ

○「我一人にてむは至(いた)らぬこと多(おほ)ければ、君(きみ)の廣(ひろ)き育(そだ)みを待つ。」

と聞(き)えたり。君(きみ)は怪(あや)しきまで御心(ごこころ)に掛(か)り、ゆかしう思(おも)さる。今(いま)までこの院(いん)の女君(おんなきみ)には、殊(こと)に現(あら)して聞(き)え給(たま)はねば、もし外(ほか)より聞(き)き給(たま)ふこともこそあらめと思(おも)じて、「かくこそあんなれ。怪(あや)しうねぢけたる事(こと)なりや。さもおはせしかと思(おも)ふあたりには心許(こころやす)なくて、思(おも)の外(ほか)にあるこそ口惜(くちやく)しくなむ。女御(おんなご)子(こ)にさへあんなれば、いとこそ物(もの)しけれ。」

○物(もの)しけれ 當時(たうじ)、女(おんな)は后(ご)にもなり得(え)べきより、男(おとこ)より喜(よろこ)ばれたるが、その女子(おんな)が紫(むらさ)の上(うへ)ならぬ明

石(いし)の上(うへ)の腹(はら)に生(な)れたるを遺(い)憾(げん)なりと思(おも)ふなり。

尋(たず)ね知らでもありぬべき事(こと)なれど、さも思(おも)ひ捨てまじき事(こと)なり。呼(よ)びに遣(つか)りて見(み)せ奉(まも)らむ。憎(にく)み給(たま)ふなよ。」と宣(のたま)へば、女君(おんなきみ)は面(おもて)うち赤(あか)みて、「怪(あや)しう常(つね)にかやうなる筋(すぢ)、宣(のたま)はるこそ我(われ)ながら疎(うす)ましけれ。さる物憎(ものにく)みをいつ馴(な)らふにか。」と怨(うら)じ給(たま)へば、君(きみ)、いとよくうち笑(わら)みて、「そよ、誰(たれ)が馴(な)らはしにかあらむ。我が心(こころ)にもあらぬ事(こと)を思(おも)ひ遣(つか)りて、物怨(ものうら)じなどし給(たま)ふよ。思(おも)へば悲(かな)し。」とて、果(は)々はまめやかに涙(なみだ)ぐみ給(たま)ふに、女君(おんなきみ)は、年頃(としがら)飽(あ)かず戀(こひ)しと思(おも)ひまゐらせ給(たま)ひし御心(ごこころ)の中(なか)、折々(せつせつ)の御文(ごぶん)通(とほ)はしの有(あ)様(さま)など思(おも)し出(い)で、よろづの事(こと)、君(きみ)のすさびにこそあれと、思(おも)ひ消(け)たれ給(たま)ふ。「この人(ひと)をかうまで思(おも)ひ遣(つか)り言(こと)問(と)ふは、なほ思(おも)ふ事(こと)の侍(さむらい)るぞ。」

○思(おも)ふ事(こと) 明石(あけいし)の上(うへ)の女(おんな)を后(ご)に奉(まも)らむの心(こころ)なり。

早くより聞(き)えなば、また僻心(ひがこころ)得(え)もし給(たま)ふべければ。」と宣(のたま)ひさして、「人柄(ひとがら)のをかしかりしも、所柄(ところがら)にや珍(めづ)しう覺(おぼ)えにき。」など語(かた)り給(たま)ふ。哀(あは)れなりし夕(ゆふ)の煙(けむり)、

○夕(ゆふ)の煙(けむり) 源氏(げんじ)の君(きみ)明石(あけいし)にての歌(うた)、「この度は立ち別(わか)るとも薄(うす)曇(くも)やく煙(けむり)は同じ空(そら)に懸(か)かむ。」をいふ。
明石(あけいし)の巻(まき)にあり。

いひし事(こと)など、隔(へ)なく宣(のたま)ひて、「まほならねど、その夜(よ)なむ容(かた)貌(もち)ほの見(み)し。琴(こと)の音(ね)のなまめきたりし。」など、すべて御心(ごこころ)止(と)れる様に宣(のたま)ひ出(い)づるにつけて、女君(おんなきみ)は、「我(われ)はまたなくこそ悲(かな)しと思(おも)ひ歎(なげ)きしか。す

さびにても御心を分け給ひけるよ。」と、たゞならず思ひつゞけられて、我とうち背きながめて、「哀れなりし世の有様かな。」と、獨言のやうにうち歎きて、

思ふ 同士 靡く方には「あらずとも

我ぞけぶりに先立ちなまし

○「同じ方に靡かむと契り給へる思ふ同士の類ならねども、我は先づ煙となりて立ち上らむ。」

君、「何とかや。あな心憂や。」

誰により世をうみ山に行きめぐり

絶えぬ涙にうちしづむ身ぞ

○「海山にさすらひて絶えず涙に沈みし我は、誰の爲なりしぞ。」と、紫の上を恨みしなり。

いでや、いかで我が心を見せ奉らむと思ふにも、命こそ心になん難きものなめれ。

○命こそ、「命長ければ、いつか我が心を見せ奉らむと思へど、たゞ命のみは我が心のまゝならざるは口惜しきなり。」

はかなきことにて人に心置かれじと思ふも、たゞ君を思ふ一つ故ぞや。」とて、箏の琴引き寄せて、たゞ掻き合はせ給ひて、そゝのかし給へど、かの琴の音の優れたりけむも妬きにや、手も觸れ給はず。いと大様に美しうたをやかなれども、さすがに執念き所つきて、物怨じし給へるが、なか／＼愛敬づき

て、腹立ち給ふをも、をかしう見所ありと思す。

君は五月五日ぞ五十日には當るらむと、人知れず敷へ給ひて、ゆかしう哀れに思し遣る。何事も甲斐ある様にもてなさば嬉しからまし。口惜しの業や。などてさる心苦しき所に出で來たるよと思す。男御子ならましかば、かうしも御心に掛け給ふまじきを、我が宿世も、この事につけてぞかたほなりけりと思さる。

○かたほなりけり、完全ならず。折角生れし女子が、身分低き明石の上の腹なるをいふ。

御使出し立て給ふ。「必ずその日違へすまかり着け。」と宣へば、五日に行き着きぬ。思し遣れる事ども、あり難うめでたき様にて、まめやかなる御訪もあり。

海松や時ぞともなき蔭に居て

何のあやめもいかにわくらむ

○「海松」は海草、みるともいふ。「時ぞともなき」は、何時といふことなき。「あやめ」は、物の色、模様などの區別。この日五月五日菖蒲の節句なれば「あやめ」といひ、「いかに」は、五十日の祝をもいふ。

○「海松の何時といふことなく岩の蔭に居る如く、都より遠き田舎に居て、五十日の祝も平日と區別もなく迎へたらむかと心許なし。」

「心のあくがる、まてなむ。(阿コガル) なほかくてはえ過すまじければ、京へ思ひ立ち給ひね。(京へ上リテ渡) さりとも心許なき事(氣遣ナク)はよもあらし。」と書き給へり。入道例の喜泣して居たり。かゝる折は、生けるかひも作り出でたる、道理なりと見ゆ。

○生けるかひ 「かひを作る」は唇をゆがめて泣顔するをいふ。「生ける甲斐」の意にもいふ。源氏の君、明石を立ちし時、入道見送りて「かひを作りて」云々と明石の巻にあり。かの時は悲しさの爲なりしを、この度は嬉しさに、「生ける甲斐あり」と喜泣するなり。

こゝにてもよろづ所狭きまで思ひ設けたりければ、この御使なくば、闇の錦にて暮れぬべかりけり。

○闇の錦 源氏の君に知られずして止むべかりしなり。

乳母も、この女君のあはれに思ふやうなる御心ばへを、語らひ人にして世の慰めにしけり。これにをさ(コノ乳母ニ)をさ劣らぬ人も、迎へてあらずれど、こよなく衰へて世を背きぬべき宮仕人などこそあれ、これはこよ(大切ニサレ)なう兒めき思ひ上れり。聞き所ある世の物語などして、源氏の君の御有様、世にかしづかれ給へる御覺(入道)の程なども、女心地に任せて、限りなく語り盡せば、女君も、「げにかく君の思し出づるばかりの餘波止(セトリ)めたる我が身もいと猛く。」と、やう／＼思ひなりけり。御文も共に見て、乳母、心の中に、「あはれ、人はかうこそ思の外にめでたき宿世はありけれ。憂きものは我が身にこそありけれ。」と思ひつゞけ、れど、君より、「乳母はいかに。」など細やかに訪はせ給へるも辱(かたじけ)く、何事も思ひ慰めけり。御返には、

數ならぬみしま隠れに鳴く鶴を

けふもいかにと訪ふ人ぞなき

○「數ならぬ我が身の陰に居る姫君を、今日五十日の祝と訪ふは君より外になし。」

よろづに思ひ結ばはれ侍る有様を、かくたまさかの御慰めに掛け侍る命の程もはなくなむ。(姫君ノ慰)げに後安(安心シテ)く思ひ置き侍ることもがな。」と、まめやかに聞えたり。君、うち返し見給ひつゞ、あはれと長やかに獨(安)ごち給ふを、女君は後目に見おこせて、「浦より遠に漕ぐ船の」と、

○浦より遠に漕ぐ船の 古今六帖、「み熊野の浦より遠に漕ぐ船の我をばよそに隔てつるかな。」上の句は譬、「我をよそにし給ふよ。」と恨むなり。

いと忍びやかに獨ごちながめ給ふを、君、「誠にかく取りなし給ふよ。こはたゞかばかりのあはれぞや。(御石)所の様などうち思ひ遣る時々、來し方のこと忘れ難き獨言を、ようこそ聞き過し給はね。」など恨み給ひて、上包ばかりを見せまらせ給ふ。手などのいとゆかしくて、やむごとなき人も耻かしげなるを女君見給ひて、かゝれば君の御志も淺からぬなめりと思す。

かくてこの女君の御心をと給ふ程に、花散里を無下に離れ果て給ひぬるこそいとほしけれ。君は公事ども繁(多)く、所狭(所狭)き御身を思し憚るに、かの女君も絶えて御消息も聞えず、思ひ鎮め給ふなりけり。五月雨のつれ／＼なる頃、公私物靜かなるに思ひ起して渡り給へり。よそながらも旦暮につけて君の

よろづに思し遣り訪ひ給ふを頼にて過し給ふ所なれば、今めかしう憎き様になど恨みまらせ給ふべきならねば心安げなり。おはし所は年経るまゝにいよく荒れまさりて心凄げにておはす。女御の君に御物語聞え給ひて、

○女御の君 花散里の君の姉、元羅景殿の女御なり。

西の妻戸には夜更かして立ち寄り給へり。月朧に射し入りて、いと艶なる君の御振舞、盡きもせず懐かしく見え給ふ。女君はいと慎ましけれど、端近うながめけるまゝにて、のどやかにおはします氣配、いと目安し。水鶏のいと近う鳴きたるに、

水鶏だに驚かさずばいかにして

荒れたる宿に月を入れまし

○「水鶏に驚かされて戸を明けたれば、思ひ掛けなく月の射し入りたる」意にて、思ひ掛けなき御訪ひをいふなり。

いと懐かしうかすめ給へるを聞き給ふにも、とりくりに捨て難きところあるかな。かゝるにつけてこそ、なか／＼我が身も苦しけれと思す。

おしなべてたゞく水鶏に驚かば

うはの空なる月もこそ入れ

○「一樣に、水鶏のたゞくまゝに、戸を明けなば、いかなる浮きたる人の入り来るも測られず。」

心許なうこそ。」と、なほざり言に宣へど、女君はさるあた／＼しき筋など疑はしき御心ばへにはあらず。年頃待ち過し參らせ給へる御心を、君も更に疎には思されざりけり。「空ながめそ」と頼めさせ給ひし折の事宜ひ出で、

○空ながめそ 源氏の君都を離るゝ時、花散里の女君を訪ひて、「行きめぐり遂に澄むべき月影

のしばし曇らむ空ながめそ。」の歌による。須磨の巻に出づ。

女君、「などてかの折をしも類あらじといみじう物を思ひ沈みけむ。憂き身なれば、何時も同じ歎かしさにこそ。」と宣へるも、おいらかにならうたげなり。

○何時も同じ歎かしさ 都に歸り給ひても、御訪の稀なるを恨むなり。

君は、例のいづこより取う出給ふ御言葉にかあらむ、盡きせず語らひ慰め給ふ。かやうの序にも、かの大貳の五節の女を思し忘れず、

○大貳の五節の女 太宰の大貳の女、五節の舞姫なりし時、源氏の君と語らひしことあり。須磨にても、君歸京の後も歌を詠み交せり。須磨明石の巻に出づ。

また見てしがなと心に掛け給へれど、紛れおはし給はむもいと難き事なり。女も物思ひ絶えぬを、親はよろづに思ひいふ事もあれど、世に經む事を思ひ絶えたり。君は心安き殿造りして、かやうの人々集へ

住ませて、もし思ふ様にかしづきつべき女御子も生れ出で給はゞ、その御後見にもと思す。かの東の院の造り様、なか／＼見所多く今めいたり。さるべき受領などを選び出で、當て／＼に催し給ふ。尙侍の君をなほえ思ひ棄て給はず、懲りすまにまた立ち返る御心もあれど、女君は憂きに懲り給ひて、昔のやうにもあひしらへまゐらせ給はず。君は物寂しう世の中を思さる。

院はのどやかに思しなり果て、時々につけてをかしき御遊など好ましげにておはします。女御、更衣、皆例のごとさぶらひ給へど、春宮の御母、承香殿の女御はめでたき御幸にて、

○めでたき御幸 春宮御即位の後、皇太后になるべきをいふ。

院を離れ出で、春宮に添ひ奉り給へり。源氏の君の御宿直所は、昔ながらの淑景舎なり。梨壺に春宮おはしませば、近隣の御心寄にて、何事も聞え通ひて、宮をも後見奉り給ふ。入道の中宮、御位をまた改め給ふべきならねば、

○入道の中宮 藤壺の中宮は今上の御母にましますも、入道し給ひしなれば、皇太后と稱し奉るべきにあらず。

太上天皇になぞらへて御封賜はせ給ひ、

○御封 封戸ともいふ。皇族又は官位あるものに賜はる民戸の租税。太上天皇は二千戸分なり。

院司ども定まりて、様異に殿めしう、御行功德のことを常の御營にておはします。年頃世に憚り

て内裏の出入も難く、春宮を見奉り給はぬを心許なく思しけるに、今は思す様にて内裏に参りまかんで給ふもいとめでたし。太后は、「憂きものは世なりけり。」と思し歎く。源氏の君は事に觸れてこの太后にも仕うまつり心寄せまゐらせ給ふを、世の人も容易からず思ひまゐらせたり。兵部卿の宮は、年頃の御心ばへつらく、世の聞えをのみ思し憚りて疎くのみ過し給ひしを、君は憂きものに思して、昔のやうにも睦び給はず。なべての人々に普くめでたき御心なれど、この宮の御ありにのみは、なか／＼情なき節もうち混ぜ給ふを、入道の中宮は、いとほしう本意なき事に見奉り給ふ。世の中の事、たゞ半を分けて、太政大臣と源氏の内大臣との御儘なり。權中納言の御女、その年の八月内裏に参らせ給ふ。祖父太政大臣、居起ちて、その御儀式などあらまほしき様なり。兵部卿の宮の中の女君を、さやうに志してかしづき給ふなる聞え高けれど、源氏の君は、人より優り給へとしも思さすなむありける。宮、いかゞし給はむとすらむ。

その秋、住吉に詣で給ふ。願ども果し給ふべければ、殿めしき御歩きにて、世の中揺りて、上達部、殿上人、我も／＼と仕うまつり給ふ。折しもかの明石の女君、年毎の例の事にて詣で給ふを、去年今年障る事ありて怠りける長り取り重ねて思ひ立ち、船にて詣でたり。岸にさし着くる程に見れば、のりしりて詣で給ふ人の氣配、渚に満ちて、殿めしき神寶を持て續け、樂人十列など、装束を整へ、容貌を選びたり。

○十列 社頭にて奏樂する東遊の曲の舞人。十人なり。

「誰が詣で給ふぞ。」と問へば、「内大臣殿の御願果しに詣で給ふを、知らぬ人もありけり。」とて、はかなき下衆だにうち笑ふ。女君は、「げにあさまし。月日もこそあれ、今日この御有様を遙に見奉るに、なかく身の程口惜しう覺ゆ。さすがにこれもかけ離れ奉らぬ宿世ながら、かくはかなき下衆だに物思ひなげにて、仕うまつるを面目に思ひたるに、何の罪深き身なれば、かゝりける御響をも知らで立ち出でつらむ。」など思ひつゞくるに、いと悲しうて、人知れずしはれたり。松原の深緑なる中に、花紅葉をこき散らしたると見ゆる袍衣ども、

○袍衣 「うへのきぬ」ともいふ。天皇親王より文武官の禮装の上衣。綾織にて種々の織紋あり。

○「當時の世相」第六圖

濃き薄きばかりをけちめにて數知らず多かり。六位の中にも藏人は青色著く見えて、かの賀茂の瑞垣恨みし右近の丞も、

○右近の丞 源氏の君都を出で、須磨に行きし時、故院の御墓詣に参り給へる御供にて、「引きつれて奏かざし、そのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣」と詠めり。須磨にも御供せり。須磨の巻に出づ。

衛門佐になりて、事々しげなる隨身具したる藏人なり。良清も同じ佐にて

○良清 播磨守の子、源良清。須磨の御供せり。須磨の巻に出づ。

人より異に物思なき氣色にて、事々しき赤衣姿、いと清げなり。すべて明石にて見し人々、その折に引き換へ華やかに、何事か思ふらむと見えてうち散り居たるに、若やかなる上達部、殿上人の我もくと思ひ挑み馬鞍などまで飾を整へ磨き給へるは、いみじきものに田舎人も思へり。御車を遙に見やれば、なかく心やましくして、戀しき御影は見え奉らず。河原の左大臣の御例をまねびて、童隨身を賜はり給ひける、いとをかしげに装束き、みづら結びて、

○みづら 少年の髪。左右の鬘を結ぶ。びんづらともいふ。

紫裾濃の元結なまめかしう、長け姿整ひ美しげにて十人、様異に今めかしう見ゆ。大殿腹の若君、限りなくかしづき立て、馬副童も皆同じ様に装ひたれど、若君はまた様變へて装束き分けたり。この若君の遙にめでたく見ゆるにつけても、我が姫君の數ならぬ様にておはしますを、母君はいみじく憂しと思ふ。いよく御社の方を拜み奉る。國の守参りて御設、例の大臣などの参り給ふよりは異に世になく仕うまつれりけむかし。女君はいと便なれば、かゝる御詣に立ち混り、數ならぬ身のいさゝかの事せむに、神だに數まへ給ふべきにもあらず。歸らむにも中空なり。今日は難波に船さし止めて、祓をだにせむとて漕ぎ歸りぬ。

君は夢にも知り給はず、夜一夜いろくの事をせさせ給ふ。殊に神の喜び給ふべき事をし盡して、來し方の御願にもうち添へ、あり難きまで遊びのしり明かし給ふ。惟光やうの人は、心の中に神の御徳

をあらはれにめでたしと思ふ。君、假初に立ち出で給へる所にさぶらひて聞え出でたり。

住吉のまづこそ物はかなしけれ

神代のことを掛けて思へば

○「住吉の社に詣で、神徳を仰ぐにつけて、須磨の昔を思ひ出されて先づ感に堪へず。」

君もげにと申し出で、

荒かりし浪のまよひに住吉の

神をばかけて忘れやはする

○「荒かりし須磨の風浪につけて、住吉の神を忘れ難し。」

験ありけりな。」と宜ふもいとめでたし。かの明石の船、この響に押されて過ぎぬることも聞ゆれば、

「知らざりけるよ。」と、哀れに思す。これも神の御するべなりと思せば、いさゝかなる御消息をだにし

て心をも慰めばや。なか／＼に思ふらむかしと思す。御社を立ち給ひて所々に逍遙を盡し給ふ。難波の

御被など殊に七瀬によそほしく仕うまつる。堀江のわたりを御覽じて、「今はた同じ難波なると、御心

にもあらでうち誦じ給へるに、

○今はた同じ難波なる、拾遺集「わびぬれば今はた同じ難波なる身を盡しても逢はむとぞ思ふ。」

「身を盡しても」は、一生を盡す意、「落標」に掛く。「難波なる」は「みをつくし」といはむ爲の詞。

「落標」は海川の中にて一條の深みの船路となるべき所を示す標をいふ。歌の意は、「同じく一生を盡すなれば、徒に戀ひわびむよりも、何とかして逢ひたし。」

御車の許近き惟光承りやつらむ、さる御召もやと、懐に設けたる柄短き筆など御車止むる所にて奉れり。君はをかしと思して、疊紙に、

みをつくし戀ふる験にこゝまでも

めぐり逢ひけるえには深しな

○本篇の題はこの歌及び次の返歌による。

とて賜ひければ、かしこの心知れる下人して明石の船に遣りけり。駒並べて君のうち過ぎ給ふにも、女君は心のみ動きしに、露ばかりの御消息なれど、いとあらはれに辱く覺えてうち泣きぬ。御返、

數ならでなにはのこともかひなきに

などみをつくし思ひ初めけむ

○「數ならぬ身は何の甲斐もなきに、なとて身を盡して思ひ初めまらせむ。」

田叢の島にて御鞅仕うまつりし御被の木綿につけて奉る。日、暮れ方になり行く。夕潮満ち來て入江の鶴も聲惜しまぬ程のあらはれる折柄なればにや、君は人目も慎まず、相見まほしくさへ思さる。君、

露けさの昔に似たる旅衣

田 簀 の 鳥 の 名 に は 隠 れ ず

○「田簀の鳥といふ名の、簀の中に隠れねば、昔の旅衣に似て、今も露に濡る。」にて、誤催すをいふ。

道のまゝにをかしき所道遙し、遊びのしり給へど、御心にはなほ掛りて思し遣る。遊女どもの集ひ参れば、上達部と聞ゆれど若やかに事好ましげなるは、皆目止め給ふべかしめり。されど君は、「をかしき事も物のあはれも人柄にこそよるべかんめれ。少しあはき方に寄りぬるは、心を止むる便もなきに。」と思すに、遊女どもの己が心を遣りて戯れあへるも疎ましく思しけり。

明石の君は過し参らせて、またの日ぞよろしかりければ、御幣奉り、身の程につけたる願どもなごかつく果しける。なか／＼物思ひ添はりて且暮口惜しき身を思ひ歎く。君、今や京におはし着くらむと思ふ日數も經ず、御使あり。この頃の程に京に迎へむことぞ宜へる。いと頼もしげに數まへ宜ふめれど、いさや、この浦を過ぎ離れ、中空に心細きことやあらむと思ひ煩ふ。入道もさし出だし放たむはいと心許なう、さりとてかく埋もれて過ぎむを思へば、なか／＼年頃よりも心盡しなり。御返、よろづに慎ましく、思ひ立ち難きことを聞ゆ。

誠や、かの齋宮も代り給ひにしかば、御息所京に上り給ひて後、
○齋宮 伊勢神宮奉仕の皇女。御代毎に更代す。

○御息所 齋宮の御母、六條の御息所。齋宮と共に伊勢に御下りの事、賢木の巻に出づ。須磨に音信ありしことは須磨の巻にあり。

君は變らぬ様に、何事も訪ひまゐらせ給ひ、あり難きまで情を盡し給へど、昔だにつれなかりし御心のなか／＼なる餘波を見じと、女君も今はまして思ひ棄て給へれば、君も渡り給ひなどし給ふことなし。あながちに動かしまゐらせても、我ながら我が心も知り難く、忍びての御歩きなども、今は所狭く思しなりにたれば、強ひてもおはせず。齋宮をぞいかにねびまさり給ひぬらむと、さすがにゆかしう思ひ給ふ。かの六條の古宮をいとよく修理し繕ひたりければ、みやびかにて住み給ひけり。女君は由ありて舊り難く、よき女房など多く、好き／＼しき人の集ひ所にて、物寂しきやうなれど、心遣れる様にて經給ふ程に、俄にいと重く煩ひ給ひて、いと心細く思されければ、罪深き所に年經つるをいみじく愛しと思して、尼になり給ひぬ。

○罪深き所 佛法より見て、佛事を修めぬ神宮奉仕をいふなり。

源氏の内大臣聞き給ひて、好き／＼しき筋にはあらで、なほさるべき事ども聞え合すべき人に思ひまゐらせつるを、かく思しなりにけるが口惜しう覺え給へば、驚きながら渡り給へり。飽かず哀れなる御訪ひ聞え給ふ。近き御枕上に御座よそひて、脇息に押しかりて御答など宜ふ。いたう弱り給へる御氣配なれば、君は、「絶えぬ志の程を見せ奉らで。」と、口惜しうて、いみじく泣き給ふ。かくまで思したりけ

る御志を、女君もよろづにあはれと思して、齋宮の御事をぞ聞え給ふ。「心細く残り給はむを、必ず事に觸れて數まへさせ給へ。また後見せむ人もなく、類なく心細き御有様になむ。甲斐なき身ながらも、今暫しとのどかに世を思ひし程は、とざまかうさま物を思し知るまで見奉らむとこそ思ひ侍りつれ。」とて消え入りつゝ泣き給ふ。君、「かゝる御事なくてだに、思ひ棄てまらすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに従ひて、何事も後見まらせむとなむ思ひ侍る。更に心許なく思ひ給ひそ。」など宣へば、「いとあり難きこと。誠にうち頼むべき親などに譲りてだに、女親に離れぬるは、いと哀れる事にこそ侍るめれ。まして君の思はず人めかしくせさせ給はむには、あぢきなきことやうち混り、人に心も置かれ給はむ。構へてさやうの好きくしき筋に思し寄り給ふな。憂き身を掴み侍るにも、

○憂き身を掴み 身を掴みて人の痛さを知るにて、我が憂き経験より見てもの意なり。

女は思の外なることにて物思を添ふるものになむ侍りければ、いかでさる筋を離れて見奉らむと思ひ侍る。「など聞え給へば、君は、あいなくも宜ふかなと思せど、「この年頃よろづの事を思ひ知り侍りにたるを、昔の好きくしき心の餘波ありげに宜ふも本意なくなむ。よし、おのづから知り給はむ。」とて、外は暗うなり、内の方は大殿油のほかに物より透りて見ゆるに、もしやと思して、やをら御几帳のほころびより見入れ給へば、心許なき程の火影に、御息所の御髪いとをかしげに華やかに削ぎて、脇息に寄り居給へる、繪に書きたらむ様して、いみじう哀れなり。帳の東面に添ひ臥し給へるぞ宮ならむか

し。御几帳のしどけなく引き遣られたる隙より御目止めて見透し給へれば、頬杖つきていと物悲しと覺したる様なり。ほのかなれど、いと美しげならむと見ゆ。御髪のかばれかゝりたる程、頭つき、氣配、氣高けれども愛敬づき給へる氣配も著く見え給へば、ゆかしけれども、さばかり母君の宜ふものと思し返す。母君は、「いと苦しさまさり侍る。畏ければはや歸らせ給ひね。」とて、人にかき臥せられ給ふ。「近く参りたる験によろしう思されば嬉しかるべきを、心苦しきことかな。いかに思さるゝぞ。」とて、覗き給ふ氣色なれば、「いと恐ろしげに衰へ侍り。亂り心地のかく限りなる折しも渡らせ給へるは、誠に淺からぬ契になむ。思ひ侍ることを少しも聞えさせつれば、さりととも頼もしくなむ。」など宣ふ。「かゝる御遺言承るべき列に思し給ひけるは、いとゞあはれになむ。故院の御子達數多おはしませど、親しく睦びまゐらするはをさくなければ、院も宮を御子達の中に數まへ給ひしかば、自らもさやうにこそは思ひ侍らめ。我も少し大人しき齡ながらかしくつべき人のなくてさうくしきに。」など宣ひ置きて歸り給ひぬ。御訪ひ今少し立ちまさりてしばし聞え給ふ。七八日ありて失せ給ひにけり。君は力なく思さるゝに、世もいとほかなくて、物心細う思されて、内裏へも参り給はず。とかくの御事など掟てさせ給ふ。かしこにはまた頼もしき人も殊におはせざりけり。齋宮の古き宮司などの仕うまつり馴れたるぞ、僅に事ども定めける。君も渡り給へり。齋宮に御消息聞え給ふ。宮、「何事も覺え侍らでなむ。」と、女別當して傳へ給ふ。君は、「宣ひ置きし事ども侍れば、今は隔なき様に思されなば、いと嬉しくな

む。」と聞え給ひて、人々召し出で、あるべき事ども仰せ給ふ。いと頼もしげにて、年頃つらかりし御心取り返しつべう見ゆ。いと殿めしう、殿の人々數知れず仕うまつらせ給へり。君は哀れにうちながめつ、御精進にて御簾下し込めて行はせ給ふ。宮には常に訪ひまゐらせ給ひ、宮もやうく御心鎮まり給ひては、自らも御返など聞え給ふ。宮は慎ましう思したれども、御乳母など、畏しとそのかしまゐらせけるなり。

雪寒かき亂れ荒るゝ日に、いかに御有様かすかにて、宮のながめ給ふらむと思ひ遣り給ひて、御使奉り給へり。「只今の空をいかに御覽すらむ。

降り亂れ隙なき空に亡き人の

天かけるらむ宿ぞ悲しき

○「天かける」は、亡き人の魂の空を翔けるをいふ。

空色の紙の曇らほしきに書き給へり。若き人の御目に止るばかりと心して繕ひ給へる、いと目もあやなり。宮は、「いと聞えにくし。」と思し給へど、人々、「人傳にてはいと便なきこと。」と責めまゐらすれば、鈍色の紙のいと香ばしう艶なるに、墨つきなど紛らはして、

消えがてにふるぞ悲しきかきくらし

我が身それとも思ほえぬ世に

○「消えがてに」は、消え難き氣色に。雪と我が身とをいふ。

○「心も暗く我ながら我とも思はぬ様にて消えずにあるに、空も暗く雪も消え難げに降るは悲し。」

慎ましき書き様いと大様にて、御手優れてはあらねど、らうたげに氣高き筋に見ゆ。君は、「伊勢へ下り給ひし時より思し渡りしなれば、今は心に掛けて、いひ寄りぬべきぞかし。」と思せど、また引き返しとほしと思し給ふ。「故御息所のいと心許なげに思ひ置き給ひしも道理なれば、世の中の人にはさやうに思ひ寄りぬべき事なれど、引き違へ心清くて扱ひ參らせむ。上の今少し物思し知る齡にならせ給ひなば、内裏住せさせ奉りて、我もさうくしければ、かしづき種にこそせめ。」と思しなる。いとまめやかに懇に訪ひ給ひて、さるべき折々は渡りなどし給ふ。「畏けれども母君の御代に思しなすらへて、氣近くもてなさせ給はなむ本意なる心地すべき。」など宜へど、宮はいみじく物耻をし給ひ、奥まり給へる人様にて、ほのかにも御聲など聞かせ奉らむは、いとあるまじきことと思したれば、人々もいひ煩ひて、かゝる御心様を憂へあへり。こゝには女別當、内侍などいふ人々、あるは王家裔などにて心ばせある人々多かるなるべし。されば内裏住せさせ奉らむに、人には劣り給ふまじかンめり。いかでさやかに御容貌を見奉りてしがなと思せど、人にも漏らし給はず。御業などの御事も取り分きてさせ給へば、あり難き御心ばへを、宮人は喜びあへり。はかなく過ぐる月日に添へて、いと寂しく心細きことのみまさるに、さぶらふ人々もやうく別れ行きなどして、殿は下つ方の京極わたりなれば、人氣遠

く、山寺の入相の聲々に添へても音泣きがちにてぞ過し給ふ。同じき御親なれど、片時の間も立ち離れ給はで、馴らはし奉り給ひ、齋宮に親添ひて下り給ふことは例なきことなるを、強ひて下り給ひし御心なれど、限りある道にては伴なひ給はずなりしを、御袖の干る世なう思し歎きたり。さぶらふ人々にたよりて宮を心掛けまゐらする人、高きも賤しきも數多あり。されど、内大臣、御乳母達に、「心に任せたる事引き出だし仕うまつるな。」など親かり申し給へば、人々も、便なきことし出したり。」と思し召しつけられじと言ひ思ひ、更にはかなき事の情も作らず。

院も、宮の伊勢へ下り給ひし日、大極殿の殿めしかりし儀式に、いみじきまで見え給ひし宮の御容貌を、忘れ難う思し置きければ、故御息所にも御氣色ありけれど、「はやうやむごとなき人々のさぶらひ給ふに、はかしくしき御後見もなく。」と思し憤み、院のいとあつしくおはしますも恐ろしう、また物思や加へむと憚りて過し給ひしが、今は誰かは御後見仕うまつらむと人々思ひたれば、院には懇に思し宣はせけり。君、聞き給ひて、かく御氣色あるを、引き違へ横取りせむは長き事と思せど、宮の人様のいとらうたげに、思ふ様におはすを見放たむはまた口惜しうて、入道の中宮にぞ聞え給ひける。「か^(兼宮ノ宮仕)の事をなむ思ひ煩ひ侍り。母御息所いと重々しく心深き人様におはせしを、我があぢきなき好き心に任せて、さるまじき名をも流し、憂きものに恨みられにしをなむ世にいとほしう思ひ侍る。この世にてその心解けず過ぎ侍りにしが、今はとなりての際に、この齋宮の御事をなむ返すく仰せられしか

ば、いかで亡き後にても、かの恨忘れ給はむばかりにと思ひ侍る。内もさこそ大人びさせ給ふやうなれど、幼き御齡におはしませば、少し物の心知れる人のさぶらふもよくやと思ひ侍る。たゞ御定になむ。」と聞え給へば、「いとよう思し寄りけるを。院の思さむことは、げに畏う、いとほしかるべけれど、御息所の御遺言にことづけて、知らず顔に内裏へ參らせ給へかし。院は今たさやうの事、わざと思し止めず、御行^(兼宮ノ御遺言)がちになり給へば、かう聞き給ふとも、深うしも思し咎めじと思ひ侍る。」と宣へば、「さ^(兼宮ノ御遺言)らばさる御氣色あらば、言葉添ふるばかりになし侍らむ。」など聞え給ひて、後には知らぬやうにて、宮を我が二條の院へ渡し奉りてむと思す。女君にも、「しかくなむ思ふ。語らひまゐらせて過し給はむに、いとよき程なる間ならむ。」と知らせ給へば、女君も嬉しきことに思して、御渡りのことを急ぎ給ふ。入道の中宮は、「兵部卿の宮の、我が姫君をいつしかとかしづき給ふめれど、この内大臣と隙ある御中なれば、いかゞもてなし給はむ。」と、心苦しう思す。權中納言の御女は、弘徽殿の女御と申す。太政大臣の御子としていとよほしうもてかしづき給ふ。上もよき御遊がたきに思したり。「兵部卿の姫君も同じ御齡の程におはすれば、難遊の心地やすらむ。齋宮の大人しき御後見はいと嬉しかるべきこと。」と入道の中宮も思し宣ひて、さる御氣色聞え給ふなるべし。源氏の君のよろづに思し至らぬことなく、公方の御後見は更にもいはず、且暮につけて細かなる御心ばへのいとあはれに見え給ふを、頼もしきものに思ひ給ひて、「自らいとあつしく、内裏へ參りなどしても、心安くさぶらふことも難け

れば、少し大人びたらむ御後見は、必ずあるべきことなり。」となむ思し給ふ。

帯 類

四二六

蓬 生 よもぎふ

源氏の君、須磨にて藻鹽垂れつゝ、わび給ひし頃ほひ、

○藻鹽垂れつゝ、古今集、在原行平、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽垂れつゝわぶと答へよ。」「わくらばに」は、たまさかに。「藻鹽垂れつゝ」は、海士が鹽を製する爲に海藻に注ぎかくる潮水に濡るゝことにて、涙に濡るゝをいふ。

都にも様々思し歎く人多かりしが、それも我が身に寄り所あるは、懐かしき思のみこそ苦しげなりしか。二條の女君(女ノ上)などもどやかにて、旅の御住所(御所)を心許なからず聞え通ひ給ひつゝ、位を去り給へる假(假)の御装(御装)も、時々につけて扱ひまゐらせ給ひ、世の憂き節(節)をも慰め給ふことありけむ。されど、その數とも人に知られず、都を離れ給ひし御有様(御有様)も、よそながら思ひ遣り給ふ人々は、なか／＼人知れず心を碎き給ふこそ多かりけれ。常陸の宮の姫君(常陸の宮の姫君)は、

○常陸の宮の姫君、源氏の君こゝに通ひしは十八歳の頃よりにて、委しく末摘花の巻にあり。

父親王(親王)の失せ給ひにし後、また思ひ扱ふ人もなき御身にていみじう心細げなりしを、思ひ掛けぬ御事(御事)の出で来て、まめやかに訪ひ給ふこと絶えざりしが、君は嚴めしき御勢(御勢)なれば、それも事(事)にもあらず、

蓬 生

四二七

はかなき程の御情ばかりと思したりしかど、待ち受け給ふ御袂の狭きには、大空の星の光を盥の水に映したる心地して過し給ひし程に、

○盥の水に映したる、大空にてはさまでの光ならぬ星なれど、盥の中にては光り輝きて見ゆる如く、源氏の君方にては僅かなりと思ふ贈物も、こなたにては豊富に思ふをいふ。

かゝる世の騒ぎ出で来て、君もなべての世を心憂く思し亂れし紛れに、深からぬ御志の方ほうち忘れたるやうにて、遠く須磨におはしましにし後は、わざとも尋ね給はず。姫君は今までの餘波に、暫しは泣くくも過し給ひしが、年月経るまゝに、哀れに寂しき御有様なり。舊き女房などは、「いでや、いと口惜しき御宿世なりけり。覚えす神佛の顯れ給へらむやうなりし君の御心ばへに、人はかゝるよすがも出でおはするものなりけりと、世にあり難う見奉りしを、大方の世の習とはいひながら、また頼む方なき御有様こそ悲しけれ。」と嘆き歎く。ありし年頃は、いふ甲斐なき寂しさも目馴れて過し給ひしが、今は、なかくに世にも交り馴らひにし年月に、いと堪へ難く思ひ歎くなるべし。おのづから参り附きてありし人々も、皆次々に往き散りぬ。女房などの命堪へぬもありて、月日に随ひて、上下の人、数少なくなり行く。もとより荒れたりし宮の中、いと狐の住所になりて、疎ましく氣遠き木立に、梟の聲を朝夕に耳馴らしつゝ、木魂などいふなる怪しき物ども、人氣に堰かれてこそ影隠しけれ、今は所を得てやうく形を顯し、物わびし事のみ數知らぬに、稀々残りてさぶらふ人はなほいとわりなし。こ

の頃受領どもの面白き家作り好むが、この宮の木立を心につけて、「譲り給はせてむや。」と、縁につきて案内し申さするを、人々は、「さやうにもせさせ給ひて、いとかう物恐ろしからぬ御住居に移ろはなむ。立ち止りさぶらふ人もいと堪へ難し。」など聞ゆれど、姫君、「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。我が生ける世に、しか餘波なき事をやせむ。かく恐ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影止りたる心地する舊き住所と思ふに、慰みてこそあり經れ。」とうち泣き給ひつゝ、思しも掛けず。御調度どもものいと古代なるが、昔様に整ひたるを、生物の故知らむとする人は、さる物を要じて、「故宮のわざと某の工匠にせさせ給へる。」と尋ね知りて、かゝる貧しきあたりと思ひ悔りていひ來るを、例の人々、「いかゞはせむ。それこそは世の常のこと。」とて、目に近き今日明日の見苦しさを繕はむとする時もあると、姫君、いみじう諫め給ひて、「用ひよと思してこそはし置かせ給ひけめ。などて軽々しき人の家の飾とはなさむ。亡き人の御本意違はむが哀れなること。」と宣ひて、さる業はせさせ給はず。はかなき事にも訪ひまゐらす人もなき御身なり。たゞ御兄の禪師の君ばかりぞ、稀にも京に出で給ふ時は、さし覗き給へど、それも世になき古めき人にて、同じ法師といふ中にも便りなく、この世を離れたる聖にて、茂き草、蓬をだに掻き拂はむものとも思ひ寄り給はず。かゝるまゝに、淺茅は庭の面も見えず茂り、蓬は軒を争ひて生ひ上る。西東の御門は葎閉ち固めて、頼もしけれど、崩れがちなる周囲の垣を馬牛などの踏み馴らしたる路にして、春夏になれば、こゝに放ち飼ふ總角の心さへぞ疎

八月野分荒かりし年、廊ども倒れ伏し、下の屋どもはかなき板葺なりしなどは、骨のみ僅に残りて、立ち止る下衆たになし。煙も絶えて哀れにのみじき事多かり。盗人などいふひたぶる者も、思ひ遣りの寂しければにや、この宮をば不用のものに踏過ぎて、寄り来ざりければ、かくいみじき野ら敷なれども、さすがに寢殿の内ばかりは、ありし御しつらひ變らず、つややかに掻き掃きなどする人もなく、塵は積れども、亂ることなくうるはしき御住居にて明かし暮らし給ふ。はかなき古歌、物語などやうのすさび事にてこそつれづれをも紛らはし、かゝる住居をも思ひ慰め給ふれど、さやうの事にも心おぞく物し給ふ。好ましからぬ中にても、おのづから急ぐことなき折は、同じ心なる文通はしなどしてこそ、若き人は心を慰め給ふに、親のもてかしづき給ひし御心掟のまゝに、世の中を慎ましきものにのみ思して、稀にも言通ひ給ふべき御あたりをも更に馴れ給はず。舊めきたる御厨子明けて、唐守、藐姑射の刀自、かぐや姫の物語などの繪に書きたるをぞ、時々遊び物にはし給ふ。

○唐守、藐姑射の刀自、當時の物語の名。今傳はらず。

○かぐや姫、竹取物語ともいふ。これは今に傳はりて、小説の始とせらる。

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも詠み人をもあらはしたるこそ見所もありけれ、紙屋紙、陸奥紙などのふくためるに、

○紙屋紙、陸奥紙、昔、大内裏の中に紙屋あり。そこにて渡き出したる紙を紙屋紙といひ、勅命な

どに用ふ。陸奥紙は陸奥に産し、檀紙ともいふ。

古歌どもの目馴れていとすさまじきを、切にながめ給ふ折々は引き廣げ給ふかし。今の世の人のすめる經うち讀み、行ふなどいふ事はいと耻かしくし給ひて、見奉る人もなけれど數珠なども取り給はず。かやうにたゞ亂るゝ所なくぞおはし給ひける。

侍従といひし御乳母子のみこそ年頃往き散らぬものにてさぶらひつれど、こゝの外に通ひ参りし齋院失せ給ひなどしていと便なく心細きに、

○齋院、賀茂の社に奉仕の皇女。侍従といへる女房はこの齋院にも仕へしなり。

この姫君の御母北の方の兄弟、世に落ちぶれて受領の北の方になり給へるありけり。女どもをかしづきて、よろしき女房など求むるに、侍従も、無下に知らぬ所よりは、親ども参り通ひし所なれば。」と思ひて、時々行き通ふ。この姫君は、かく人疎き御癖なれば、この北の方にも睦ましく言ひ通ひ給はず。北の方、「故宮の己を貶しめ給ひて、面伏にも思したりしかば、姫君の御有様の心苦しげなるをも見訪ひまゐらせず。」など、生憎げなる言葉ども侍従にいひ聞かせつゝ時々訪ひけり。もとよりさやうの並々の人は、なか／＼よき人の眞似に心を繕ふも多かれど、この北の方は、やむことなき筋ながらも、かうまで落ちぬべき宿世にや、心少しなほ／＼しき御叔母にぞありける。我がかく劣の様になりて、悔らはしく思はれたりしが、「いかでかゝる世の末に、この姫君を我が女どもの使人にしなしてしがな。

心ばせなどの古びたる所こそあれ、いと心安き後見ならむ。」と思ひて、時々、「こゝに渡らせ給へ。御琴の音も承らまほしがる女などなむ侍る。」と聞え、この侍従にも常にいひて催せど、姫君は、人に挑む心にはあらねど、たゞいみじき御物慎みなれば、さも睦び給はぬを、北の方は口惜しとなむ思ひける。かゝる程に、かの家主、大貳になりぬ。

○大貳 太宰府の次官。太宰府は九國二島を管す。

女どもさるべき様にし置きて、かしこに下りなむとす。北の方、この姫君をなほも誘はむの心深くて、「心細き御有様を常にしも訪ひまゐらせねど、近きをこそ頼め侍りつれ、

○近きをこそ、 近きに居るを頼みにして訪はざりき。

遙にまかりなむとするに、いと哀れに心許なくなむ。」など言よがれど、姫君更に承け引き給はねば、「あな憎、事々しや。しか心一つに思ひ上るとも、さる藪原に年経給ふ人を、大將殿もやむごとなしと思ひ給はじ。」など怨じ呪ひけり。

さる程に君は世の中に免され給ひて都に歸り給ふと、天の下の悦にて立ち騒ぐ。我こそいかで人より先に深き志を御覽ぜられめと、思ひ競ふ男女につけて人の心ばへを見給ふに、心憂くもあはれにも思し知ること様々なり。かやうにあわたゞしき程に、この姫君を思ひ出で給ふ氣色も見えずて、月日經ぬ。今は限りなりけり。年頃君のあらぬ様なる御有様を、悲しういみじきことと思ひながらも、萌え出

づる春に遣ひ給はなむと念じ渡りつれど、たびい、かはらなどまで悦び思ふなる御位改りなどするを、我はよそに聞くべきなりけり。

○たびい、かはら 不明。石瓦の如く極めて賤しき者をいふか。

悲しかりし折の憂はしさは、たゞ我が身一つの爲になれるかと覚えしが、

○我が身一つの 古今集、世の中は昔よりやは愛かりけむ、我が身一つの爲になれるか。世の中は昔より憂きものなりしか。我が身の故にのみ憂きものになりしか。

今は甲斐なき世かなと心碎けて、つらく悲しければ、人知れず音をのみ泣き給ふ。大貳の北の方、「さればよ、まさにかく便りなく人聞悪き御有様を數まへ給ふ人はありなむや。佛聖も罪輕きをこそ導きよくし給ふなれ。かゝる御有様にてなほ心強く世の中を思し、宮、上などのおはせし時のまゝに馴らひ給へる御心傲りのいとほしきこと。」と、いと鳴呼がましげに思ひ言ひて、「なほ思し立ちね。世の憂き時は見えぬ山路をこそ尋ぬなれ。

○世の憂き時は 古今集、み吉野の山のあなたに宿もがな、世の憂き時の隠れ家にせむ。

田舎などをば、煩しきものに思し遣り給ふべかんめれど、ひたぶるに人聞悪げには、よももてなしまるらせじ。」など、いと言よくいへば、無下に屈し果てたる女ばら、「さも靡き給へかし。何の猛き事もあるまじかんめる御身を、いかに思してかかく立てたる御心ならむ。」と誇り咳く。侍従もかの大貳の

甥に語らひつきてあれば、京に留めらるべくもあらざりければ、心の外に出で立たむと、「見棄てまらせむがいと心苦しければ。」とて、そのかしまるすれど、姫君は、なほかくかけ離れて久しうなり給ひぬる源氏の君に頼みを掛け給ふ。御心の内に、「さりとも思し出づる序あらじやは。あはれに心深き契をし給ひしに、我が身の憂くてかく忘れられたるにこそあれ。風のつてにても、我がかくいみじき有様を聞きつけ給はゞ、必ず訪ひ出で給ひてむ。」と思しければ、御家居もありしより異にあさましくなりぬれど、はかなき御調度どもなども取り失はせ給はず、心強く同じ様にて堪へ過し給ふなりけり。音泣きがちにていと思し沈みたる御側目などは、たゞ山人の赤き木の實一つを顔に着くると見え給ひ、なみく／＼の人の見免し奉るべきにもあらずかし。委しくは記さじ。いとほしう物いひさがなきやうなり。

多になり行くまゝにいと掻き着かむ方なく、悲しげにながめ過し給ふ。源氏の君には故院の御爲に、御八講、世の中揺りてし給ふ。

○御八講 法華經八卷を五日に讀誦する法會。

殊に僧などは、なみく／＼のは召さず、才優れ、行に染み、尊きを皆選らせ給ひければ、御兄の禪師の君も參り給へりけり。歸り様に立ち寄り給ひて、「しかく／＼。權大納言殿の御八講に參りて侍りつるなり。

○權大納言殿 源氏の君、明石より歸りて、まづ大將に復し、後權大納言に昇る。未だ内大臣にな

らぬ時のことなり。

いと畏う、生ける世の淨土の飾に、嚴めしう面白き事どもの限りをなむし給ひつる。佛菩薩の變化の身にこそおはしまさめ。五つの濁深き世になどて假に生まれ給ひけむ。」とばかりいひて、やがて出で給ひぬ。

○五つの濁深き世 五濁の初濁、見濁、命濁、煩惱濁、衆生濁の五種の濁をいふ。

言少なに世の人に似ぬ御間にて、はなき世の物語をだにえいひ合はせ給はず。姫君は、「さてもかばかり拙き身の有様を、哀れに心許なきまゝに見過し給ふは、心憂の佛菩薩や。」と、つらう思す。げに限りなめりとやう／＼思ひなり給ふに、大貳の北の方、俄に來れり。例はさしも睦び給はぬを、誘ひ立てむの心にて、着給ふべき御装束など調じて、よき車に乗りて、面持、氣色、誇りかに、物思ひなげなる様して、ふと走り來て、門明けさするより、寂しきこと限りなし。左右の戸もよろほひ倒れにければ、男ども助けてとかく明け騒ぐ。いづれか、この寂しき宿にも必ず踏み分けたる跡あんなる。三つの徑とたどる。

○三つの徑 人家に必ずあるべき徑。門と、井と、厨との徑をいふ。

僅に南面の格子上げたる間に車寄せたれば、姫君はいとゞはしたなしと思したれど、あさましう煤けたる几帳さし出で、侍従出で來たり。容貌など衰へにけり。年頃いたうやつれたれど、なほ清げに由あ

る様して、畏れども姫君と取換へつべく見ゆ。北の方、「心苦しき御有様の見捨て難けれど、侍従の迎になむ参り來つるなり。心憂くも隔て給ひて御自らは渡らせ給はねど、この人をだに許させ給へ。なにかう哀れげなる御有様に。」とて、うち泣くべきぞかし。されどこれより行く道に心を遣りていと心地よげなり。「故宮おはせし時、己を面伏なりと思し棄てたりしかば、疎々しきやうになり初めにしかど、この年頃とても何かは疎ならむ。やむごとなき様に思し上り、大將殿などおはしまし通ふ御宿世の程を、長く思ひ侍りしかば、睦びまらせむも憚ること多くてこそ過し侍りつれ。世の中はかく定なきものなれど、數ならぬ身はなか／＼心安く侍るものなりけり。及びなく見奉りし御有様の、今はいと悲しく心苦しけれど、近き程は、おのづから怠る折にてもどかに思ひ侍りけれど、かく遙にまかり下りなむとすれば、心許なく哀れになむ覺え侍る。」など語らへど、姫君はうち解けても答へ給はず。「いと嬉しきことなれど、世の人に似ぬ身にては何かは。かうながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひ侍る。」とのみ宣へば、北の方、「げにしか思さるべき事なれど、生ける身を捨て、かくむつけき住居する人は侍らずやあらむ。大將の造り磨き給はむにこそは、引き換へたる玉の臺にもなり返らめど、只今は兵部卿の宮の御女より外に、御心分け給ふ方もなかななり。昔より好き／＼しき御心にて、なほざりに通ひ給ひける所々も、皆思し離れたんなり。ましてかう物はかなき様にて藪原に過し給はむ人をば、心清う我を頼み給へると尋ね出で給はむこと、いと難くなむあるべき。」などいひ知らするを、げにと思すもいと

悲しく、つく／＼と泣き給ふ。されど動き給ふべきにもあらねば、よろづにいひ煩ひ暮らして、「さらば侍従をだに。」と、日の暮るゝまゝに急げば、侍従は心あわたゞしくて、泣く／＼、「さらば、先づ今日は、かう責め給ふ御送りばかりに参うで侍らむ。北の方の聞え給ふもさすがに道理なり。また思し煩はせ給ふもさる事に侍れば、中に見侍りて心苦しくなむ。」と忍びて申す。姫君は、この人さへうち棄ててむとするを、恨めしう思せど、いひ留むべき方もなくて、いと音をのみ泣き給ふ。形見に添へ賜ふべき身馴れ衣も鹽馴れたれば、

○身馴れ衣 着馴れ衣なり。かゝる場合は我が衣を脱ぎて賜ふ例なり。

こゝに年經ぬる驗見せ給ふべき物なくて、我が御髪の落ちたりけるを取り集めて、鬘にし給へるが、九尺餘ばかりにていと清らなるを、をかしげなる箱に入れて、

○九尺餘ばかり この姫君の髪は特に長く美しきこと、末摘花の巻にあり。

昔の薰衣香のいと香ばしき一壺具して賜ふ。

絶ゆまじき筋と頼みし玉かづら

思ひの外にかけ離れぬる

○「絶ゆまじき」は、うち棄てらるまじき。「玉かづら」は、「玉葛」と「玉鬘」。「玉葛」の時は、長く絶えぬ意の詞に用ふる枕詞。「玉鬘」の時は、「かけ」の枕詞。

○「うち棄つることあるまじき人と頼みしに、思ひの外に遠く離れ行く。」

故まゝの宜ひ置きしこともありしかば、甲斐なき身の有様なれども、見果てゝむとこそ思ひつれ。うち棄てらるゝも道理なれど、誰に見譲りてかと恨めしうなむ。」とて、いみじう泣き給ふ。侍従も物も聞えやらす泣く。「まゝの遺言は更にもいはす、年頃の忍び難き世の憂さを過し侍りつるに、かく思はぬ道に誘はれ侍りて、遙なる程にまかりあくがるゝこと。」とて、

玉かづら絶えてもやまじ行く道の

手向けの神もかけて誓はむ

○「手向けの神」は、道の神、道祖の神をいふ。

○「これより行く道の神に誓ひても、姫君を思ふことは絶えざるべし。」

たゞ命の程こそ知り侍らね。」などいふに、北の方、「いづら、暗うなりぬ。」と呟かれて、心も空に引き出づれば、願みのみせられけり。年頃わびつゝも行き離れざりつる人の、かく別れぬることを、いと心細う思すに、世に用ひらるまじき老人どもさへ、「いでや道理ぞ。いかでか立ち止り給はむとする。我等もえこそ堪ふまじけれ。」と、己が身々につけたる便ども思ひ廻らしつゝ、止るまじう思へるを、姫君はいと人聞悪く聞きおはす。

霜月ばかりになりぬれば、雪霰がちにて、外には消ゆる間もあれど、朝日夕日を防ぐ蓬葎の蔭に深

う積りて、越の白山思ひ遣らるゝ雪の中に、出で入る下人だになくて、つれづれとながめ給ふ。は

かなき事をも聞え慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる侍従さへなくなりて、夜も塵がましき御帳の内に、

傍寂しく物悲しく思さる。源氏の殿には、女君の珍しく、いとゞ物騒がしき御有様にて、やむごと

なくは思されぬ所々には、わざとも訪れ給はず。ましてその人はまだ世にやおはすらむとばかり思し出

づる折もありけれど、尋ね給ふべき御志も急がれずしてあり経るに、年も變りぬ。

四月ばかりに花散里の女君を思ひ出で給ひて、西の對の女君に御暇聞えて忍びて出で給ふ。日頃降り

つる餘波の雨、少し注ぎてをかしき程に、月さし出でたり。昔の御歩き思し出でられて艶なる程の夕月

夜に、道の程よろづの事思し出で、おはするに、形もなく荒れたる家の、木立繁く森のやうなるを過ぎ

給ふ。大きな松に藤の咲きかゝりて月影にうち靡きたる、風につきてさと匂ふが懐かしく、そこはか

となき薫なり。花橋とは變りてをかしければ、

○花橋とは變りて 古今集、「五月まつ花橋の香をかげ昔の人の袖の香ぞする。」「五月待つ」は、

五月を待ちて咲くをいふ。

少し車よりさし出で給へるに、柳いたう枝垂りて、築土もさはらねば亂れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、早うこの宮なりけり。いと哀れにて車押し止めさせ給ふ。例の惟光はかゝる御忍び歩きに後れねばさぶらひけり。召し寄せて、「こゝは故常陸の宮ぞかしな。」「しか侍る。」と申す。「こゝに

ありし人はなほやながむらむと訪ふべけれど、わざと訪はむも事々し。かゝる序に入りて消息せよ。よ

く尋ね寄りていひ出でよ。人違しては嗚呼ならむ。」と宣ふ。

○人違しては、久しく訪はねば、他に移りなどして、家主の變りたらむも知り難き故なり。

こゝにはいとゝながめまさる頃にて、つく／＼とおはしけるに、晝寢の夢に故宮の見え給ひければ、
覺めていと餘波悲しく思しつゝ、漏り濡れたる廂の端つ方など押し拭はせ、こゝかしこの御座引き繕は
せなどし給ひて例ならず世づき給ひて。

亡き人を戀ふる袂の隙なきに

荒れたる軒のしづくさへ添ふ

もいと心苦しき程になむありける。惟光入りてめぐる／＼、人の音する方やあると見るに、聊も人氣
もせず。「さればこそ、往來の道に見入るゝ折もあれど、人住み氣もなきものを。」と思ひて歸り參る程
に、月明く射し出でたるに見れば、格子二間ばかり上げて簾動く氣色なり。僅に見つけたる心地恐ろし
くさへ覺ゆれど、寄りて聲作れば、いと物舊りたる聲にて、先づ咳を先に立て、「かれは誰そ、何人
ぞ。」と問ふ。惟光名乗りして、「侍従の君と聞えし人に對面給はらむ。」といふ。「それは外になむおは
す。されど思し分くまじき女なむ侍る。」といふ聲、いたう老い過ぎたれど、かねて聞きし老人と聞き
知りにけり。内には、思ひ寄らす狩衣姿なる男の忍びやかに振舞へば、

○狩衣姿、もと狩獵用の服、後に一種の禮服となれり。(「當時の世相」第八圖)

かゝる人の姿を見馴らはすなりにける目には、もし狐などの變化にやと覺ゆ。惟光、近う寄り來て、「確
かなにむ承らまほしき。昔に變らぬ御心ならば、君の尋ねさせ給ふべき御志も絶えずなむおはします
めるかし。今宵も行き過ぎ難てに止まらせ給へるに、いかゞ聞えさすべき。後安くを。」といへば、女
どもうち笑ひて、「變らせ給ふ御心ならば、かゝる淺茅が原を移り給はで侍りなむや。たゞ推し量りて
聞えさせ給へかし。年經たる我等の心にも、珍らかなる姫君の御有様を類あらじとこそは見奉り過し侍
れ。」と、問はず語りもや、崩し出づべきが煩しければ、惟光、「よし／＼、先づかくなむと聞えむ。」と
て參りぬ。君、「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬の繁さかな。」と宣へば、惟光、
「しか／＼なむたどり寄りて侍りつる。侍従が叔母の少將といひ侍りし老人なむ、變らぬ聲にて侍りつ
る。」と、有様申す。いみじう哀れに、かゝる草繁き中に何心地して過し給ひつらむ。などて今まで訪
はざりけるよと、我が心の情なさも思し知らる。君、「いかゞはすべき。かゝる忍び歩きも難かるべけれ
ば、かゝる序ならではえ立ち寄られじ。變らぬ御心ならば、げにさこそはあらめと推し量らるゝ人様に
なむ。」とは宣ひながら、ふと入り給はむことは、さすがに愼ましう思さる。由ある御消息も聞えまほ
しけれど、口遅さの昔のまゝならば、御使の立ちためらはむ程もいとほしと思し止めつ。惟光も、「更に
え分けさせ給ふまじき蓬の露けさになむ侍る。露少し拂はせてなむ入らせ給ふべき。」と申せば、

尋ねても我こそとはめ道もなく

深き蓬のものとこのころを

○「我こそ深き蓬の道もなく繁れるを分けて、もとの心を訪ふべし。」

○本篇の題はこの歌による。

と獨ごちて車より下り給へば、惟光、草の露を馬の鞭してうち拂ひつゝ入れ奉る。雨注ぎもなほ秋の時
雨めきてうち注げば、惟光、「御笠さぶらふ。げに木の下露は雨にまさりて。」と申す。

○木の下露、古今集、「みさぶらひ御笠と申せ、宮城野の、木の下露は雨に優れり。」「みさぶらひ」
は、御侍。「御笠と申せ」は、御笠奉れ。

まして御指貫の裾はいたうそぼちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなり
て、入り給ふにつけてもいと無徳なるを、立ち混り咎むべき人もなきぞ、なか／＼心安かりける。

姫君は、さりととも待ち過し給へるも著く、嬉しけれど、いと耻かしき御有様にて對面せむを、いと
慎ましく思したり。大貳の北の方の奉り置きし御衣どもを、心ゆかす思されしまゝに見も入れ給はざり
けるを、女房ども、香の御唐櫃に入れたりけるが、いと懐かしき香に染みたるを奉りければ、いかゞは
せむと着換へ給ひて、かの煤けたる御几帳引き寄せておはす。君は入り給ひて、「年頃の隔にも心ばか
りは變らず思ひ遣りまゐらせながら、更に音づれ給はぬ恨めしさに、今まで試みまゐらせつれど、杉な

らぬ木立の印に、え過ぎでなむ負けにける。」とて、

○杉ならぬ木立、古今集、「我が庵は三輪の山もと、豊しくば、訪ひ來ませ杉立てる門。」により、
こゝにては門近き松をいふ。

○負けにける、姫君より音づれ給はねば、今まで試に訪ふまじと思ひし心の負けたるなり。實は定
れ給ひしをさりげなく取り繕ひたるなり。

几帳の帷子を少し掻き遣りて覗き給へば、姫君は例のいと慎ましげにて、とみにも答へ給はず。されど
かくばかり分け入り給へる御志の淺からぬに思ひ起してぞ、ほのかに宣ひ出で給ひける。君、「かゝる草
隠れに過し給ひつる年月の哀れも疎ならず。また御心の中も知らずながら、我が心の變らぬに馴らひて
分け入り侍りつる露けさをいかゞ思す。年頃の息はなべての世と思し赦し給はなむ。今より後御心にか
なはざらむには、いひしに違ふ罪も負ふべき。」など、さしも思されぬことも、情々しう宣ふことゞも
あんめり。立ち止り給はむもいと耻かしき所の様なれば、つき／＼しう宣ひ過して出で給ひなむとす。
曳き植ゑしならねど、松の木高くなりける年月の程も哀れに、夢のやうなりし御身の有様も思しつ
づけらる。

○曳き植ゑし、後撰集、「曳き植ゑし人はうべこそ老いにけれ、松の木高くなりけるかな。」「曳き
植ゑし」は、小松を野より曳き抜き来て植ゑしなり。

藤波のうち過ぎ難く見えつるは

まつこそ宿のしるしなりけれ

○「藤の花を見て過ぎ難く思ひしは、君の持ちし験なりき。」また、「松がこの家の印にてありき。」

「數ふれば、年はこよなうも積らぬを、都には變りにける事の多かりけるも様々あはれになむ。今のど

かに鄙の別れに衰へし世の物語も聞え盡すべき。」

○鄙の別れに衰へし 古今集、「思ひき鄙の別れに衰へて海士の繩たぎ漁りせむとは。」による。

「鄙の別れに衰へて」は、別れて田舎に住みわびて。「繩たぎ」は、繩を手繰るなり。こゝにては須磨にさすらしし時の物語をいふ。

またこの春秋の暮し難さなども、我ならで誰にかは憂へ給はむと思ふも、前の世の契怪しうなむ。」など宣へば、姫君、

年を経てまつしるしなき我が宿を

花の便りに過ぎぬばかりか

○「久しく持ちし験もなき（松の印もなき）我が宿を訪ひ給ひしは、藤の花に心ひかれて過ぎ難かりしのみにて、我を思ひ給ひてにはあらざるべし。」

と、忍びやかにいひ出で給へる氣配も、袖の香も、昔よりはねび優り給へるにやと思さる。月入り方に

なりて、障るべき渡殿めく屋もなく、

○昔物語 桂中納言物語に、貴家の女が几帳用の帷子を衣服に纏ひて着し事あり。

軒の端にも障らねば、西の妻戸の明きたるよりいと華やかに射し入りたれば、あたり／＼見えて、昔に

變らぬ御しつらひの様など、忍草にやつれたる外の見る目よりみやびかに見ゆ。昔物語に帳毀ちたる女

もありけるをと思し合はするに、

○昔物語 桂中納言物語に、貴家の女が几帳用の帷子を衣服に纏ひて着し事あり。

同じ様にて年舊りにけるもあはれなり。「姫君のひたぶるに物慎みしたる氣配のさすがに氣高きも心に

く思されて、さる方にて忘れじと思ひしを、年頃様々の物思に惚れ／＼しくて、今まで音づれざりつる

を、つらしと思しつらむ。」と、いとほしく思す。かの花散里の君も、鮮かに今めかしくなど華やぎ給

はねば、この姫君の咎も多う隠れにけり。

祭、御輿などの頃、君の御用意どもにことづけて、

○祭、御輿 祭は四月賀茂の祭。御輿はその前、齋院の御成の儀式。

人々の奉りたる物のいろ／＼に多かるを、こゝかしこに奉り給ふ。中にもこの宮には細やかに思し寄り

て奉り給ふ。睦じき政所の人々にも仰言賜ひ、

○政所 三位近衛大将以上の貴族の内政を掌る所。

生

四四五

下部ども遣して蓬拂はせ、周囲のあらはに見苦しきを、忽に板垣といふ物うち堅め繕はせ給ふ。かう尋ね出で給へりと、人の聞き傳へむは、我が御爲面目なければ、渡り給ふことはなし。御文いと細やかに書き給ひて、「二條の院にいと近き所を造らせ侍れば、そこになむ渡し奉るべき。よろしき童女など求めてさぶらはせ給へ。」など、人々の上まで思し遣りつゝ訪ひ給へば、かく怪しき蓬の下にては、置き所もなきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きて喜びまゐらせける。君は、なほざりの御すさびにても、世の常の人をば目止め給はず、世にこれとは思はれ、心に止る節あるあたりをのみ尋ね寄り給ふものと、人の思ひつるに、かく引き違へ、何事もなみく／＼にだにあらぬ人を物めかし出で給ふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の契なゆめりかし。今は限りと侮りまゐらせて、様々に競ひ散り別れし上下の人々、我もく／＼参らむと争ひ出づるものあり。異なることなき生受領などに散り行きし人も、便なき心地するまゝに、この姫君の御心ばへ、埋れ痛きまでよくおはするに心安く思ひて、参り歸るも、うちつけなる心見えたり。君は古にも優りたる御勢にて、物の思ひ遣りも添ひ給ひにければ、細やかに思し控てたるに匂ひ出で、この宮の内やう／＼人目も見え、木草の色もたゞ凄く見なされしを、遣り水掻き拂ひ、前栽の木立も涼しうしなしなどして、下家司など、

○下家司 家司は貴族の殿に仕ふる役人。下家司は卑しき家司。

この宮を、君の御心止めて思さるゝなゆめりと見取りて、御氣色賜はりつゝ、追従し仕うまつる。二年は

かりこの古宮になかめ給ひて、東の院といふ所になむ後には渡し奉り給ひける。君の對面し給ふことなどはいと難けれど、近きしめの程にて、渡り給ふ序にはさし覗きなどし給ひつゝ、いと侮らはしげにももてなし給はず。かの大貳の北の方、京に上りて驚き思へる様、侍従が嬉しきものゝ、今暫し待ちまゐらせざりつる心淺さを恥かしう思へる程など、今少し語らまほしけれど、いと頭痛ううるさく物憂ければなむ、今また序あらむ折に思ひ出で、聞ゆべきとぞ。

關屋 せきや

伊豫の守といひしは、故院崩れさせ給ひてまたの年、常陸の介になりて下りしかば、かの空蟬の君も誘はれにけり。

○空蟬の君 伊豫の守の後妻。源氏の君の懸想のこと帯木、空蟬の巻にあり。

女は須磨の御旅居も遙かに聞きて、人知れず思ひ遣りまゐらせぬにもあらざりしかど、御消息聞ゆべき便だになくて、筑波根の山を吹き越す風も浮きたる心地して、聊かの言傳だになくて年月重りけり。

○筑波根の山

古今集、「甲斐が根を根越し山越し吹く風を人にもがもや言傳やらむ。」人にもがも

や」は人によりてほし。こゝは、筑波根を越えて京の方に行く便りはありしが、確かならぬ心地して、聊かの言傳もせざりしなり。

君、京に歸り給ひてまたの年の秋ぞ、常陸の介は上りける。逢坂の關入る日しも、源氏の君、石山に御願果しに詣で給ひけり。京よりの紀の守などいひし子どもなど迎に來たる人々、「この殿かく詣で給ふべし。」と告げければ、道の程騒がしかりなむとて、また曉より急ぎけれど、女車多く所狭く搖ぎ來るに日闌けぬ。打出の濱に來る程に、「殿は粟田山越え給ひぬ。」とて、御前驅の人々、道も避りあへず來

込みぬれば、皆關山に下り居て、こゝかしこの杉の下に車ども昇き下し、木隠れに居長まりて過し奉る。かたへは後らかし、先に立てなどしたれど、なほ車十ばかりぞ、袖口、物の色合なども簾より漏り出で、見えたるは、田舎びすゆかしくて、齋宮の御下りなどやうの折の物見車思し出でらる。

○齋宮の御下り

伊勢神宮に奉仕の皇女の伊勢へ下り給ふ行列なり。

君のかく世に返り榮え出で給ふ珍しさに、數もなき御前驅ども、この女車どもに目止めたり。九月晦日なれば、紅葉いろ／＼こきませ、霜枯の草むら／＼をかしう見え渡るに、關屋よりさと崩れ出でたる御車ども、旅姿の襖、つき／＼しき縫物、括染の襦もさる方にをかしう見ゆ。

○本篇の題はこの「關屋」といふ地名による。

○襖 禮装の上衣なる袍の兩腋を明け、袖に括りを附けたるもの。これに縫又は括染などを施す。

君の御車は簾下し給ひて、かの昔の小君、今は右衛門の佐なるを召し寄せて、「今日の御關迎はえ思ひ捨て給はじ。」など言ふ。

○今日の御關迎 空蟬の君に行き逢ひたるを戲に關まで迎へたりといひ、女君も確には思ひ給ふまじの意なり。

御心の中にいとあはれに思し出づること多けれど、甲斐なし。女君も人知れず昔のこと忘れねば、取り返してもの哀れなり。

○昔のこと、源氏の君、紀の守の家に泊りし時、空蝉の君に逢ひしことにて、今は十二年ばかり前のこととなれり。

女、

行くと來と堰き止め難き涙をや

絶えぬ清水と人は見るらむ

○「行くと來」とは、往く折も、歸る折も。「絶えぬ清水」は、名高き逢坂の關の清水をいふ。
○「行く折も歸る折も止め難き涙を、かの絶えぬ清水と人は見るならむ。」

君は我が心をもえ知り給はじかしと思ふに、いと甲斐なし。

石山(昔)より歸り給ふ日の御迎に、右衛門の佐(空門ノ君ノ弟)參れり。一日罷り過ぎにし畏りなど申す。昔童(小童)にて、いと睦まじうらうたき者にし給ひ、爵(貴)など得しまでこの君の御蔭(かげ)に隠れたりしを、覚えぬ世の驅(須磨ノこと)ありし頃、世の聞えに憚りて常陸に下りしにぞ、君は少し御心隔て給ひけれど、色にも出だし給はず。昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人の中には數まへ給へり。紀の守といひしも今は河内の守にぞなりける。その弟は右近(右近)の丞解(丞)かれて、須磨の御供(御供)に下りしをぞ、君は取り分きて取りなし給ひければ、

○須磨の御供、惟光、良清と共に須磨に行きしをいふ。須磨の巻、播磨の巻の住吉詣に出づ。

それにぞ誰も思ひ知りて、衛門の佐も、「などで世に従ふ心を使ひけむ。」など思ひ出でける。君は佐召

し寄せて女君に御消息あり。佐、「今は思し忘れぬべきことを、心長くもおはするかな。」と思ひ居たり。御文、「一日は契(先日)ありと思ひ知られしを、さは思し知りけむや。

わくらばに行きあふみちを頼みしも

なほかひなしや汐ならぬ海

○「汐ならぬ海」は湖水。湖水には海布(海布)は生えぬより、見ることなかりしを歎く。

○「偶然に行き逢ひしは、前世の宿縁深き故と頼もしかりしが、見ることもなくて甲斐なかりき。」

關守(關守)のさも羨ましく目覺(目覺)しかりしかな。」とあり。

○關守、空蝉の君の夫常陸の介が、女君を大切に護り居たりしをいふ。

「年頃の途絶(途絶)より初々(初々)しくなりけれど、心にはいつとなくたゞその心地(折)するになむ。好き(アタマカシク)しう、いと憎まれむや。」とて御文賜へれば、辱(恥)くて、持て行きて、「御返聞え給へ。昔のやうにもあらずやあらむと思ひ侍りしに、同じやうなる御心の懐かしさになむ。御文の御使(御使)など今は用なきことと思へど、えこそつれなく聞え返さね。女なれば負け給へらむも罪赦されぬべし。」などいふ。女も今はましていと恥かしう、よろづの事初々(初々)しき心地すれど、珍(珍)しきにやえ忍ばれざりけむ、

逢坂(逢坂)の關やいかなる關なれば

しげきなげきの中を分くらむ

○「投げ木」は、薪。「しげきなげきの中を分く」は、「深く歎き思ふ中を隔つる」と「茂れる木立の中を分け行く」とをいふ。

夢のやうになむ。」と聞えたり。(申上り) あはれともつらしとも忘られず思し置かれたる女なれば、君はその後も折々はなほ宣ひ動かし給ひけり。

かゝる程に、この常陸の介、老の積にや悩ましうのみして、物心細かりければ、子どもに、たゞこの女君の御事をのみいひ置きて、「よろづの事、たゞこの御心にのみ任せて、我がありつる世に變らで仕うまつれ。」とのみ且暮いひけり。女君、心憂き宿世にて、この人にさへ後れて、いかなる様にはふれ惑ふべきにかあらむ。」と思ひ歎くを見つれど、命は限りあるものなれば、惜み留むべき方もなし。常陸の介、「いかでこの女君の御爲に残し置く魂もがな。我が子どもの心も知らねば。」と、心許なう悲しき事にいひ思へど、心のまゝにえ留めぬことなれば、遂に失せぬ。(子等) 暫しこそ、「さ宣ひしものを。」など情作れど、(御切ニスレド) 上べこそあれ、なほつらきこと多かり。女は、とあるもかゝるも世の道理なれば、身一つの憂きことにて歎き明し暮らし、人知れず思ひ沈みて、人にも知らせで尼になりけり。

本書の三色版口繪は、本篇を描きたるものにて、源氏の君、右衛門佐を召して、空蟬の君への消息を渡す所なり。

梗概、篇

繪合 ゑあはせ

前の齋宮の内裏へ御参りのこと、入道の中宮、御心に入れて催し給ふ。上は珍しき人参り給ふと聞し召しければ、人知れず大人は耻かしようやあらむと思しけるに、夜更けて参り上り給へる、いと慎ましげに大様に、さゝやかにかよわき氣配のし給へれば、いとをかしと思しけり。弘徽殿の女御は、(元朝中御、今權中納言ノ女) これまでに御覽じ馴れたれば、心安く思し給へど、宮は人様もいたう靜かに、内大臣の御もてなしもやむごとなければ、馴れにくく思されて、御童遊に晝など渡らせ給ふことは、あなたがちにおはします。上はよろづの事よりも、繪を興あるものに思したり。立て、好ませ給へばにや、二なう描かせ給ふ。齋宮の女御、いとをかしう描かせ給ひければ、これに御心移りて、こなたに渡らせ給ひつゝ描き通はせ給ひ、(前ヨリ) ありしより異に御思まされるを、權中納言聞き給ひて、飽くまで角々しき御心より、優れたる上手どもを召して、またなき様なる繪どもを、二なき紙どもに描き集めさせ給ふ。わざとをかしう描きた

るは、上のこれを御覽するにも、心安くも取り出で給はず、いといたく秘め給ひ、宮の御方にもて渡らせ給ふをも惜み給へば、源氏の君、聞き給ひてうち笑ひ給ひ、「我が方に古代の御繪どもの侍る、參らせむ。更に只今の上手どもに劣らぬ、少し侍らむ。」と奏し給ひ、殿に舊き新しき繪ども入りたる御厨子ども開かせ給ひて、對の女君諸共に今めかしきはそれごとくと選り整へさせ給ふ。かの旅の御日記の箱をも取り出でさせ給ひて、この序にぞ女君にも見せまゐらせ給ふに、その世の夢を思し醒ます折なき御心に、取り返し悲しう思し出でられ、今まで見せ給はざりける恨をぞ宣ひける。かたはなるまじき一帖づゝ、さすがに浦々の有様さやかに見えたるを選り出で給ふ序にも、かの明石の家居ぞまづいかにと思しやらぬ時の間もなき。

中宮も御覽じ捨て難く思はずことなれば、御行も怠りつゝ御覽す。上の女房などのとりくに論ずるを聞き召して、左、右に分たせ給ひ、竹取の翁の繪に、空穂物語の俊蔭を、次に伊勢の物語に正三位を合せて、亂りがはしく争ふに、一卷に言の葉を盡してえもいひやらす。源氏の君參り給ひて、をかしと思して、「同じくは御前にてこの勝負定めむ。」と宣ふ。かゝる事もやとかの須磨明石の二巻は取り混ぜさせ給へりけり。權中納言もその御心劣らず。君、「今新に描かむことは本意なきことなり。たゞあらむ限りをこそ。」と宣へど、中納言は人にも見せて、人知れず窓を明けて描かせ給ふ。その日と定めて、俄なるやうなれど、をかき様になして、左、右の御繪ども參らせ給ふ。清涼殿

に御座よそほはせて、北、南、方々に分れて人々さぶらふ。召ありて源氏の内大臣、權中納言參り給ひ、帥の宮も參り給へれば、仰言ありてこの判仕うまつり給ふ。げにいとみじう描き盡したる繪どもあり。朝餉の御障子明けて中宮もおはします。定めかねて夜に入りぬ。左なほ一つある終に、須磨の巻出で來たるに、權中納言の御心騒ぎにけり。右も心して、終の巻は心殊に優れたるを選り置き給へれど、かゝるいみじき物の上手の、心の限り思ひ澄まして靜かに描き給へるは、譬ふべき方なし。帥の親王より始め奉りて、涙止め給はず、その世におはしけむ有様、御心に思しけむ事ども、只今のやうに見ゆ。様々の御繪の興、これに移り果て、左、勝になりぬ。夜明け方近くなる程に、物いとあはれに思され、御土盃など參る程、いみじう面白し。

君は、昔の例を見聞くにも、齡足らで官位高く昇りし人は、長くはえ保たぬなりけり。この御世には身の覚え過ぎたり。中頃沈みたりし憂によりて今まで長らふるなり。今より後もなほ榮えなば、命後めたし。靜かに籠り居て、後の世の事を勤め、かつは齡をも延べむと思して、山里ののどかなるを占めて、御堂造らせ給ふ。

松 風 まつかぜ

東の院造り立て、花散里と聞えし女君を西の對に移ろはし給ふ。東の對は明石の女君と思し掟てたり。北の對は殊に廣く造らせ給ひて、假にもあはれと思して、行末掛けて契り頼ませ給ひし人々の集ひ住むべき様に、隔てくしつらはせ給へるも懐かしう見所ありて細やかなり。

明石には御消息絶えず、今は上り給ひぬべきことをば宣へど、女君は、「この若君の御面伏に、數ならぬ身の程こそあらはれめ。」と思ひ亂れても、また、さりとてかゝる所に若君の生ひ出で給ひて、數まへられ給はざらむもいと哀れなれば、なか／＼心も盡し果てぬ。

昔母君の御祖父中務の宮と聞えけるが領し給ひける所、大堰河のわたりにありけるを、その後、確かに相繼ぐ人もなくて、年頃荒れたりしを思ひ出で、かの時より傳はりて、宿守のやうにてある人を明石に呼び取りて語らふ。世の末に思ひ掛けぬこと出で來てなむ、更に都の住處求むれば、家の内の事どもは追々にしてむ。先づ急ぎて大方の事どもを物せよ。」といふに、その後、物など多く受け取りてなむ急ぎ造りける。造り果て、ぞ、しか／＼の所をなむ思ひ出でたると聞えさせけるに、君は口惜しからぬ用意の程かなと思し給ふ。惟光の朝臣を大堰へ遣して、さるべき様に、こゝかしこの用意などせさせ

給へり。明石には親しき人々、いみじう忍びて下し遣はす。遁れ難くて今はと思ふに、年經つる浦を離れなむこと哀れに、入道の心細くて一人止まらむことを思ひ亂れて、よろづに悲し。入道も、かゝる御迎にて上る幸は、年頃寝ても覺めても願ひ渡りし志のかなふと、いと嬉しけれど、相見で過さむわびしさの堪へ難う悲しければ、「いかで若君を見奉らで侍るべきか。」といふより外の事なし。母君もいみじう哀れなり。これこそは世を限るべき住所なめれと、命を限りに思ひて契り過し來ぬるを、俄に行き離れなむも心細し。

秋の頃はひなれば、物哀れ取り重ねたる心地して、その日とある曉、秋風涼しくて、虫の音も取りあへぬに、女君海の方を見出して居たるに、入道、鼻すゝりして行ひいましたり。

行く先を遙かに祈る別れ路に

たへぬは老の涙なりけり

いとも思々しや。」とて、押し拭ひ隠す。尼君、

諸共に都は出できこのたびや

ひとり野中の道に惑はむ

とて泣き給ふ様、いと道理なり。女君、

生きてまた相見むことをいつとてか

限りも知らぬ世をば頼まむ

「この身は長く世を棄てし心深く侍り、君達は世を照らし給ふべき御光著ければ、今日永く別れ奉りぬ。今は我を世に亡くなりぬるものぞと思せ。年頃思ひ惱み侍りし御事もかくて心に離れ侍り。ひたみちに勤めて涼しき方に赴き侍りなむ。命盡きぬと聞き召すとも、後の事思し營むな。」などいひてうち髪みぬ。辰の時に船出し給ふ。浦の朝霧隔たり行くまゝに、いと物悲しくて、入道の心澄み果つまじく、あくがれてながめ居たり。思ふ方の風にて限りける日違へす都に入り給ひぬ。家の様は面白うて、年頃経つる海面に似たれば、所變へたる心地もせず。造り添へたる廊など由ある様に、水の流れもをかしうしなしたり。源氏の君は渡り給はむことを、とかう思し謀る程に日數経ぬ。女君はなか／＼に物思ひつづけられて、棄てし家居も戀しうつれ／＼なれば、かの御形見の琴を掻き鳴らすに、松風響き合ひたり。尼君、物悲しげにて寄り臥し給へるが起き上りて、

身をかへてひとり歸れる山里に

聞きしに似たる松風ぞ吹く

○本篇の題はこの歌による。

女君、

故郷に見し世の友を戀ひわびて

さへづることを誰かわくらむ

○「故郷の父君などを戀ひ慕ひて、海士の囀る如き言(琴)を母君の外に誰か聞き分くべき。」

君は對の女君にかくなむと確かに知らせ給はざりければ、例の外より聞き出でやし給ふとて、「柱に見るべき事侍るを、心にもあらで程經にけり。訪はむといひし人さへかのわたり近く來居て待つなれば、心苦しめてなむ。嵯峨野の御堂にも、また飾なき佛の御訪すべければ、一三日は侍りなむ。」と宣ひて忍びやかに黄昏時におはし着きたり。さる御心して引き繕ひ給へる御直衣姿、世になくなまめかしう眩き心地すれば、女君の思ひ咽びつる心の闇も晴るゝやうなり。君は珍しうあはれにて、若君を見給ふにも、いかゞ淺くは思されむ。うち笑みたる顔の、何心なく愛敬づき匂ひたるを、いみじうらうたしと思す。夜一夜よろづに契り語りひ明かし給ふ。つとめて東の渡殿の下より出づる水の心ばへ繕はせ給ふとて、いとなまめかしき桂姿にうち解け給へるを、尼君覗きていとめでたしと見奉るに、君は關伽の具などのあるを見給ふに思し出で、「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや。」とて、御直衣召し出で、着給ひ、几帳の下に寄り給ひ、いと懐かしう語り給ふ。

御寺に渡り給ひて事定め置かせ給ひ、月の明きに歸り給へば、ありし夜の事思し出でらるゝ折過ぎず、女君かの琴の御琴さし出でたり。掻き鳴らし給ふに、また調も變らず、その折の心地し給ふ。女君はこよなうねび優りにける御容貌、氣配、思し棄つまじう、若君もまた盡きもせずまもられ給ふ。

いかにせまし、かく隠(世に知られず)ろひたる様にて、生ひ出でむも心苦しう口惜しければ、「二條の院に渡してむ。」と思せど、またこの女君の思はむこともいとほしくて、いひ出で給はで、涙ぐみて見給ふ。若君は幼(若)き心地に少し恥ぢらひたりしが、やう／＼うち解けて、物いひ笑ひなどして睦れ給ふを見るまゝに、句(言)まりて美し。

二條の殿におはしましたつきて、山里の御物語などし給へど、女君は例の御心解けず見え給へば、さし寄り給ひて、「誠(まこと)はらうたげなる姫君のあれば、契(ちがひ)淺くも見えぬを、我と同じ御心に思ひめぐらして、御心に思ひ定め給へ。いかゞすべき。こゝにて育(はぐ)み給ひてむや。」と宣ふ。女君、少しうち笑み給ひ、「幼(若)き御心にいとうかなひぬべくなむ。いかに美しき。」とて、兒(こ)を切(き)にらうたきものにし給ふ御心なれば、その姫君を得て、抱(かか)きか(か)しづかばやと思す。君は、いかにせまし。迎へやせましと思し亂る。

薄

雲

うすぐも

冬になり行くまゝに、明石の女君は河面(かはづ)の住居、いと心細さまさりて、うはの空なる心地のみしつづ明かし暮すを、君、「かくてはえ過(す)さじ。かの近(ひんがし)き東の院に思ひ立ちね。」とそ(こ)のかし給へど、いかにせましと思ひ亂るゝに、「さらばこの若君をかくてのみは便(びん)なきことなり。思ふ心あればいと長く

なむ。かの對(たい)の君の常にゆかしがれば、しばし見馴らばせて、袴(はかま)着の事なども、人知れぬ様ならずしなむとむ思ふ。」と、まめやかに語らひ給ふ。女君もさ思すらむと思ひ渡りしことなれば、いと胸潰れぬ。「我が身はとてまかくても同じ事、生先(まひさき)遠き若君の御上は、遂にはかの對(たい)の君の御心に掛るべきにこそあめれ。さりとならば、げにかう何心なき程にや譲りまゐらせまし。」と思へど、また、「若君を放ちては心許なく、つれ／＼慰む方なくては、いかに明し暮すべからむ。何につけてかたまさかの御立寄もあらむ。」など思ひ亂るゝにつけても、身の憂きこと限りなし。尼君、思(おも)ひ遣り深き人にて、「若君を見奉らざらむことは、いと胸痛かりぬべけれど、遂に御爲に善かるべからむことをこそ思ひたどらめ。君も淺く思ひて宜ふことにはあらじ。」と教ふるに、女君も思(おも)ひ弱(よわ)りになり。十二月にもなりぬ。掻き暮らし降り亂れし雪少し解けて君渡り給へり。例は待ちまゐらすに、今日は、「さならむ。」と思ふより胸うち潰れぬ。この春より生(な)ふす御髮(みづかみ)、尼削(あま)ぎの程にて、ゆら／＼とめでたく、面(おもて)つき、まみの薫れる程などいふも更なり。餘所(よそ)に渡して思ひ遣らむ程の女君の心の闇、推し量り給ふに、いと心苦しければ、よろづうち返し宜ひ明かす。女君念(ねん)じあへすうち泣く氣配(けい)哀れなり。姫君は何心もなくして、御車に乗らむことを急ぎ給ふ。車寄せたる所に、母君自ら抱きて出で給へば、片言(かたこと)の聲(こゑ)いとうつくしうて、袖を捉へて、「乗り給へ。」と引くも、いみじう覺えて、女君、

末遠(すえん)き二葉(ふたは)の松(まつ)に引き別れ

いつか木高き蔭を見るべき

暗くなりて二條の院におはしまし着きて、御車寄するより、この院の華やかに氣配異なれば、田舎びたる心地には、こゝに立ち交らはむもはしたなしと思ふ。若君は道にて寝給ひにけり。抱き下されて起き給へど、泣きなどはし給はず。こなたにて御菓物參りなどし給へば、やうく見廻らして、母君の見えぬを求めて、らうたげにうち響み給へば、乳母召し出で、慰め紛はし給ふ。暫しは人々を求めて泣きなどし給ひしかど、大方心安くをかしき御心様にて、女君にいとよく附き睦び給へれば、女君はいみじううつくしきもの得たりと思しけり。御袴着に、姫君の袴引き結び給へる胸付ぞ、美しげき添ひて見え給へる。大堰の殿には盡きせず戀しきにも、かく姫君のもてなしかしづかれ給ふを聞くは、さすがに嬉しかりけり。

君は、明石の君の待遠ならむには、「さればよ。」と思はむに、いとほしければ、年の内にぞ忍びて渡り給へれど、對の女君も今は殊に怨じ給はず、うつくしき姫君に罪免し給へり。

その頃太政大臣失せ給ひぬ。世の重しとおはしつる人なれば、上にも思し歎く。入道の中宮も春の始より惱みわたらせ給ひて、三月にはいと重くならせ給ひぬれば、行幸などあり。いみじう思し歎きたる御氣色なれば、中宮もいと悲しと思して、「今年は必ず遁るまじき年と思ひ侍りつ。内裏へ參りて心のどかに昔の御物語もなど思ひ侍りながら、うつし様なる折少く侍りて、口惜しうわびしくて過ぎ侍りぬ

ること。」と、いと弱げに宜ふ。三十七におはしませど、いと若く盛に清らなる御様を、上は惜しく悲しと見奉らせ給ふ。さて俄に様々いみじき御祈などせさせ給ふ。限りあれば、上は程なく歸らせ給ふに、悲しきこと多かり。宮はいと苦しうて、はかくしく物も宜はず。君はいみじう悲しく思さるれば、近き御几帳のもとに參り給ひて、御有様など問ひ聞き給へば、人々、「この頃となりては、柑子などはかなきをだに聞し召させ給はず。」と泣き感ふ。中宮は、「故院の御遺言にかなひて、内の御後見仕うまつり給ふことを、年頃多く思ひ知り侍れば、何につけてかその御心寄の殊なる様をも聞えむとのみ、のどかに思ひ侍りけるを、今は口惜しく。」と、ほのかに宜はするも、ほのく聞ゆる程に、燈火などの消え入るやうにて果て給ひぬ。長き御身と聞ゆる中にも、御心ばへなど、世の爲にも普くおはしまして、人の進み仕うまつる事をも、世の苦しびとなるべきことをば止めさせ給へれば、何とも思ひ分くまじき山賤などまで惜みまゐらす。歛め奉るにも悲しと思はぬ人なし。殿上人など、なべて一つに黒み渡りて、物の映なき春の暮なり。夕日華やかにさして、山際の梢あらはなるに雲の薄く渡れるが鈍色なるを、君は何事も御目止らぬ頃なれど、いと物哀れに思さる。

入り日さす峰にたなびく薄雲は

物思ふ袖に色ぞまがへる

○本篇の題はこの歌による。またこの中宮を「薄雲の中宮」ともいふ。

齋宮の女御、秋の頃二條の院にまかんで給へり。君渡り給へれば、御几帳ばかりを隔て、御自ら御答聞え給ふ。「前裁どもこそ残なく紐解き侍りにけれ。いと物寂しき年なるに、かく木草のみ心遣りて時知り顔なるも哀れにこそ。」とて、柱に寄り居給へる御夕映、いとめでたし。暮るゝまでおはして、「はかゞしき方の望はさるものにて、年の中に行き變る時々の花紅葉、空の氣色につけても、心のゆくことも侍りてしがな。春の花の林、秋の野の盛をなむ、昔よりとりくくに人争ひ侍りけれど、げにと思ふばかりの定こそ侍らざんなれ。唐土には、春の花の錦に若くものなしといひ侍るめり。大和言の葉には、秋のあはれを取り立て、思へる、いづれも所々につけて見侍るに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。狹き垣根の内なりとも、その折々の心見知るばかりに、春の花の木をも植ゑ渡し、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野邊の虫をも住ませて、御覽せさせむと思ひ侍れど、いづ方に御心寄せ給ふべからむ。」と宜ふに、女御、ましていかゞ思ひ分き侍らむ。げにいつとなき中に、怪しと聞きし夕べこそ、

○怪しと聞きし、古今集、「いつとても懸しからずはあらねども、秋の夕べは怪しかりけり。」怪しきまで懸しきなり。

はかなう消え給ひにし露のよすがにも、懐かしう思はれ侍りぬべけれ。」など宜ふも、いとらうたげなる御氣配なり。

○この御答より、この女御を「秋好の女御」といふ。

君は對に渡り給ひて女君に、「女御の秋に心を寄せ給へりしもあはれに、君の春の曙を心に染め給へるも道理にこそあれ。時々につけたる木草の花に寄せて、御心止るばかりの遊などしてしがな。」など語らひ給ふ。

朝顔 あさがほ

齋院の宮は父宮の御服にて下り居給ひにき。源氏の大臣、例の思し初めつること絶えぬ御癖にて、御訪などいと繁う聞え給へど、宮は御返もうち解けて聞え給はねば、君はいと口惜しと思しわたりしに、九月になりて、宮、桃園の宮に渡り給ひぬるを聞き給ひて、女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御訪にことづけて參うで給ふ。同じ寢殿の西東に住み給ひける。五の宮對面し給ひて御物語など聞え給ふ。いと古めきたる御氣配、咳きがちにおはす。「三の宮羨しく、かゝる御縁添ひて親しく見奉り給ふを羨み侍る。この失せ給ひぬる宮も、さやうにこそ悔い給ふ折々ありしか。」と宜ふにぞ、君は少し御耳止り給ふ。「かくさぶらひたる序を過し侍らむは、志なきやうなれば、あなたの御訪ひ聞ゆべかりけり。」とて、やがて簀子より渡り給ふ。宣旨對面して御消息聞ゆるに、君は飽かず思して、二條の院に

歸り給ひても、寢覺がちに思しつゞけらる。疾く御格子參らせて、朝霧をながめ給ひ、枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひ纏はれて、あるかなきかに咲きて、匂も殊に變れるを折らせ給ひて、宮に奉り給ふ。

見し折の露忘られぬ朝顔の

花の盛は過ぎやしぬらむ

人々御硯取りて御返そのかしまゐらすれば、宮、

秋果てゝ霧のまかきに結ばれ

あるかなきかに移る朝顔

○本篇の題は、これらの歌による。

君は今更に若々しき御文書きなども似氣なきことと思せど、え止むまじく思さるれば、東の對に離れおはして、宣旨を迎へつゝ語らひ給ふ。世の中に漏れ聞えて、人々、前齋院に聞え給へば、女五の宮などはよろしく思したるなる。などいひけるを、對の君は傳へ聞き給ひて、暫しは「さりともさわりならむ事もあらば、隔てゝはよも。」と思しけれど、目止め給ふに、御氣色なども例ならずあくがれ給へば、様々に思ひ亂れ給へど、色にも出だし給はず。

冬つ方、神事なども止りて物寂しきに、君はつれづれと思し餘りて、五の宮に例の近づき參り給ふ。

雪うち散りて艶なる黄昏時なり。例の御物語聞え給ふ程に、宮は眠たきに欠伸うちし給ひて、程もなく軒とか聞き知らぬ音すれば、君は悦びながら立ち給ひぬ。月さし出で、薄らかに積れる雪の光に合ひて、なか／＼いと面白き夜の様なり。君は、今宵はいとまめやかに宣ひて、「たゞ一言憎しなど、人傳ならで宣はむを、思ひ絶ゆる節にもせむ。」と切に責めまゐらすれど、宮は更に動きなき御心なれば、君はあさまじうつらしと思ひ給ひて出で給ふに、人々、「心苦し。」といふ。

對の君はいとよく忍び給へど、いかでうちこぼるゝ折もなからむ。君、「怪しく例ならぬ御氣色こそ心得難けれ。」とて、圓がれたる御額髪引き繕ひ給ひて、常なき世に、かくまでこの人に心置かるゝもあぢまの業やと、日一日慰め給ふ。

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつゝ、松と竹とのけちめをかしう見ゆる夕暮に、「時々につけても、人の心をうつする花紅葉の盛よりも、冬の夜の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、怪しう色なきものゝ身に染みて、この世の外的事まで思ひ流され、面白さもあはれさも残らぬ拵なれ。すさまじき例にいひ置きけむ人の心の淺さよ。」とて、御簾捲き上げさせ給ふ。月は隈なくさし出で、一つ色に見え渡されたるに、萎れたる前栽の蔭心苦しう、遺水もいたう咽びて、池の氷もえもいはす凄みに、童女下して雪轉はしせさせ給ふ。昔今の御物語に夜更け行けば、月いよく澄みて、靜かに面白し。女君、

氷とち石間の水は行きなやみ

そら澄む月の影ぞ流るゝ

外を見出だして、少しうち傾き給へる、似るものなく美しげなり。髪さし、面様などの、いといたうめでなければ、餘所に分くる御心も取り返しつべし。

少女をとめ

年變りて故中宮の御忌も過ぎぬれば、世の中色改まりて今めかし。大殿腹の若君の御元服の事、思し急ぐ。大方世ゆすりて事々しき御用意なり。やかて四位になしてむと思し、世の人もさあらむと思へれど、なか／＼珍しからぬ事なりと思し止め、六位にて殿上せさせ給ふを、大宮は飽かず思したるぞ道理にいとほしかりける。君、御對面ありて、「思ふやう侍りて、大學の道に暫し習はさむの本意侍るにより、今二三年を徒の年月に思ひなして、おのづから朝廷にも仕うまつりぬべき程にもならば、人となし侍りなむ。才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらるゝ方も強う侍らめ。さし當りては心許なきやうに侍りぬとも、終の世の重しとなるべき心掟を習ひなば、我が亡からむ後の世も後安かるべきにてなむ。」など宣へば、大宮はうち歎き給ひて、「げにかくも思し寄りけるを、この幼心地に淺愁をいと

辛しと思ひたるが心苦しう侍るなり。」と宣へば、君うち笑ひて、「學問などして少し物の心も得侍らば、その恨はおのづから解け侍りなむ。」と宣ふ。

やがて入學といふ事せさせ給ひて、この東の院の内に御曹司作りて、才深き師に預け給ひてぞ、學問せさせ奉り給ひける。大宮は夜晝うつくしみて、なほ兒のやうにのみもてなし給へれば、かしこにては、え物習ひ給はじとて、靜かなる所に籠め奉り給へるなりけり。「月に二度ばかり參り給へ。」とぞ許し給ひければ、「つらくもおはしますかな。」と思ひ給へど、人柄まめやかにおはすれば、いとよく念じて、いかでさるべき書ども疾く讀み果てゝむ。」と勵みて、たゞ四五月の中に、史記などいふ書は讀み果て給ひてけり。「今は寮試受けさせむ。」とて、まづ大臣の御前にて試みさせ給ふ。御師の大内記を召して史記の難き卷々、博士の返し問ふべき節々を引き出で、一わたり讀ませ給ふに、若君は至らぬ限なく、かれこれ通はし讀み給へる様、爪印も残らずあさましきまであり難ければ、

○爪印 書の不審の箇所に爪にて疵を附け置くなり。その爪印もなきは、よく了解し居るをいふなり。

「みるべきにこそおはしけれ。」と、誰も／＼涙落し給ひ、君も押し拭ひ給ふを見る御師の心地、嬉しく面目ありと思へり。君、盃さし給へば、いたう酔ひたる顔つき、いと瘦せ／＼なり。この人は世の僻者にて、才の程には用ひられず、身貧しくなむありけるを、御覽し得る所ありて、かく取り分き召し寄せ

給ひたるなりけり。寮試に参り給ふ日は、寮門に上達部の御車ども、數知らず集ひたるに、またなくかしづかれて入り給へる冠者の君の御様、げにかゝる交らひには似氣なく美しげなり。こゝにても冠者の君は少しも臆せず讀み果て給ひつ。

かくて后居給ふべきに、「齋宮の女御をこそは、故中宮も、帝の御後見と思し給ひしかば。」と、源氏の大臣ことづけ奉り給へれば、弘徽殿の女御は人より先に参り給ひしかど、なほ齋宮の女御、后に居給ひぬ。源氏の内大臣、太政大臣に昇り給ひ、右大將は内の大臣になり給ひぬ。君は世の中の事どもまつりごち給ふべくこの内大臣に譲り給ふ。内大臣の御女は、弘徽殿の女御と今一所となむおはしける。これは大宮にぞ預けまらせ給へりける。人柄、容貌などいと美しうおはして、冠者の君と一つ所にて生ひ出で給ひしかど、各十に餘り給ひて後は、御方異にて、いと氣遠くなりたるを、若君は幼心地に思ふ心なきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、志を見せまらすれば、いみじう思ひ交し給ひ、生先美しき手にて書き交し給へる文どもの、おのづから落ち散る折々もあるを、ほのく知れる人もありけれど、かくこそと誰にかは申さむ、見隠しつゝあるなるべし。

内大臣は、所々の大饗ども果て、いとのとやかになりぬる頃、時雨うちして、萩の上風もたゞならぬ夕暮に、大宮の御方に参り給ひて、姫君召し給ひて、御琴など弾かせ奉り給ふ。「弘徽殿の女御を、怪しうはあらず、何事も人に劣りては生ひ出でずかしと思ひ侍りしかど、思はぬ人に押されぬる御宿世

になむ、世は思の外なるものと思ひ知り侍りぬる。さればこの姫君をだにいかで思ふ様にし侍らむ。春宮の御元服、只今の年になりぬるをと、人知れず思ひ侍りぬれど、太政大臣の御女こそ、また追ひすがひぬれ。この人の立ち出で給はむに、まして軋るふ人あり難くや。」とうち歎き給ふ。姫君はいときびはに美しうて、箏の御琴弾き給へば、内大臣、和琴引き寄せ給ひて、さる上手の弾き給へる、いと面白きに、いと興添へむとにあらむ、冠者の君参り給へり。内大臣、「をさく、對面も賜はらぬかな。などかくこの御學問をあながちにはし給ふらむ。時々は異業し給へ。笛の音にも故事は傳はれるものなり。」とて御笛奉り給ふ。冠者の君いと若うをかしげなる音に吹き立て、いみじう面白ければ、大臣、拍子うち鳴らし給ひて、「萩が花すり」など詠ひ給ふ。

内大臣出で給ひぬるやうにて、忍びて人に物宜うて立ち給へりけるが、やをらかい細りて出で給ふ道に、女房達のさゝめき言をするに、怪しうなり給ひて、御耳止め給へば、我が御上をぞいふ。「賢しがり給へど、人の親よ、おのづからおれたる事こそ出で來べかんめれ。子を知るはといふは空言なめり。」など突きしるふ。「あさましくもあるかな。さればよ、思ひ寄らぬ事にはあらねど、幼き程なるに心ゆるして。世は憂きものもありけるかな。」と、氣色をつぶくと心得給へど、音もせて出で給ふ。内大臣は道すがら思ふに、「珍しげなき間なりと、世の人も思ひいふべし。大臣の強ひて女御を沈め給ひしもつらきに、ねたくもあるかな。」と思して、心憂ければ、寢覺がちにて明かし給ふ。「大宮もさや

うの氣色は御覽すらむものを、世になくかなしうし給ふ御孫にて、任せ給ふならむ。」と、御心動きて鎮め難ければ、二日ばかりありて參り給へり。内大臣御氣色悪しく、「善からぬ者の上にて、恨めしと思ひまゐらすべきことの出で來たるを、かうも思ひ侍るまじと思ひ侍れど、なほ鎮め難く覺え侍りてなむ。」と、涙押し拭ひ給ふに、大宮、御顔の色變りて御目も大きになりぬ。「いかやうなる事にてか、齡の末に、かく心置きては思さるらむ。」と宣ふもいとほしけれど、「さりとも幼きものは人となさせ給ひてむと頼みわたり侍りつるに、思はずなる事の侍りければ、いと口惜しうなむ。幼き人々の心に任せ、御覽し放ちけるを、心憂く思ひ侍る。」と宣ふに、大宮は夢にも知り給はぬ事なれば、あさましう思して、「さても誰かはかゝる事は聞えけむ。空しき事にて人の御名や穢れむ。」と宣へど、「何の浮きたることにか侍らむ。」とて立ち給ひぬ。

大宮はいとほしと思す中にも、男君の御かなしきの優れ給へるにやあらむ、「もとより姫君をいたく思し給ひしにもあらず、我がかくもてなし初めたればこそ、春宮の御事をも思し掛けたんなれ。そを取り外して、只人に見え奉る宿世ならむには、この君より外に優るべき人やはある。君には、及びなからむ際の御女をもとこそ思へ。」と、大臣を恨めしう思ひ給ふ。かく騒がるらむとも知らで冠者の君參り給へり。大宮、例はいひ知らすうち笑みて待ち喜び給ふを、今宵はまめたちて物語など宣ふ序に、「御事により、内の大臣の怨じ給ひにしかば、いとなむいとほしき。」と宣へば、心に掛れる事の筋なれば、

ふと思ひ寄りぬ。面赤みていと恥かしと思へる氣色を、宮は哀れに心苦しう思して、「よし、今よりだに用意し給へ。」とばかりにて異事にいひなし給ひつ。冠者の君は、いと文なども通はむことの難きなゆめりと思ふに、いと歎かしく、御膳まゐりなどし給へど更に聞し召さで、寢給ひぬるやうなれど、心も空にて、人靜まる程に、中障子を引けど、例は殊に鎖し固めなどもせぬを、つと鎖して人の音もせず。いと心細く覺えて、障子に寄りかゝりて居給へるに、姫君も目を覺して、風の音の竹にうちそよめくに、雁の鳴き渡る聲のほかに聞ゆれば、幼き心地にも、とかく思し亂るゝにや、「雲居の雁も我がごとや。」と獨ごち給ふ氣配、若うらうたげなり。

○雲居の雁も我がごとや 古歌、露深き雲居の雁も我がごとや晴れせず物の悲しがるらむ。「雲居」は、空。「晴れせず」は、晴れず。

○これよりこの姫君を、「雲居の雁の君」といふ。
 (冠者ノ君) いみじう心許なければ、「これ明けさせ給へ。小侍従やさぶらふ。」と宣へど、音もせず。これは御乳母子なりけり。君は、

小夜中に友呼びわたる雁に

うたて吹き添ふ萩の上風

身にも染みけるかな。」と思ひつゞけて、身じろき臥し給へり。

内大臣はそのまゝに参り給はず、北の方にはかゝる事なむとも氣色見せ給はず、「弘徽殿の女御の世の中を思ひ歎きておはしますを、内裏よりまかんでさせ奉りて、心安くうち休ませ奉らむ。」と宣ひて、俄にまかんでさせ奉り給ふ。大宮には、「女御のつれづれに思されむに、姫君渡して諸共に遊などもし給へ。」と宣ひて、俄に渡し給ふ。大宮いとあへなしと思せど、止めまらすとも思し返すべき御心ならねば、いと飽かず口惜しう思されて、うち泣き給ふ折しも、冠者の君、参り給ひしが、内大臣の御車のあれば、心の鬼に便なくして、やをら隠れて我が御方に入り居給へり。内大臣、「今の程に内裏に参り侍りて、夕つ方迎に参り侍らむ。」とて出で給ひぬ。大宮の御文にて姫君に参り給へと宣へば、いとをかしげに引き繕ひて参り給へり。十四になむおはしける。大宮、「旦暮のもてあそび物に思ひまらせつるを、さうくしくもあるべきかな。」とて泣き給ふ。冠者の君、物の後に入り居て涙押し拭ひつゝおはする氣色を、御乳母いと心苦しう見て、大宮にはとかく謀りて、夕間暮の人の紛れに對面させ奉り給へり。かたみに物恥かしく胸潰れて、物もいはず泣き給ふ。若君、「大臣の御心のいとつらければ、思ひ止みなむと思へど、戀しからむこそ、いみじう悲しかるべけれ。」と宣ふ様も、いと若う哀れげなれば、姫君、「まろもさこそはあらめ。」と宣ふ。姫君の御乳母求め参りて、この氣色を見て、「あな心づきなや。めでたき人なりとも物の始に六位宿世よ。」と咄くもほの聞ゆ。

○六位宿世

始に六位の人などにかゝはり給ふ宿縁の良からぬを咄きたるなり。

たゞこの屏風の後にしも尋ね來て歎くなりけり。男君、我をば位なしとて侮るなりけりと思すに、世の中恨めしく、「かれ聞き給へ。

紅の涙に深き袖の色を

淺緑とやいひしほるべき

○「血の涙にて紅色に深く染めし袖の色を、いかで淺緑なりといひけなすべき。」淺緑は六位の服なり。

恥かし。」と宣ふ程に、内大臣入り給ふ氣配すれば、姫君せむ方なくて歸り給ひぬ。男君は涙のみ止らねば、歎き明かして、霜のいと白きに急ぎ出で給ふ。

源氏の君の大殿にては、今年五節奉り給ふ。

○五節 十一月の中の丑の日に行はるゝ女樂にて、公卿、殿上人、國司等よりそれら舞姫を献上するなり。

惟光の朝臣、攝津の守にて左京の大夫かけたるが女、容貌などいとをかしげなる聞えあるを召す。冠者の君は、胸のみ塞りて御膳なども聞し召されず、いたく屈して、書も讀までながめ臥し給へるが、心や慰むとて立ち出で、紛れ歩き給ふ。車より舞姫かしづき下して、妻戸の間に屏風など立て、假初のしつらひなれば、若君やをら寄りて覗き給へば、舞姫は惱ましげに寄り臥したり。たゞかの姫君の御年の

程と見えて、今少し長高う、様體などのをかしき所は優りてさへ見ゆ。君は心移るとはなけれど、たゞにもあらで、少し衣の裾を引き鳴らし給ふ。

天にますとよをか姫の宮人も

我が志すしめを忘るな

○「この舞姫を我が物と占めし、我が志を忘れ給ふな。」

若うをかしき聲なれど、女は誰ともえ思ひなされず。化粧添ふとてそゞきつる後見の女房ども、近う寄り来て、人騒がしうなれば、君はいと口惜しうて立ち去り給ひぬ。淺葱の心やましければ内裏へ参ることもし給はねど、この日は五節にことづけて、直衣など様變れる色許さるゝに参り給ふ。清らにおはすれば、帝より始め奉りて世に珍しき御覺なり。舞姫の容貌は、源氏の大臣の及ぶまじかりけり。大臣も参り給ひて御覽するに、昔御目止りし大貳の少女の姿まづ思し出づれば、

少女子も神さびぬらし天つ袖

ふるき世の友齡經ぬれば

○本筋の題はこの歌による。

御返、

かけていへば今日の事とぞ思ほゆる

日蔭の霜の袖にとけしも

○「日蔭」は、舞姫の頭にかざす日蔭のかづら。「とけし」は、「霜の解けし」にて、「心解けて逢ひし」をいふ。

惟光は、「典侍明きたるに。」と申せば、大臣も、「さもや勞らまし。」とし思したり。冠者の君は、姫君のこの心に掛りて、程経るまゝにいみじう戀しき御面影に、「また相見でやは。」と思ふより外の事なし。源氏の大臣は、この若君を西の對の女君にぞ預け奉り給ひける。「大宮の御世の残り少なげなれば、かく幼き程より見馴らはし給へ。」と宣へば、女君はたゞ宣ふまゝなる御心にて、懐かしう思ひ扱ひ奉り給ふ。ほのかに見奉るにも、「容貌のまほならずもおはしましたしけるかな。かゝる人をも思ひ棄て給はざりけり。」と思し給ふ。

年返りて二月二十餘日、院に行幸あり。今日はこの頃賢しと名聞えたる學生十人を召し、式部の省の試の題になぞらへて御題賜ふ。大臣の太郎君の試賜はり給ふべき故なめり。臆したる學生どもは物も覺えず、繫かぬ船に乗りて池に放れ行く、いと術なげなり。日やうく下りて、樂の船ども漕ぎ舞ひて、調子ども奏する程、山風の響、面白く吹き合はせたり。月朧にさし出で、をかしき程に、中島のわたりに、こゝかしこ篝火ともして、大御遊は止みぬ。冠者の君はその日、文いと美しう作り給ひて、進士になり給ひぬ。年積れる賢き者どもを選らせ給ひしかど、及第の人僅に三人なむありける。君は秋

の司召に、爵得て侍従になり給ひぬ。かの姫君の御事忘るゝ世なけれど、御消息ばかり、さりぬべき便に聞え給ひて、かたみに心苦しき御中なり。

源氏の大臣は、静かなる御住居を、同じくは廣く見所ありて、心許なき山里人などをも集へ住ませむの御心にて、六條京極わたりに、中宮の古き宮のほとりを、四町を占めて造らせ給ふ。式部卿の宮、明けむ年ぞ五十年になり給ひけるを、御賀の事、紫の上思し設くるに、さやうの御用意も同じくは珍しからむ御家にてと思し掟て、急がせ給ふ。

八月にぞ六條の院造り果て、渡り給ふ。未申の町は中宮の御舊宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は殿のおはしますべき町なり。丑寅は、東の院に住み給ふ對の御方、戌亥の町は、明石の御方と思し掟てさせ給へり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩し換へて、水の趣、山の様を改めて、様に御方々の御好み的心ばへを造らせ給へり。

彼岸の頃ほひに移り給ふ。御方々一度にと定めさせ給へれど、物騒がしきやうなりとて、中宮は少し延べさせ給ひ、例の大様に氣色ばまぬ花散里の君ぞ、その夜對の上に添ひて移ろひ給ふ。五六日過ぎて中宮まかんでさせ給ふ。九月になれば、紅葉むらく色づきて、宮の御前えもいはす面白し。

大堰の御方は、かう御方々の御移ろひ定まりて、「數ならぬ際なれば、いづともなく紛らはさむ。」と思して、神無月になむ渡り給ひけるが、姫君の御爲を思せば、よろづの作法もけちめこよなからず、い

と物々しくもてなさせ給へり。

玉 鬘 たまかづら

年月隔りぬれど、飽かざりし夕顔を露忘れ給はず、今もなほあらましかばと、哀れに口惜しくのみ思し出づ。右近も心の中には、女君おはしましかば、この御殿移りの數の中にはまじらひ給ひなましと思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。かの西の京に止りし姫君をたに行方も知らず。君、いみじく口堅め給ひしかば、絶えて音づれまらせざりし程に、かの乳母の男君、少貳になりて行きければ、筑紫に下りにけり。なほ父君にやほのめかさむと思ひけれど、さるべき便もなく、「母君の御行方も知らねば、尋ね問ひ給はむに、いかゞ聞えむ。」など憚りて、おのがじ、語らひ合せて、いと美しき姫君を船に乗せて漕ぎ出づる程、いと哀れになむ覺えける。姫君は、幼き心地にも母君を忘れず、折々に、「母の御許へいくか。」と問ひ給ふにつけて、涙絶ゆる時なきを、船路は忌々しと諫めけり。かしこに到り着きては、まして遙かなる京を思ひ遣りて、戀ひ泣きて、この姫君をかしづきて明し暮らす。少貳任果て、上りなむとする中に重き病して死なむとする心地にも、この姫君の十ばかりにもなり給へるを見て、男子三人あるに、「たゞこの姫君、京に率て奉るべきことを思へ。我が身の孝をな思ひそ。」となむいひ置き

ける。姫君生ひ立ち給ふまゝに、母君(夕顔ノ母)よりも優りて清らに、品高く美しげなり。聞き傳へて心掛(掛入ル)くる人いと多かれど、「いみじきかたはなれば、尼になして。」などぞいひ散らしける。この住む所は肥前(肥前)の國とぞいひける。大夫(五位)の將監(將監)とて、肥後(肥後)の國に一族廣き武士あり。かくなむと聞きつけて、「いみじきかたはなりとも。」と、いと懇にいひかゝり、自らもこの家の次郎を語らひ取りてうち連れて來たり。年三十ばかりなる男の長高く、物々しく肥りて荒らかなる振舞など、見るも忌々しく覺ゆ。「某ら田舎びたりといふ名こそ侍れ、口惜(口惜)しき民には侍らす。」などいふに、いと恐ろしく、兄なる豊後(豊後)の介、この將監(將監)にあたまれては、聊かの身じろきせむも所狭(自由ナラズ)くなむあるべき。」と思ひ煩ひにたれど、姫君の、生きたらじと思ひ沈み給へるも道理(道理)なれば、夜逃げて船にぞ乗りける。負けじ魂(魂)にて、將監(將監)追ひ來なむと思ふに、心も惑ひて、早船といひて様異(様異)になむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危きまで走りぬ。九條に昔知れりける人の残りたりけるを訪ひ出で、その宿を占め置きたり。秋にもなり行くまゝに、來し方行く先悲しきこと多かり。豊後(豊後)の介もたゞ水鳥の陸に惑へる心地して、「長谷(長谷)なむ日の本(本)の中にてあらたなる驗(驗)あらはし給ふ。」と、殊更(殊更)に徒歩(徒歩)より詣でたり。辛うじて樺市(樺市)といふ所に、四日(四日)といふ巳(巳)の時ばかりに行き着き給へり。日暮れぬる程に、これも徒歩(徒歩)よりなめり、男女(男女)數多、馬四つ五つ曳かせてこの宿(宿)に來る人あれば、軟障(軟障)など引き隔てゝおはす。これはかの世と共に戀ひ泣く右近(右近)なりけり。この御寺(御寺)になむ度々詣でける。物の間(物の間)より覗けば、顔見し心地する男あり。「三條」と呼

び寄せらるゝ女を見れば、また見し人なり。かの夕顔(夕顔)の宿(宿)までありし者なりけりと見なすに、いみじく夢のやうなり。姫君もおはするにやと思ひ寄るに心許(心許)なくて、この三條を呼ばすれば、「覺(覺)えずこそ侍れ。筑紫(筑紫)の國に二十年ばかり經(經)にける下衆(下衆)の身を、京人(京人)の見知らせ給ふべきやらむ。人違(人違)へや侍らむ。」とて寄り來たりしが、手を打ちて、「右近(右近)の御許(御許)にこそおはしましたしけれ。あな嬉しや。上はおはしますや。」と、おどろ(おどろ)しく泣く。皆驚(皆驚)きて、「夢の心地もするかな。」とて急ぎ寄り來たり。隔てつる屏風(屏風)めくもの餘波(餘波)なく押し明けて、まづいひやる方なく泣き交(交)す。老人はたゞ、「我が君はいかゞなり給ひにし。」といふに、右近(右近)、「いでや、聞えても甲斐(甲斐)なし。御方(御方)は早う失せ給ひにき。」といふまゝに、いみじう咽(咽)せかへる。日暮れぬとて、人々御燈明(御燈明)のことともしたゞめ出でゝ急がせば、いと心あわたゞしくて立ち別る。右近(右近)は人知れず目止めて見るに、中に美しげなる後影(後影)のいたうやつれたる姫君を、心苦しう悲しと見奉る。夜一夜行ひ騒(騒)ぎて明けぬれば、知れる大徳(大徳)の坊(坊)に下りぬ。心安く物語せむと思ふなるべし。右近(右近)は姫君をいと美しと見奉れば、乳母(乳母)もいと嬉しと思ふ。「父内大臣(父内大臣)に聞し召され給ふべき謀(謀)、思(思)し構(構)へてよ。」といふも、姫君は恥かしう思(思)して後向き給へり。右近(右近)、ありし様など語り出で、源氏の太政大臣(源氏の太政大臣)、「尋ね出でたらむには我に知らせよ。かの女君の御代(御代)に見奉らむ。物寂(物寂)しきに、我が子を尋ね出でたると人には知らせ。」と、そのかみより宣ふなり。「などうち語らひつゝ、日一日昔物語しつゝ暮らす。右近(右近)の家は六條院近きわたりなれば、程遠からで、便出(便出)で來ぬる心地しけり。右近(右近)は

急ぎ大殿に参りて、「山踏し侍りてあはれなる人をなむ見つけたりし。」と申すに、「何人ぞ。」と問ひ給へど、人々近く参れば、「今聞え侍らむ。」とて聞えさしつ。その夜大臣、大殿籠るとて、右近を御脚参りに召す。「かの尋ね出でたりけむは何様の人ぞ。」と問ひ給へば、「はかなく消え給ひし夕顔の露の御ゆかりをなむ見つけ侍りし。」と申す。「げにあはれなりけることかな。容貌などは昔の夕顔に劣らじや。」いかでさしもおはしまさむと思ひ侍りしに、こよなうこそ優りて見え給ひしか。」と申す。

かく聞き初め給ひて後は、人知れず右近を召し出でて、「さらばこゝに渡し奉らむ。父内大臣には何しにか知らさむ。いと數多ある女達の中に、數ならで立ち交り給はむもなか／＼ならめ。我はかう物寂しきに、思はぬ所より尋ね出だしたる御子ともいはむかし。」など語らひ給へば、右近はいと嬉しと思ふ。まづ文の氣色ゆかしう思されて御消息奉り給ふ。

知らずとも尋ねて知らむ三島江に

生ふる三稜のすぢは絶えじを

正身はたゞかごとばかりにても實の親ならばこそ嬉しからめ。いかでか知らぬ人の御あたりにと、心苦しげに思しけれど、人々まづ御返をとそゝのかしまるすれば、いとこよなく田舎びたらむものをと、恥かしく思したれど、唐の紙のいと香ばしき取り出で、書き給ふ。

數ならぬみくりや何の筋なれば

うきにしもかく根をとゞめけむ

手ははかなげなれど、氣高くて口惜しからねば、大臣も御心落ち居たり。丑寅の西の對の文殿にてあるを、異方に移して、姫君の御殿とし給ふ。紫の上にも今ぞかのありし昔の御物語宣ひ出で給ひける。姫君をまづ右近が里の五條に渡し奉りて、人々選りとゝのへ、装束繕ひなどして十一月にぞ渡り給ふ。大臣、花散里の君に、「年頃人知れず尋ね侍りし女子を、思はぬ方より聞きつけたる。母も亡くなりけり。さるべく教へ給へ。」と宣へば、「つれ／＼に侍れば、嬉しかるべきことになむ。」と聞え給ふ。御車三つばかりして、人々の姿どもなど、右近あれば、田舎びす仕立てたり。その夜やがて大臣こなたに渡り給ふに、姫君はいみじく恥かしければ側みておはする様など、いと目安く見ゆれば、君も嬉しくて、ほのかに御答聞え給ふ聲ぞ昔人にいとよく似て若びたりける。紫の上に御物語などし給ふ序に、手習に、

戀ひわたる身はそれなれど玉露

いかなる筋を尋ね來つらむ

○「夕顔の君を戀ひつゞけて來りし我が身は昔に變らぬ心なれど、實の親にもあらぬに、姫君はいかなる縁にてこゝに來りしならむ。」

○この歌によりて、この姫君を玉鑿の君といひ、本篇の題もこれによる。

こなたの家司(けし)ども定め、豊後の介(すけ)もなりぬ。(介)年頃田舎び沈みたりし心地俄に餘波(あまなみ)なく、かねては、いか
で假にも出で入り見るべきと羨みたりし大殿(おほいどの)の内を朝夕に馴らし、人を従へ事を行ふ身となれるは、い
みじき面目(めいめ)と思ひたり。

初音 はつね

年立ち返りて、玉を敷ける御前(みづまへ)は、庭より始めて見所多く、取り分きて春の御殿(みどの)は、梅(うめ)の香も御簾(みすだれ)の
中の匂に吹き紛ひて、この世ながらの淨土(じゆつど)とぞ覺ゆる。源氏の君、紫の上と祝ひ交し給ふ。今日は子の
日なりけり。まづ明石の姫君(みんかた)の御方(みかた)に渡り給へば、童女(わらわ)など小松(こまつ)曳(ひ)きなどして遊ぶ、明石の上より姫君
に、

年月(ねんげつ)をまつ(待)つに曳(ひ)かれてふる人(ひと)に

けふうぐひすの初音(はつね)聞かせよ

○「年月待ち暮したる我に、姫君の初聲を聞かせよ。」

○本篇の題はこの歌による。

君はげに哀れと思して、「この御返(みかへ)は自ら聞え給へ。」と宣ふ。姫君(みきみ)、

ひき別れ年は経れども鶯(うす)の

巢立ちし松の根を忘れぬや

○「別れて久しく経れども、もとの母君を忘れまらせむや。」

花散里(はなぢり)の君を訪ひ給ひて、いと睦(なご)しく契り交し給ふ。さすがに御髪(みかみ)などいたく盛過(さか)ぎて、えびかつら
してぞ繕ふべき。細やかに舊年(ふるとし)の御物語(みものがたり)など懐かしく宣ひて、玉鬘(たまかづら)の君を訪ひ給ふ。また住み馴れ給は
ねど、御容貌(みんかたち)いと華やかに、こゝぞ曇れると見ゆる所なく、「かく渡(わた)しまゐらせて見奉らざらましかば、
口惜(くせ)しからまし。」と見給ふに、御心動(みこころ)き給へり。暮方に明石の上の御方に渡り給ふに、女君の見えね
ば、「いづこにか」と見廻し給へば、硯(すずり)のあたりに草紙(くさし)ども取り亂したり。姫君の御返(みかへ)をいと珍しと思
ひて、哀れなる故言(ふるごと)ども書き混せて居給ひしなりけり。君も筆さし濡らして書き給ふ程に、女君も出で
來給ふ。いとゞなまめかしき添(そ)ひて懐かしげなれば、この日はこなたに止り給ひて、また曙(あけぼの)の程に歸り
給ひぬ。

東の院(ひんざし)には、騒がしき日頃過して渡り給へり。こゝの御方々の中にも、末摘花(すまどりばな)の君は、御際(みまへ)のやむ
ことなければ、君も人目の限りはいとよくもてなし給ふ。古盛(ふるさか)と見えし御若髪(みんわかみ)も年頃(とし)に衰へ行き、白
髪(かみ)も混りたり。空蟬(うつせみ)の尼衣(あまのえ)をもさし覗(のぞ)き給へば、

○空蟬の尼衣 元伊豫の守の妻。源氏の君の懸想せしこと、帯木、空蟬の巻に出づ。尼となりしこ

とは、關屋の巻に出づ。いつこの東の院に引取られたるか、不明なり。
 經佛の飾、閻伽の具などもをかしげに、心ばへありと見ゆる氣配なり。「昔より心憂かりける御契
 なれど、さすがにかばかりの睦は絶ゆまじかりけるよ。」など宣ふ。この外、かやうに御蔭に隠れたる
 人々多かり。皆さし覗き給ふ。

胡蝶 くてふ

三月の二十餘日の頃、花の色、鳥の聲、珍しく、山の木立、中島のわたり、色まさる苔の氣色いとゆ
 かしきに、唐めいたる船造らせ給ひけるを急ぎ卸して、船の樂奏せさせ給ふ。親王達、上達部など數多
 參り給へり。中宮はこの頃この六條院におはします。大臣の君、いかでこの花の折御覽せさせむと思し
 宣へど、中宮は輕々しく渡り給ひ難ければ、宮の若き女房達を招きて見せ給ふ。龍頭鶴首の船に、楫取
 の童はみづら結はせて唐めかせたれば、知らぬ國に來たらむ心地せらる。

○龍頭鶴首 龍はよく水を涉り、鶴はよく風に堪ふるより船首にその形を飾る。

色を増したる柳、枝を垂れたる花、錦を引き渡せるに、池の水に影を映したる山吹、鴛鴦の番離れす波
 の綾に紋を交へたるなど、繪にも描かまほし。

またの日は、中宮の季の讀經の始なれば、源氏の大臣を始め、皆々そなたに參る。紫の上の御志に
 て佛に花奉らせ給へり。鳥と蝶とに裝束き分けたる童女八人、容貌よきを選らせ給ひて、鳥には白金の
 花瓶に櫻を挿し、蝶には黄金の瓶に山吹を挿し、南の御殿の御前の山際より漕ぎ出で、この御前に參
 る。紫の上の御消息、

花園の胡蝶をさへや下草に

秋まつ虫はうとく見るらむ

○「物陰の草に居て秋を待つ蟲は、園の胡蝶も懐かしからずと見るならむ。」秋を好み給ふ君は、花
 園の胡蝶すら懐かしからずと見給ふなるべし。
 ○本篇の題はこの歌による。

鳥蝶の童の舞、飽かず面白し。

玉鬘の君に御消息聞え給ふ人いと數多おはしませど、中將の君は御簾の下などにも寄り、女君も御答
 自ら聞え給ふことあれど、實の兄弟と思へば、懸想など思ひも寄らず。

○中將の君 源氏の君と榮の上との子、少女の巻の冠者の君、今は宰相中將なり。内大臣の子なる
 頭中將とは従兄弟に當る。後の夕霧の巻に委しく記されたるにより、假に名を「夕霧」とす。

内の大臣の君達、頭中將などのとかく思ひ寄せ給ふを、女君はいと心苦しと思す。四月更衣の頃、源氏

の君、この御方に渡り給ひて、人々の御文など御覽じ、女君に御返をそゝのかし給ふ。兵部卿の宮は、年頃おはしける北の方失せ給ひて、この三年ばかり、獨住にてあれば、殊に思ひ寄せ給へるを御覽じて、「御返聞え給へ。」など宣へど、女君はいと慎ましくのみ思したり。右の大將の御文もあり。まめやかに重々しき人なれど、戀には心盡したるもをかしと見給ふ。女君も今は田舎び給へりし餘波もなく、いと飽かぬ所なく華やかに美しげなれば、異人に見なさむはいと惜しと思す。御文の中に、小さく結びたるを、「誰がぞ」と御覽すれば、内の大臣の君達、頭中將のなりけり。

○頭中將 此の中將のこと、後の柏木の巻に委しく記してあり。假に名を「柏木」とす。

君、「下蔭なれども悔り難き人なり。見所ある文かな。」と宣ふ。人知れず思すことは恥かしくてえいひ出で給はず。すゞろにうち歎かれて歸り給ふ。御前近き吳竹の風にうち靡く様の懐かしきに立ち止り給ひて、

ませの中に根深く植ゑし竹の子の

おのがよゝにや生ひ別るべき

思へば恨めしかるべきことぞかし。」と、御簾を引き上げて宣ふ。姫君、

今更にいかならむよか若竹の

生ひ始めけむ根をば尋ねむ

されど心の中にはさも思さずかし。

雨のうち降りたる餘波、いとしめやかなる夕つ方、君、姫君を思ひ出で、渡り給へり。なごやかなる御氣配のかの夕顔の君思し出でらるゝに忍び難く、「怪しうたゞそれかと思ひ紛へらるゝ。」と涙ぐみ給ひ、箱の蓋なる橋によそへて、

橋のかをりし袖によそふれば

かはれる身とも思ほえぬかな

○古今集、「五月まつ花橋の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする。」「五月待つ」は、五月を待ちて咲くをいふ。

思し疎むなよ。」とて、御手を捉へ給へれば、姫君、煩しと思ひてうつぶし給ふ御有様の美しげなるに、なか／＼物思ひ添ふ心地し給ひて、今日ぞ思すこと少し語り出で給ひける。姫君は、今まで世の中も知り給はざりければ、思の外にもありける世かなと、心づきなき御心を疎ましく、身を憂く思されける。

螢

ほたる

玉蠶の姫君は、思の外なる物思添ひて、いかにせむと思し亂る。とさまかうさまに思し集めて、母君

のおはせぬ口惜しさの今更に悲しく覚え給ふ。源氏の大臣も、いひ出で初めては、繁く渡り給ひて、ただならぬ氣色の見ゆる折もあるに、姫君は胸潰れつゝ、たゞ聞き知らぬ様にもてなし給ふ。兵部卿の宮より、「少し氣近くて、思ふことの片端をたに晴るけてしがな。」と御文あるを大臣御覽じて、御返をそのかし給へど、姫君はいと心憂く思ひて書き給はねば、女房の宰相の君を召し出で、言葉など教へて書かせ給ふ。宮はかくとも知り給はず、よろしき御返を珍しがりておはしたり。五月雨の頃の夕闇も過ぎて、空の氣色の曇らはしきに、うちしめりたる宮の御氣配もいと艶なり。思ふ心の程を宣ひつゞけ給ふを、源氏の大臣も物に隠れて聞きおはず。姫君は引入りておはしけるが、君、「この親王には人傳にて答へ給ふまじきことなり。」など諫め給へば、せむ方なくて御几帳のもとに寄り臥し給へり。宮は何くれと語り給ふに、絶えて御答もなければ、御几帳の帷子を、一重うち掛けて覗き給ふ折しも、さと光る物の、紙燭をさし出でしかと眩きに呆れ給ふ。大臣、この夕つ方、螢を袖にいと多く包み置きしを、ふと放ち給ひしに、俄に光れるなりけり。姫君はあさましく、扇にてさし隠し給へる御容貌いと美し。これは大臣、宮に姫君の御容貌見せむと構へ給ひてなりけり。異方よりやをらすべり出で、歸り給ひぬ。宮は案のごと御心に染み給ひて、

泣く聲も聞えぬ虫のおもひだに
人の消つには消ゆるものかは

姫君は、疾きばかりに、

聲はせで身をのみ焦す螢こそ

いふよりまさる思なるらめ

とのみ答へて、御自らは引き入り給ひにければ、いみじく恨み給ひつゝ、濡れく夜深く出で給ひぬ。

○本篇の題はこの歌による。またこれよりこの宮を「螢兵部卿の宮」といふ。

長雨例の年よりも烈しくて、つれづれなれば、御方々、繪物語などの遊にて明かし暮らし給ふ。玉璽の君はまして珍しく思ひ給へば、且暮書き讀みておはずにも、物語にも我が有様のやうなるはなかりけりと見給ふ。君、見給ひて、「あな煩し。女こそ物うるさがりせず、人に欺かれむと生れたるものなれ。」など笑ひ給ひ、「この物語どもの多くは虚言なる中にも、げにもさもあらむとあはれを見せ、つきくしういひつゞけたるは、はかなきことゝ知りながらすすろに心動きぬかし。世には物よくいふ者のあるかな。虚言をいひ馴れたるよりぞ、かゝる物語もいひ出だすらむ。」と宣へば、姫君、「げに偽り馴れたる人はさも思ひ給はむ。自らはたゞ實のことゝこそ思ひ侍られけれ。」と宣へば、君、「骨なくも貶しけるかな。日本紀などはたゞ片端ぞかし。これらの物語にこそ委しきことは書き記したらめ。」と笑ひ給ふ。「佛の説き給へる御法にも方便といふことあり。いひもて行けば一つ旨に當りて、菩提と煩惱との隔りなむ、この物語の人の上の善き悪しきけちめにぞありける。」など宣ひて、「いざ類なき物語にして

世に傳へさせむ。」とさし寄り給へば、姫君、「さらすともかく珍らかなることは、世語にこそはなり侍りぬべかんめれ。」とて、君は様々に宣へど、顔ももたげ給はず。君も心恥かしければ、いたくも亂れ給はず。

内大臣は、かの撫子を忘れ給はず。いかになりにけむ。らうたかりつる人を行方も知らずなしたるごと、哀れに思しわたる。君達にも、「もしさやうなる名乗する人あらば耳止めよ。」と、常に宣ひ出づ。夢見給ひて、合はせ給ふに、「もし年頃尋ね給ふ御子を、人の子として聞し召し出づることやあらむ。」と申せば、「我が女子の人の子になることはあらずかし。いかなることにかあらむ。」といぶかしく思す。

常 夏 ところなつ

いと著き日、源氏の大内、東の釣殿に出で、涼み給へるに、中將の君もさぶらひ給ふ。例の内の大内、の君達、辨の少將、藤侍従など、中將の君尋ねて参り給へり。大臣悦びて大御酒参る序に、「いかに、内大臣は外腹の女尋ね出で、かしづき給ふと語る人あり。誠にや。」と問ひ給ふ。辨の少將、「事々しくいひなす事にも侍らず。この春の頃、夢物語し給ひけるを聞き傳へて、『我なむさる縁ある。』と名乗り出

で侍りける女あれど、けそんにもこそ。」と答ふ。君、さては實なりけりと聞き給ひて、「中將よ、さやうの落葉を拾ひ給へ。」と宣ふ。内大臣の、姫君をこの中將に許さぬを快からず思してなりけり。それにつけても、「かの玉鬘の君をふとさし出でたらむには、いかにめでたしと思さむ。」と思す。

夕つけ行くに風いと涼しくて、若き人々は歸り憂く思ふに、君は玉鬘の君の御方に渡り給へば、君達皆御送に参り給ふ。御前に撫子の色をととのへて、唐の倭のと咲き亂れたる夕映、いといみじく見ゆ。御物語の序に、「内大臣の中將を厭ひ給ふこそ本意なけれ。」など歎き給へば、姫君は、「さは、かゝる御心の隔ある御中なりけり。いつか親に知られむ。」と、いと心許なく思す。月もなき頃なれば、燈籠に火ともしたるを、「なほ氣近くて暑かはしや。篝火こそよけれ。」とて人召す。人々近く侍れば、君も例の戲言も宣はず。君、「撫子を飽かて少將達の立ち去りぬるかな。いかで内大臣にもこの花園見せ奉らむ。古物の序に語り出で給へりしも、只今の事と覺ゆる。」とて、少しその折のこと宣ひ出でたるもいと哀れなり。

撫子のところなつかしき色を見れば

もとの垣根を人やたづねむ

○本篇の題はこの歌による。

「この事の煩はしさにこそ。」と宣ふに、女君うち泣きて、

山賤の垣根に生ひし撫子の

もとの根ざしを誰か尋ねむ

君はたゞこの姫君の事のみ且暮御心に掛れど、我が心のまゝに任せなば、世の人の誘いと輕々しかるべく、我が爲は更にもいはす、この姫君の御爲いとほしかるべし。限りなく懐かしと思ふとても、上に立ち並ぶべしとは、我が心ながら思はれず。されば兵部卿の宮、右の大將などにや許してましと思す。

内の大臣は、源氏の大臣の少將などに宣ひしこと聞し召して、笑ひ給ひ、「かしこにこそは、年頃音にも聞えぬ山賤の子迎へ出で、物めかしつれ。その姫君は、實の御子にもあらじかし。」と宣ふ序に、姫君の御事などとかく思し廻らすまゝに、ふと御方に渡り給へり。姫君は晝寝し給へる程なりければ、内大臣扇を鳴らし給ふに、ふと目覺め給へる面持の赤めるもいと美しと見給ふ。かゝるうたゝ寝を懇に教へ諫め給ふに、いと恥かしと思したり。この頃北の對に迎へたる近江の君をもて煩ひて、御女の弘徽殿の女御に、「この人參らせむ。心ばへ輕々しきやうなれば、慎まず教へさせ給へ。」と笑ひつゝ宣ふ。やがてこの序にさし覗き給へば、近江の君は人と雙六打ち給ふ。

○雙六 今の雙六と異なり、雙六盤あり、二人相對し、黑白各十五の駒にて勝負を争ふなり。

さすがに變うるはしう愛敬づきたれど、額のいと狹きに、聲の輕々しきなど、いと品なし。内大臣、「この物宣ふ聲を、少しのどめて聞かせ給へ。さらば我が命も延びなむかし。」とほゝ笑みて宣へば、「舌の

本性にこそは侍らめ。いかでこの舌疾さを止め侍らむ。」といふさへいと輕々し。子ながらも恥かしと思ふ女御に、この女君を見せ奉らむこそ恥かしけれ。」と歎き給へど、「女御の御方に時々渡り給へ。」と宣へば、「いと嬉しきことにこそ。」など、いと舌疾く囁れば、内大臣は、いふ甲斐なしと思して歸り給ふ。

篝火 かゞりび

この頃内の大臣の近江の女君、世の人の言種になるを、源氏の大内聞し召して、「人に知られず籠り居たる人を、なか／＼に尋ね出して、かく人にいひ傳へらるゝこそいとほしけれ。」と宣ふに、玉鬘の君も、「げに親といひながら、御心をも知らず馴れ奉りなば、恥かしきこともやあらまし。」と思し知り、右近もいとよくいひ聞かせたり。

秋にもなりぬ。初風涼しく吹き出づるまゝに、大臣、忍びかねつゝ、いとしば／＼こなたに渡り給ふ。五六日の夕月夜、月は疾く入りて少し曇れる氣色、萩の音もやう／＼あはれなる程に、御琴を枕にて臥し給へど、女君はうち解け給はねば、うち歎きて歸り給はむとて、御前の篝火、少し消え方なるを、人召してともしつけさせ給ふ。いと涼しく面白き程なる光に、女君の御有様、いとらうたければ、君は

歸り憂くためらひて、「絶えず人さぶらひてともしつけよ。夏の月なき程は、庭の光なき、いと物むつ
かしく心許なしや。」と宣ふ。

篝火に立ち添ふ戀の煙こそ

世には絶えせぬ焰なりけれ

いと苦しき下燃なりけり。」と宣ふに、女君、

行方なき空に消ちてよ篝火の

たよりにたぐふ烟とならば

○本篇の題はこれらの歌による。

人の怪しと思ひ侍らむ。」と宣ふに、君出で給へば、東の對の方に、笛箏の音吹き合はせたり。例の中
將と内大臣の君達と遊び給ふなりけり。君より御消息あれば、頭中將、辨の少將など三人うち連れて參
り給ふ。御琴彈き出で給へば中將も吹き合はせて、辨の少將拍子うち出で、忍びやかに謠ふ聲、鈴虫に
紛ひたり。頭中將御琴賜はりて華やかに弾く。君、「御簾の中に物の音聞き分くる人おはし給ふらむ。」
など宣ふ。この君達は女君の御兄弟におはせば、人知れず目にも耳にも止め給へど、頭中將はさあらむ
とは更に思ひ寄らず、心の限り盡し思ひ給へり。

野 分 の わ き

中宮の御殿の御前に秋の花を植ゑさせ給ひて、常の年よりも見所多く、朝夕露の光も世の常ならず、
玉かと輝きて造り渡せる野邊の色を御覽じて里居し給ふ程、野分例の年よりもおどろくしく、空の色
變りて吹き出づれば御心を悩ます。紫の上の南の御殿にても前裁繕はせ給ひける折しも、かく吹き出で
て、小萩などかなたこなた折れ返り、露も止るまじう吹き散らすを、上は少し端近く居て見出し給ふ。
源氏の大臣は明石の姫君の御方におはします程に、中將の君參り給ひて、東の渡殿の小障子の上より、
妻戸の明きたる隙を、何心なく見入れ給へるに、女房達の數多見ゆれば、立ち止りて音もせず見給ふ。
御屏風も押し疊み寄せたるに、廂の御座に居給へる人、氣高くいと清らに、春の曙の霞の間より面
白き梅櫻の咲き亂れたるを見る心地す。御簾の吹き上げらるゝを人々押ふるに、いかにしたるにかあら
む、うち笑ひ給へる、いとみじう見ゆ。中將、人や見ると急ぎ立ち去る折にぞ、大臣、西の御方より歸
り入り給ふ。「御格子下してよ。」と宣ふに、中將また寄りて見給へば、上の物など宣へる、身に染むば
かり覺ゆれど、我が立てる所もあらはなれば、恐ろしくて立ち退きぬ。珍しく嬉しき目をも見つるかな
と思して、今參れるやうにして簀子の方に歩み出で給ふ。人々參りて、「馬場の御殿、南の釣殿など危

し。」といふ。中將、「大宮は若き兒のやうに風の音を怖ぢ給へば、心許なく、急ぎまかんで侍りなむ。」と申せば、君、「げに早う参り給ひね。」とて、御消息奉り給ふ。中將はいとまめやかに、大宮の三條の院と、この六條の院に参り給はぬ日なし。大宮待ちつけて、いと嬉しと思す。木の枝などの折るゝ音もいとうたてあり。御殿の瓦さへ残るまじく吹き散らすに、「かく物し給へること。」と悦び宜ふ。中將は、夜もすがら荒き風の音も、心に掛けて戀しと思ふ姫君の御事もさし措かれて、ありつる御面影のみ忘られず。「こはいかなる心ぞ。」と、自ら思ひ紛らはし給へど、なほふと思ひ出づ。

曉方に風少し静まりて、村雨のやうに降り出づ。中將は、「六條院にては離れたる屋ども倒れたり。」と聞き給ひ、「東の町など、人少なに思されつらむ。」と、またほのくするに参り給ふ。道の程にても怪しうあくがるゝ心地するに、「何事ぞや、あな物狂ほし。」と思す。女君は怖ぢ困じておはしければ、とかく慰め給ひて、南の御殿に参り給ふに、御格子も上げず。勾欄に押しかゝりて見渡せば、山の木ども吹き靡かして、枝ども多く折れ伏したり。日の僅に射し出でたるに、憂へ顔なる庭の露、さらさらとして、空はいと凄く霧り渡れるに、何となく涙の落つるを拭ひ隠してはぶけば、大臣、「中將にぞある。」とて、起き給ふなり。中宮に、中將の君して御消息奉り給へば、中の廊の戸より参り給ふ朝はらけの御容貌、いとめでたし。宮の御前にては、童下させ給ひて、虫の籠どもに露飼はせ給ふなりけり。四五人はかりうち連れて、こゝかしこの叢に寄りて、いろ／＼の籠どもをもてさまよひ、撫子な

ど取りもて参る霧の迷いと艶なり。大臣よりの御消息啓せさせ給ふ。

紫の上の御殿には御格子上げ渡して、昨夜見棄て難かりし花どもの、行方も知らぬやうにて、萎れ伏したるを見給ひけり。中將、御階より歸り参りて、中宮の御返聞え給ふ。「荒き風をも防がせ給ふべくやと、若々しく心細く思ひ侍りつる。」などあるに、大臣、「げに疎なりとも思しつらむ。」とて、やがて参り給ふ。こなたよりやがて北に通りて、明石の御方を見遣り給へば、童などをかきしき袖姿うち解けて、心止めて取り分きて植ゑ給ひし龍膽、朝顔の這ひ混れる籬も、皆散り亂れたるを、とかく曳き出で尋ぬるなるべし。女君は物哀れに覺えけるまゝに、箏の琴を掻きまきぐりつゝ、端近く居給へり。大臣は端の方につい居給ひて、風の騒ばかりを訪らひて、つれなく立歸り給ふに、心やまじげなり。

西の對には、恐ろしと思ひ明かし給ひける餘波に、寝過して、今ぞ鏡など見給ふ頃なりける。大臣、御供に、「事々しく前な追ひそ。」と宣ひて、殊に音もせで入り給ふ。屏風なども皆疊み寄せ、物しどけなくしなしたるに、日の華やかにさし出でたる程、清げなる様して居給へり。君は近く寄り給ひて、例の風につけても戯れ給へば、女君は、「かう心憂ければ、昨夜の風に浮かれまほしく侍りつれ。」と宜ふに、君はいとよく笑ひ給ふ。中將は、いかでこの女君の御容貌見てしがなと、几帳はありながらしどけなきを、やをら引き明けて見るに、いとよく見ゆ。親子と聞えながら、かく戯れ給ふ氣色の著きに、怪しと目止りぬ。女君の御有様、兄弟といへど、異腹ぞかしと思はむに、などか懸想もせざらむと覺ゆ。

昨日見し紫の上には劣りたれど、見るに笑まるゝ様は、立ちも並びぬべく、八重山吹の咲き亂れたる盛に、露かゝれる夕映ぞ、ふと思ひ出でらるゝ。いと細やかにうちさゝめき語らひ給ふと見るに、いかゞありけむ、ふとよめたちて立ち出で給ふ。なほ見果てまほしけれど、近かりけりと見えじと思ひて立ち去りぬ。

東の御方に渡り給ふ。今朝の朝寒なるに、俄に物裁ちなどする老女房達、細櫃めく物に綿引き掛けてまさぐる若人どもあり。朽葉色の羅など引き散らしたるを見給ひて、様々の物の色どもいと清らに、この頃摘み出したる花して染めしもあれば、かやうの業も、南の殿にも劣らじかしと見給ふ。

煩しき御方々廻り給ふ御供に歩いて、中將は生心やましく、明石の姫君の御方に参り給へば、御乳母、「またかなたになむおはします。」と申す程に、姫君こなたに歸らせ給ふとて、御几帳引き直しなどす。中將は、例の物ゆかしがらぬ御心地なれど、昨日より見つる女君達に思ひ比べまほしく、几帳の綻より見れば、人の多く紛へばよくも見えねど、こよなく生ひ優り給ふなめり。まして盛の程いかならむと思ふ。かを見つる女君を、櫻、山吹といはゞ、これは藤の花とやいふべからむと思す。

行 幸 みゆき

その年の十二月に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒げば、六條の院よりも御方々引き出でつ見給ふ。桂川のもとまで物見車隙なし。行幸といへども必ずかうしもあらねど、今日は親王達、上達部も、皆心殊に御馬鞍をとゝのへ、隨身、馬副まで選り出で、珍らかに興あり。雪たゞいさゝかうち散りて、道の空さへ艶なり。鷹にかゝつらへるは珍しき狩の御装なり。西の對の玉簾の君も立ち出で給ひ、人々の御容貌、有様を見給ふに、帝の赤色の御衣着給ひて、うるはしく動きなき御有様になすらひ奉る人なし。我が父大臣を目をつけ奉れば、げにきら／＼しう物清げに、盛にはおはしませど、限りありかし。帝より外に移るべくもあらず。兵部卿の宮もおはす。右の大將は胡籙など負ひたる、色黒く髭かちに見えて、いと心づきなし。

○色黒く髭かち、これによりこの右大將を假に「髭黒大將」といふ。

源氏の君、この程よりそゝのかし給ふ宮仕を、「うち解けたる方にはあらで、大方に仕うまつらむは、をかしうもありなむ。」と思ひ寄り給ひける。

かくて野におはしましつきて、上達部、狩の御衣に改め給ふ程に、源氏の太政大臣より大御酒、御菓

物など奉らせ給へり。今日御供仕うまつらせ給ふやう、豫て仰ありけれど、御物忌の由を奏せさせ給へるなりけり。またの日、大臣、西の對の女君に、「昨日上を見奉らせ給ひきや。宮仕のこと申し立ち給はむや。」と御消息あり。御返、

うちきらし朝曇せしみゆきには
さやかに空の光やは見し

覺束なきことにごそ。」とあるを、紫の上も見給ふ。また大臣より、

あかねさす光は空に曇らぬを
などてみゆきに目を霧らしけむ

○一帝の御光は曇なかるべきに、何故よく見奉らざりしぞ。
○本篇の題はこれらの歌による。

なほ申し立ち給へ。」など絶えずそのかし給ふ。とてもかくてもと、まづ御裳着の御用意し給ふ。

○御裳着 裳着は始めて裳を着くる祝、裳は婦人の腰より後に垂るし絹布。

内の大臣にも、この序に知らせ奉らましと思し寄り、年返りて二月にと思す。御裳着の御腰結には、かの内の大臣になむ御消息ありけれど、大宮、去年の冬つ方より惱み給へば、便なかるべき由申し給へり。中將の君も晝夜三條の宮にさぶらひ給ふに、源氏の大宮もいかにせましと思せど、大宮失せ給はざりて女

君も御服あるべきに、知らず顔にて過し給はむは、罪深きこと多からむ。かくおはする世にこの事願はしてむと思して、三條の宮に御訪ひがてら渡り給ふ。大宮も御心地の惱ましきも忘らふ心地して起き居給ひ、脇息にかゝりて物などよく聞え給ふ。大臣、「あつしくはおはしまさざりけるを、中將のおどろおどろしく歎くに、いかやうにおはしますにかとなむ、心許なく思ひまゐらせ侍りつる。」と宣へば、大宮、「頼み少きやうに覺え侍れば、今一度だに見奉りまゐらすこともなくてやと、心細く思ひ侍りつるを、今日こそ少し命延びぬる心地し侍れ。今は惜むべき命にも侍らぬを、この中將の怪しきまで心を騒がし給ふを見侍るになむ、懸け止められ侍りぬる。」と、たゞ泣きに泣き給ふ。昔今の御物語ども取り集め宜ふ序に、「かゝる序に、いかで内の大臣に聞え知らせむと思ふことの侍る。」と宣ふ。

内の大臣は、かく三條の宮に、源氏の大宮渡り給ひたる由聞き給ひて、かしこにはいかに寂しげに、御座引き繕ふ人もあらじと驚き給ひて、御子どもの君達など奉り給ふ。「自らも參るべけれど、却りて物騒がしきやうならむ。」など宜ふ程に、大宮より、「渡り給ひなむや。對面に聞えまほしき事もあんなり。」と御文ありければ、「何事にかあらむ。姫君の御事を中將の憂ふるにや。」など思しつゝ、御裝束、心殊に引き繕ひて渡り給へり。珍しき對面に昔の事思し出でられて、年月の御物語聞え給ふ。日暮れ行くまゝに御土盃など參り給ふ。この序に女君のこと語り出で給ひけり。内大臣、「いと珍らかなることにも侍るかな。」とうち泣き給ひて、「その昔いかにけむと尋ね侍りし様は、何の序にか侍りけむ漏

らし聞えさせし心地なむし侍る。今かく數々に集め見るにつけてもまづなむ思ひ出でられ侍る。」と宣ふ序に、かの古の雨夜の御物語に、いろ／＼なりし品定を思し出で、泣きみ笑ひみうち亂れ給ふ。

○雨夜の御物語、雨夜の品定をいふ。香木の巻にあり。

夜いたう更けておの／＼別れ給ふ。かゝる序なれど、中將の御事をばうち出で給はずなりぬ。内大臣はた御氣色もなきにさし過し難くて、さすがに結ばれたる心地し給ひけり。

十六日彼岸の始にて、いとよき日なりけり。大宮もこの頃よろしうおはしませば、御裳着急ぎ給ひて、西の對に渡り給ひて、父内大臣に申しあらはし、様など宣へば、女君いと嬉しと思す。中將の君にも知らせ給ひける。中將、宜なりけりと思ひ合はすることのあるに、かの姫君よりも見所ありしを、と、悔しき心地すれど、「さは思ふまじきことなり。」と、思し返し給ふぞ、あり難うまめやかなりける。かくてその日になりて、三條の大宮より御使あり。御櫛の箱などいと清らにし給ひて奉り給ふ。中宮よりは白き御裳、唐衣、御装束、御髪上の具などに、唐の薰物添へて奉り給へり。紫の上など御方々皆心々に御装束などとり／＼奉り給ふ。内の大臣は、いつしかと御心にかゝりたれば、疾く參り給へり。大殿油例よりは少し光見せたり。内大臣いみじうゆかしと思ひ給へば、御裳引き結び給ふ程、忍び難げにおはす。御土盃參る程に、内大臣、「限りなき御志は世に例なきことと思へど、今までかく隠し給ひける恨もいかゞ添へ侍らざらむ。」と宣ふ。内の大臣の君達の中にも、頭中將は、人知れず思ひしことを辛し

と思ふ。辨の少將はよくぞいひ出でざりけるとさゝめく。この日の御贈物など更にもいはず、すべて引出物、祿なども二なくせさせ給へり。内大臣は、「ほのかなりしかど、いとめでたかりし御容貌かな。」と、なか／＼戀しく思ひ給ひ、今ぞかの御夢をも誠に思し合はせ給ひける。切に隠し給へど、口さかなきものは世の人なりけり。かのさがな者の近江の姫君聞きつけて、女御の御前に、頭中將、辨の少將などさぶらひ給ふ折に出で来て、「殿は御女尋ね出で給へりとな。あなめでたや。聞けば彼も劣り腹ななり。」などいふに、女御はかたはらいたしと思して物も宣はず。姫君、尙侍になるべかんなり。おのれがかうこの宮仕にと急ぎ立ち侍りしも、さやうの御願もやとてこそ。御前つらくおはしますなり。」と恨みまゐらせ、下臈、童も仕うまつらぬ雜役にも走り歩きつゝ、「尙侍におのれを申しなし給へ。」と、女御を責めまゐらすれば、女御はあさましう思す。

藤 袴 ふぢばかま

尙侍の御宮仕を誰も／＼のかし給へど、玉鬘の女君は、「いかならむ。もし思の外に上の御志添ひ給ふこともあらば、この中宮も、内の大臣の女御も心隔て給ひて便なからむ。我を呪はしげに思ひいふ人もあれば。」など様々に申し亂る。さりとてこの御殿に過さむは、大臣の御心の煩はしく、父内大

臣もよろづ憚り給へば、頼みまゐらせ難く。」と、思ふことうち明かすべき女親もおはせねば、世の人に似ぬ身の憂さをうちながめつゝ、夕暮の空を端近く見出し給へる様いとをかし、大宮の御服にて、薄き鈍色の御衣にやつれ給へるに、

○大宮の御服、これより先、祖母大宮薨れたり見ゆ。

中將の君、同じ鈍色の今少し濃き直衣姿にておはしたり。源氏の大臣の御消息にて、内裏よりの仰言を、この中將の承り給へるなりけり。御簾に几帳添へて御對面あり。女君の御答の懐かしきにつけても、かの野分の朝の御容貌の心に掛りて戀しく、たゞならず胸塞がる心地すれど、さりげなく、藤袴の花のいと面白きを持ち給へりけるを、御簾の端よりさし入れて、とみにもうち置かて持ち給へれば、女君、寄りて取り給ふ御袖を引き動かしたり。

同じ野の露にやつる、藤袴

あはれは掛けよかごとばかりも

○「藤袴」は、關。また喪服を「藤衣」といふより、喪服の意にもいふ。

○「同じ大宮の孫にて、同じ喪服を着る身なれば、假初にても哀れと思ひ給へ。」

○本篇の題はこの歌による。

女君はいと心憂く、知らぬ顔にやをら引き入り給へば、中將いといたくうち歎きて立ち給ひぬ。かくて

御服など脱ぎ給ひて、十月ばかりに御参りと思し宜ふを、心寄せ給ふ人々は、誰もくこの御参りの先にと心を盡す。頭中將、内の大臣の御使にておはしたり。女君は今まで餘所々々しかりし餘波もなく、南の御簾の前に据ゑ奉り、宰相の君して御答申し給ふ。中將、「某を御使に選び給へるは、人傳ならでとこそ侍らめ。」と恨み給ひながら、内大臣の御消息ども忍びやかに申し給ふ御用意などいと目安し。宰相の君、「何事も世を憚らせ給へばなむ。今より後はおのづからかくのみにあらし。」と申すもさることなれば、やがて立ち出で給ふ。かの宰相の中將の君には立ち並び給ふまじけれど、御直衣姿好まじう華やかなり。

右の大將はこの中將と同じ近衛の司なれば、懇に語らひ、内の大臣にも申させ給ひけり。内大臣は、「この大將、人柄もいとよく、朝廷の御後見となるべき人なれば、などか悪しからむ。」と思しながら、ひたすらに源氏の大臣に任せ給ふ。大將は春宮の御母女御の御兄にぞおはしける。年三十三三の程におはします。北の方は紫の上の御姉にて、式部卿の宮の御大君よ。年の程、三つ四つが兄にて、人柄やいかゞおはしましけむ、大將は心に入れず。かの父内大臣もおのれを疎々しくは思さず、女君も宮仕を物憂げに思すと聞き知りて、女房の辨の御許を責め給ふ。九月にもなりぬ。例のとりに忍びもて参る御文ども多かり。兵部卿の宮、

朝日さす光を見ても玉笹の

葉分けの霜を消たすもあらなむ

○「宮中に仕へても、彼の葉毎に置く霜の如きはかなき己を思ひ棄て給ふな。」

女君いかゞ思しけむ、御返をたゞいさゝかにて

心もて日影に向ふあふひだに

朝置く霜をおのれやは消つ

○「我が心より日に向ふ向日葵も、霜を自ら消すにあらず、日光の爲に消ゆるなり。」にて、心ならず宮仕する意をいふ。

宮はいと珍しく嬉しと思したり。

眞木柱 まきばしら

源氏の大臣、暫しは人に漏らさじ。」と諫めまゐらせ、御心ゆかず口惜しう思せど、甲斐なきことなれば、儀式など二なくもてなし給ふ。

○暫しは人に漏らさじ、玉鬘の君、終に右の大將に逢ひしを暫し人に隠すをいふ。

右の大將はいと嬉しく、思ふ様なる女君の御容貌、有様を見るまゝに、辨の御許をば、石山の御佛と並

べて頂かまほしく、たゞ女君の程経れどうち解け給はぬ御氣色をいみじうつらしと思ふ。大將は我が御殿に渡し奉らむことを急ぎ給へど、大臣は、かしこによくも思ふまじき北の方のおはしますることづけ給ひて、「なほ心のどかに。いづ方にも人の謗恨なかるべくもてなし給へ。」とぞ宣ふ。父大臣はなかなか目安かるべしと悦び給へり。霜月にもなりぬ。内侍所に事多かる頃にて、内侍などこなたに参りて、

○内侍などこなたに参りて、玉鬘の君、内侍所の長官、尙侍に任せられしかば、典侍等この殿に來りて、指圖を仰ぐなり。

華やかに人騒がしきに、大將殿、晝もおはするを、女君は心づきなしと思しけり。大將殿は、名に立てるまめ人にて、今まで亂れたる振舞なくて過し給へる餘波なく、好き／＼しう、宵曉に忍び給へる出入も艶にしなし給へるを、可笑しと人々見奉る。女君は、源氏の大臣の思すらむこと、兵部卿の宮の情情しうおはせしなど思ひ出で、恥かしう口惜しうのみ思す。大臣も、なほ思し絶えず、大將のおはせぬ晝つ方渡り給へり。女君は惱ましげにのみ萎れ給へれど、起き上り給ひて、御几帳に隠れておはす。世の常なる大將を見給ひては、大臣の御有様、いふ方なくめでたしと見奉るにも、身の置き所なく、涙ぞこぼれける。君は女君の少し面瘦せ給へる御様のらうたきに口惜しく、「思の外なりや。」など宣ひ紛らはしつゝ、「上の宣はすることもあれば、假初に内裏に参らせ奉らむ。」など細かに宣へど、女君はた

だ涙に纏はれておはす。大將の御殿に渡り給ふことは、とみには許し給ふまじき御氣色なれば、大將殿、女君の内裏へ参り給はむ序に、我が御殿にまかんでさせ奉らむと思し構へて、内々に殿の内修理し給ふ。

北の方の思し歎くらむ御心も知り給はず、うつくしみ給ふ君達をも目にも止め給はず、ひたおもむけなる御心故、人の心を動かさぬべきこと多かり。北の方は御容貌などもいとようおはしけれど、怪しう執念き御物怪に煩ひ給ひて、物狂ほしき折々多く、御中も疎々しければ、玉鬘の女君の御有様、人に優れ給へるを、あり難しと思ひ給ふ。式部卿の宮聞し召し、北の方を我が御殿に渡し奉らむと思し宣へば、北の方は様々に思ひ亂れ給ふまゝに、いと御心地も狂ほしく臥し煩ひ給へど、御本性はいと静かに心よき人なり。大將殿、「世の人にも似ぬ御有様なれど、見奉り果てむところ思ひ過しつれ。幼き人々もあれば、疎にはせじ。」と宣へど、とかく恨み給ふに、日一日入り居て、「太政大臣の御殿に出で入るも心苦しければ、こゝに渡してむと思ひ侍るなり。なだらかに御中よく語らひ給へ。」など宣ひて、暮るれば、心も空に浮き立ちて、いかで出でなむと思すに、雪掻き垂れて降る。かゝる空に出でむも人目心苦しく、北の方の御氣色も憎げに恨みなどし給はゞ、なか／＼それにことづけてあるべけれど、いと大様に、さりげなうもてなし給へば、いかゞせむと思ひ亂れつゝ、うちながめ居給へり。北の方、氣色を見て、「生憎なめる雪をいかに分け給はむとすらむ。夜も更けぬめり。」とそゝのかし給ふ。今は

限り、止むともと思ひ給へる氣色いと哀れなり。大將殿、「かゝるにはいかでか立ち出でむ。」と思へど、こゝに渡しなば心安く侍りなむ。かく世の常なる御氣色見え給ふ時は、外様に分くる心も失せてなむ哀れに思ひまゐらす。など語らひ給へば、北の方、「立ち止り給ひても、御心の外ならむはなか／＼苦しう、餘所にも思ひだにおこせ給はゞ、我が袖の氷も解けなむかし。」など、なごやかに居給へり。大將はいと哀れと見給ひて、我が心ぞいと軽きぞやと思ふ／＼、なほ装束し給ふに、侍所にて御供の人々聲して、「雪少し隙あり。」などいふ。北の方はいみじう思ひ鎮めて添ひ臥し給へりとする程に、俄に起き上りて、大きな薫籠の下なりつる火取を取りて、殿の後に寄りて、さと沃かけ給ふ程人々のや見あふる程もなう、殿はあさましきに呆れておはします。人々立ち騒ぎて、御衣ども着換へさせなどすれど、數多の灰のよろづの所に満ちたる心地すれば、さる清らを盡し給ふ御殿に参り給ふべきにあらす。夜中になりぬれど、僧など召して加持参り騒ぐ。御女一所、十二三ばかりにて、またつき／＼に男子二人なむおはしける。父式部卿の宮聞き給ひて、「おのがあらむ限りは、ひたぶるになどか従ひ給はむ。」とて、俄に御迎あり。御兄の君達、御車三つばかりにておはしたり。豫て思ひ給ひしことなれど、さし當りて今日を限りと思へば、さぶらふ人々もほろ／＼と泣きあへり。御子達は何心もなく歩き給ふを、母君皆呼び据ゑ給ひて、「姫君はおのれに添ひ給へ。男君達はこゝに止り給ふべけれど、行末いかにたゞよひ給はむ。」と泣き給ふに、御子達は、皆深き心は思ひ分かねど、泣きおはす。日も暮れ雪

降りぬ。姫君は、父君にまた相見ぬこともこそと、只今も歸り給へかしと待ち給へど、かく暮れなむにいかで歸り給ひなむや。常に寄り居給へる東面の眞木柱も、人に見譲る心地し給ひて、たゞいさゝかに書きて、柱の干割れたる間に、笄の先して押し入れ給ふ。

今はとて宿離れぬとも馴れ來つる

眞木の柱は我を忘るな

○本篇の題はこの歌による。この姫君を「眞木柱の君」といふ。

御車引き出で、も、いかでかまた見むと、はかなき梢をも目止めて隠るゝまでぞ願ひ給ひける。大將殿、聞き給ひて、殿におはして、かの眞木柱を見給ふにつけても哀れに戀しきまゝに、宮に參うで給へれど、對面し給ふべくもあらず。

年返りて尙侍の君、内裏に參り給ふ。源氏の太政大臣、内の大臣に右の大將の御勢さへさしあひて、いとめでたし。三位に上り給ひて、承香殿の東面に御局したり。大將殿は、いと靜心なく急がせ給ふに、父内大臣も様々に謀りてなむ、御暇許され給ひける。

○御暇許され、尙侍は内侍司の長官なれど、宮中に居らず、我が殿にて公務を執り行ふことを許さるゝなり。

豫てより、やがて我が御殿にと思し設けたれば、「俄に風の心地の惱ましければ。」と、穩かに申して、

やがて渡し奉り給ひ、盗みもて來りし心地に落居給ひぬ。源氏の大臣は、俄にて本意なしと思す。もとの北の方はいよく惚れておはします。大將は眞木柱の姫君を戀しがり給へど、宮は絶えて見せ奉り給はず。その年の十一月にいとをかしき兒さへ生れ出で給へれば、大將のかしづき給ふこと限りなし。

梅 枝 うめがえ

明石の姫君の御裳着のこと急ぎ給ふに、中宮まかんで給ひて、御腰結せさせ給ふ。春宮も同じ二月に御元服あるべければ、姫君の宮へ御參りもうちつゞくべきにや。正月の晦頃、公私のどやかなる頃ほひに、源氏の君、薫物合はせ給ふ。二條の院の御倉明けさせて、唐の物ども取り出でさせ給ふ。香ども昔今のを取り並べさせ給ひて、御方々に配り、「二種づゝ合はせ給へ。」と宣ふに、鐵臼の音、耳かしがまし。互に挑み合はせ給へば、「勝負の定あるべし。」と宣ふ。二月の十日、雨少し降りて、御前近き紅梅盛に、色も香も似るものなき程に、兵部卿の宮、渡り給へり。大臣、女君達の合はせ給へる香を試みて、宮に、「これ判かせ給へ。」と宣へば、宮、「いと苦しき判者にも當りて侍るかな。」と惱み給ひつゝ、人々の御心々に合はせ給へる深さ淺さを嗅ぎ合はせ給ふに、いと興あること多かり。更にいづれを

いづれともなく、無徳ならず定め給へば、大臣、「心ぎたなき判者なンめり。」と宣ふ。月さし出でぬれば、大御酒など参り給ひて、昔物語などし給ふ。霞める月の影心にくきを、雨の餘波の風少し吹きて、花の香懐かしきに、殿のあたりいひ知らず匂ひ満ちて、人の心地いと艶なり。内の大臣の君達、頭中將、辨の少將など参り給へば、御琴ども召して御遊あり。辨の少將、拍子取りて梅枝謠ひ出だしたる程、いとをかし。明方になりて宮歸り給ふ。

○梅枝、催馬樂、梅枝、「梅が枝に来居る鶯春かけて鳴けども、未だ雪は降りつゝ。」
○本筋の題はこれによる。

かくて西の御殿に渡り給ひて、御裳着せさせ給ひ、御腰結に中宮まかんで給へり。紫の上もこの序に中宮に御對面あり。子の時に御裳奉る。大殿油ほのかなれど、姫君の御氣配めでたしと中宮は見奉り給ふ。大臣は、明石の上のかゝる折に見奉らぬを、心苦しく思せど、人の物言いかならむと憤みて過し給ひつ。

春宮の御元服は二十餘日の程になむありける。明石の姫君には、大臣の昔の宿直所の桐壺を改めしつらふ。御参りを四月と定め給ひて、御調度ども細かに磨き調へさせ給ひ、草子どものやかで手本にしつべきを選らせ給ふ。兵部卿の宮にも書かせ奉り、女君達、御子の中將、式部卿の宮の兵衛督、内の大臣の頭中將などにも書かせ給ひ、君も例の寢殿に離れおはして書き給ふ。花盛過ぎて、淺緑なる空うらゝか

なるに、古きことなど思ひ澄し給ひて、御心のゆく限り、草のも假名のも、女手をいみじう書き盡し給ふ。

内の大臣は、この御用意を聞き給ふに、いみじう寂しと思し、「中將の君の懇なりし折に許しなましかば。」など人知れず思し歎き給ふを、中將も聞き給へど、今はさりげなくもてなし給ふ。源氏の大臣は、「右の大臣、中務の宮など御氣色あれば、いづくにか思ひ定めよ。」と宣へど、中將は御答もなく畏り居給ふ。姫君も憂き身と思し沈めど、上べはさりげなく大様にまながめ暮らし給ふに、「中務の宮なむしかくにて。」と、人の申すに、父内大臣胸塞る心地して、涙を浮け給ひて立ち給ひければ、姫君も怪しく進み出づる我が涙かなとながめ給へる折しも、中將より御文あり。

つれなきはうき世の常になり行くを
忘れぬ人や人に異なる

例の懐かしげなれど、姫君は、中務の宮のこと、氣色ばかりもかすめ宜はぬつれなさよと思ひつゞけ給ふに、限りなう心憂ければ、御返、

限りとて忘れがたさを忘るゝも

こや世に靡く心なるらむ

とあるを、中將は怪しと思して、うち置き難く、傾きつゝ見居給へりとぞ。

藤裏葉 ふちのうらは

明石の姫君の春宮に御参りの御用意の程も、宰相の中將の君はながめがちに思ひ亂れ給へど、姫君は、「もしさもあらば。」とうち歎きておはせば、父内大臣もさこそ心強がり給ひしかど、「とかく紛らはして負けぬべきなんめり。」と思しなりぬ。いかならむ序にかと思す程に、三月二十日、故大宮の御忌日にて、極樂寺に詣で給へり。上達部など數多参り集ひ給へるに、宰相の中將の君も参り給へる、いとめでたき御有様なり。夕かけて皆歸り給ふ程、花は皆散り亂れ、霞たどくしきを、内の大臣眺め給へば、中將もあはれなる夕べの氣色に、雨氣なりと人々の騒ぐに、なほ眺め入りて居給へり。大臣、袖を引き寄せて、「残の齡少なくなり行く世の末に、かう思ひ棄て給へるも恨めしく。」など宣へば、中將畏りて、「許しなき御氣色に憚りつゝ。」など御答申し給ふ程に、心あわたしき雨風に、皆散りくりに歸り給ひぬ。

四月の朔日頃、内の大臣の御前の藤の花いと面白う咲き亂れて、世の常の色ならず。たゞに見過さむことの惜しき盛なるに、御遊などし給ひて、暮れ行く程のいとゞ色優れたるに、頭中將して御消息あり。

我が宿の藤の色濃き黄昏に

尋ねやは來ぬ春の名残を

○「尋ねやは來ぬ」は、「尋ね來給はぬは何故ぞ。」にて、「藤」は裏に姫君をいふ。

げにいと面白き藤の枝に御文つけ給へり。宰相の中將の君は待ちつけ給へるに心ときめさせられ給ふ。源氏の太政大臣の御前にて、かくなむとて御々御覽せさせば、「過ぎにし方の恨も解けむ。早うおはし給へ。」と許し給ふ。中將いみじく化粧しておはしけり。内大臣も引き繕ひて御對面ありて、「君は末の世には餘るまで天の下の有職におはすめるを、齡齎りぬる我を思し棄て給ふなむつらかりける。」など宣へば、中將、「いかでか。もとより愚なる心の忘にこそ。」と畏り給ふ。内大臣、「藤の裏葉の」ち誦し給へるに、

○藤の裏葉の 後撰集、「春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はゞ我も頼まむ。」「春日さす藤の裏葉の」は、「うら」といはむ爲の詞。「うらとけて」は、心解けて。「君の心解けて思ひ給はゞ我も頼まむし。」

○本篇の題はこれによる。

頭中將、花の色濃く殊に房長きを折りて客人の盃に加ふ。やうく夜更け行く程に、中將、「亂り心地いと堪へ難うて、まかんでむ空も覺束なければ、宿直所譲り給ひてむや。」と宣へば、内大臣、「いたく酔

ひて無禮なれば。」とて入り給ひ、頭中將心安く導きつ。男君は夢かと覚え給ふに、姫君はいと恥かしと思ひ染みておはす。思ふやうなる御中らひなめれば、水も漏らむやは。

かくて明石姫御参りは四月二十餘日なりけり。紫の上、祭の日晩に詣で給ひて、歸きは御棧敷にて祭御覽す。女房の車引きつゞけて殿めしう、彼こそそれと遠目より著く、事々しき御勢なり。源氏の太政大臣、六條の御息所の車押し下げられ給ひし折のこと思し出で、(時上)「時による心驕してさやうなる事なむ情なきことなりける。」など、うち語らひ給へり。

明石の姫君の御参りには、紫の上添ひ給ふべけれど、内裏に長くおはしますまじく、明石の上も、かく隔りて過し給ふを、思ひ歎くらむと思して、(折)「この折に姫君に添へ奉り給へ。」と宣へば、大臣、「いとよく思し寄りしこと。」と、明石の上に語らひ給へば、いみじく嬉しく、思ふことかなひぬる心地し給ふ。三日過して紫の上は内裏よりまかんで給ふ。立ち代り参り給ふ夜、明石の上と御對面あり。いと懐かしく御物語などし給ふ。明石の上の物などいひたる氣配めでたく、「大臣の御志、淺からぬもうべこそは。」と見給ふ。また明石の上は、紫の上のいと氣高う盛なる御氣色に、並びなき様に定まり給ひけるもいと道理と思ひ知らる。また姫君のいと美しげに雛のやうなるを見奉るも、夢の心地して、涙の止まらぬにも、住吉の神を疎ならず思ひ奉る。春宮も若き御心地に、姫君をいと心殊に思ひ給へり。

源氏の大、明けむ年四十になり給ふべければ、御賀のこと、帝より始めて、大きな世の用意な

り。その秋、太上天皇になすらふる御位得給ひ、院司ども定めらる。内の大臣、上りて太政大臣になり給ひ、宰相の中將の君、中納言になり給ひぬ。大臣の姫君の乳母の大輔、「六位宿世」と呟きし宵のこと、折々に思し出でければ、菊のいと面白く移ろひたるを賜ひて、

淺綠若葉の菊をつゆにても

濃き紫の色とかけきや

○「我が六位の頃に、かく三位に出世するものとは、思ひ掛けざりしならむ。」中納言は三位なり。

「つらかりし折の一言葉こそ忘れられぬ。」とうち笑ひ給へば、大輔はいと恥かしと思ふ。故大宮の三條殿を少し修理して住み給ふに、前栽ども小さき木なりしも、いと繁き蔭となり、遣り水の水草も掻き改めて、いと心ゆきたる氣色なり。

神無月の二十餘日の程に、六條院に行幸あり。紅葉の盛なりしかば、院にも御消息あれば、渡り給へり。まづ馬場の御殿にて、左右の馬寮の馬曳き並べ、近衛府の人々立ち添ひたる作法、五月の節に劣らず。池に頼下さするに、小さき鮎ども食ふも珍しく、北野に狩仕うまつれる鳥など調じて御膳に参る。夕風の吹き敷く紅葉の色々、濃き薄き、錦を敷けると見ゆ。容貌をかしき童女のほかに舞ひて、紅葉の蔭に入る程、日の暮るゝもいと惜しげなり。御遊始まりて、中納言笛仕うまつり給ふ、いと面白く、辨(太政大臣ノ女子)の少將の聲優れたり。

若 菜 わかな 上

院(上)、例ならず惱み渡らせ給ひ、「世に久しかるまじき心地なむする。」など宣ひて、さるべき御心(出家ノ)設せさせ給ふ。女宮達なむ四所(可成ユキ)おはします中に、三の宮を優(優)れてかなしきものに思し給ひ、御年十三四ばかりにおはすを、たゞこの御事を心許なく思し歎き給ふ。西山なる御寺造り果て、移ろはせ給はむ程の御用意をせさせ給ふにも、またこの姫宮の御裳着(始メテ穿テ着ケル程)のことを思し急がせ給ひ、年暮れ行くまゝに、御惱誠(御惱誠)に重くなりまさらせ給へば、六條院(源氏ノ君)よりも御訪(見舞)ひ屢(見舞)あり、中納言の君(夕暮)参り給へるを、御簾(御簾)の内に召し入れて細やかに御物語あり。この君のいみじく清らなる有様をうちまもらせ給ひつゝ、姫宮の御後見(御後見)に、この人をやなど思し寄り給へど、乳母などは、「いでや、もとよりまめ人にて、外(外)様に思ひ移ろひ給ふべくも侍らず。かの六條院(源氏ノ君)こそよろづ女をゆかしく思したる心、絶えずおはし給ふ。」と申す。太政大臣の男御子(男御子)、右衛門の督(中納言)の下に思ひわぶる由、尙侍の君より聞き給へど、院は限りありと思す。兵部卿の宮は、玉鬘(玉鬘)の君を外し給ひしかば、この姫宮を限りなく思し焦られ給ふ。中納言はもとより好き(アガメカシカラス)しからぬ心に思ひ静めていひ出でねど、院の御氣色をほの心得て、さすがに姫宮の外(外)様に定まり給はむは口惜しく思したり。年も暮れぬ。院には御心地なほ怠る様(快方ニ)にもおはしませねば、姫宮の御

裳着(裳着)のこと思し急ぎ、御腰結(御腰結)には太政大臣参り給へり。三日過して遂に御髪下し給ふ。世を思ひ澄したる僧達などに涙止めあへねば、まして女宮達、女御、更衣など上下(上下)ゆすりて泣きとよみ給へり。源氏の君もこの院の御心地、少しよろしくと聞き給ひて参り給へり。院にはいみじく待ち悦び給ひて、御對面あり。「女御子達(女御子達)数多ある中に、三の宮を取り別きて心許なく思ひ煩ひ侍る。」と宣ふに、君はいと心苦しと見奉り、姫宮の御有様もさすがにゆかしと思せば、「げに只人よりも、御後見(御後見)なきは、口惜しげなることになむ侍りける。さるべき御預(御預)を定め置かせ給ふべきになむ侍る。」と宣ふ。「中納言の獨りおはしつる程に、進み寄るべくこそありけれ。太政大臣に先(先)せられて妬(妬)く覺え侍る。」と宣ふに、「中納言の朝臣(朝臣)、まめやかなる所はいとよく仕うまつりぬべく侍れど、何事もまだ淺(浅)くて、たどり少くこそ侍らめ。辱(辱)けれど、自ら御後見侍らむと思ひ侍れど、たゞ行く先短(先短)くて仕へまつりさすことや侍らむ。」と宣ひて承け引き給ひつ。夜更けて歸り給へど、生心(生心)苦しう様々に思し亂る。紫の上もかゝることなど、豫(豫)て聞き給ひけれど、さしもあらじと思して、いかにとも問ひまらさせ給はず、何心もなくしておするに、いとほしく思す。

またの日雪うち降り空の氣色も物哀れに、過ぎにし方、行く先の御物語の序に語り出で給ひて、「人傳(人傳)に仰ありしにはとかく遁(遁)れ奉りしを、對面の序に、心深(心深)き様に宣はせしには、え返さひ申さでなむ。あぢきなくや思さるべき。心の變ることは更にあるまじければ、心な隔て給ひそよ。」など宣ふ。上(上)はい

とさりげなう、「哀れなる御譲にこそはあんなれ。いかで心置き奉るべき。」など御答聞え給へど、御心の中にては、「思ひ結ばほる様など世の人に漏り知られじ。この年頃、我が身を思ひ誇り、何心なくて過しけるも、人笑へならむ。」と思ひつゞけ給へど、いと大様にのみもてなし給ふ。年も返りぬ。院にては、三の宮、六條の院に御移ろひの御用意をし給ふに、宮に心掛けまらせつる人々、いと口惜しく思ひ歎く。君、今年は四十になり給ひければ、御賀の事、朝廷にても、その外の人々も替むを、事の煩多き事は、昔より好み給はぬ御心にて、皆辭し給ふ。

正月二十三日、子の日なれば、右の大將の北の方、若菜奉り給ふ。螺鈿の御厨子二具に、御衣箱四つ据ゑて、夏冬の御装束など、その外様々清らを盡し給へり。豫てさる氣色漏らし給はで、いといたく忍びて思し設けたりければ、俄にてえ返しまゐらせ給はず。君、御對面あり。御心の中には、古思し出づること様々なりけむかし。いと若く清らにて、かく御賀などいふことは辭數へにやと覺ゆ。幼き御子達もいと美しく、二人同じやうに振分髪（四十）の何心なき直衣姿にておはします。女君、

若葉さす野べの小松を曳きつれて

もとの岩根をいのる今日かな

君、御土盃取り給ひて、

小松原末の齡（子ノ）に曳かれてや

野べの若菜も年をつむべき

○「小松」より曳かれといひ、「若菜」より「つむ」といふ。「幼き御子達に引かれて、我も年を積みて長生すべきなり。」

○本篇の題はこの歌による。

かくて二月の十餘日に、女三の宮、六條院に渡り給ふ。三日が程は、かの院よりも、主方よりも嚴めしく珍しきみやびを盡し給ふ。三の宮はいと小さく、いと幼き氣色して若び給へり。君はかの紫の上を尋ね取り給へりし折思し出づるに、あまり物の榮なき宮の御有様かなと見奉り給ふ。三日が程は夜離れなく渡り給ふに、上はこの年頃、さも馴らひ給はぬ御心地に、忍ぶれどなほ物哀れにうちながめておはします御氣色、いみじうらうたげなり。君は我ながらつらく思しつゞけらるゝに涙ぐまれて、「今宵ばかりは許し給へ。」など宜ひつゝ、頬杖をつきて添ひ臥し給へれば、上、御硯を引き寄せ給ひて、

行く末遠く頼みけるかな

古事など書き混ぜ給ふを、君取りて見給ひて、とみにも渡り給はねば、上、いと心苦しとそゝのかしまるらせ給へど、見送り給ふにいとたゞならずかし。風うち吹きたる夜の氣配冷やかにて、ふとも寝入られ給はねど、近くさぶらふ人々、怪しとや聞かむと、うち身じろき給はぬも、なほいと苦しげなり。夜

深き鶏の聲の聞えたるも物哀れなり。かやうに思し亂れ給ふ故にや、君の御夢にや見え給ひけむ、うち驚きて、夜深さも知らず顔に急ぎ出で給ふ。明け暮れの空に、雪の光見えて覺束なし。上は涙に少し濡れたる御單衣の袖を引き隠して、懐かしけれどうち解けてあらぬ御用意などをかし。君は今朝宮の御方に御文奉り給ふ。姫君の御返、御手のいと若く幼げなる、かゝる際の人ばかりはおはせぬものと目止れど、見ぬやうにて紛らはして止み給ひぬるを、紫の上は後目に見居給へり。院は月の中に御寺に移ろひ給ひ、今はとて女御、更衣達、おのがじ、別れ給ふも、哀れなることなむ多かりける。

尙侍の君は、故後の宮のおはしまし、二條の殿にぞ住み給ふ。源氏の君は、飽かずのみ思して止みにし御あたりなれば、今一度相見て、その世の事も聞えまほしくのみ思し渡りしなれば、いよ／＼ゆかしくて、あるまじきことゝは思しながら、紫の上には、「東の院におはす常陸の宮の惱み給ひて、日頃久しくなりにけるを、いとほしくてなむ。」など宣ひて、二條の殿を訪ひ給ふ。女君驚き給ひ、いたく歎く／＼るざり出で給ひて、さすがに御答など自ら聞え給ふ。夜いたく更け行くに玉藻に遊ぶ鶯の聲々哀れに聞えて、しめ／＼と人目少き宮の内の有様に、君はさも變り行く世かなと思しつゞけ、明け行くもいと口惜しくて出で給はむ空もなし。花は皆散り過ぎて、名残かすめる梢の淺緑なる木立、昔藤の宴し給ひしも、この頃のことなりかしと思し出づ。

明石の姫君は、夏頃珍しき様の御惱にてまかんで給へり。明石の上、今は御身に添ひて出で入り給ふ。

三の宮のおはします御殿の東面に御方はしつらひたれば、紫の上、こなたに渡り給ふ序に、宮にも御對面あり。いと幼げにのみ見え給へば心安く思す。宮の御心につき給ふべく、繪などのこと、雜の棄て難き様など、若やかに宣へば、姫宮も、げにいと若く心よげなる人かな。」と、幼き御心地にうち解け給へり。世の人も始つ方は、「對の上、いかに思すらむ。」などいひけるを、かく睦び交し給へば、目安く、なむありける。十月に、紫の上、源氏の君の御賀に、嵯峨野の御堂にて薬師佛供養し奉り給ふ。上達部いと多く参り給へり。帝にも思し初めし御賀を、むげにやはとて、中納言にことづけてぞせさせ給ひける。その頃、右大將病して辭し給ひければ、この中納言を悦としてなさせ給ふ。この御賀の御儀式いと事々し。

明石の姫君、近づき給ひぬれば、正月朔日より御誦法不斷にせさせ給ふ。明石の上の御殿の中の對に渡し奉り給ふ。かの明石の尼君、喜に堪へず参り近づきて、いと涙がちに古めかしきことどもを語りまゐらするに、姫君も、「かく聞かざらましかば、昔のことも覺束なくて過ぎぬべかりけり。」と、うち泣き給ふ。

三月の十餘日の程に平らかに生れ給ひ、男御子にさへおはすれば、限りなく思す様にて、人々皆御心落ち居給ひぬ。紫の上渡り給ひて、珍しくうつくしと思して、絶えず抱き取り給ひ、且暮この若宮の御かしづきにて過し給ふ。かの明石の入道も聞き傳へて、いと嬉しく覺えければ、「今なむこの世を心安

く行き離るべき。」と弟子どもにいひて、この國の奥の郡に、人も通ひ難く深き山あるにぞ籠りける。かく行き離るゝ世の^(最後ニ)とちめに文書きて明石の上に奉り給へり。「傳に承れば、若君は春宮に參り給ひて男宮生れ給へる由をなむ、深く悦び申し侍る。」とあり。また「我が御許生まれ給はむとせしその年の、二月の^(某日)その夜の夢に見しやう、自ら須彌の山を右の手に捧げたり。山の左右より月日の光さやかにさし出で、世を照らす。自らは山の下の陰に隠れてその光に當らず。山をば廣き海に浮べ置きて、小さき船に乗りて、西の方をさして漕ぎ行くとなむ見侍りし。その頃より孕まれ給ひて、生れ給ひにしこなた、賤しき懷の中にも辱く思ひかしづき奉りしに、思のごと時に逢ひ給ひ、この一つの思もかくかなひ侍りぬれば、今はたゞ迎ふる蓮の夕を待ち侍る程、水草清き山の末にて勤め侍らむとてなむまかり入りぬる。」とて、

ひかり出でむ曉近くなりけり

今ぞ見し世の夢語りする

とて、月日書きたり。「我が終らむ月日も、更にな知ろし召しそ。」とありて、住吉の社に立てたる願文どもを、大きな沈^(香木)の文箱に封じ籠めて奉り給へり。尼君には、たゞ、「この月の十四日になむ、深き山に入り侍りぬる。甲斐なき身をば、熊狼にも施し侍りなむ。明らかなる所にてまた對面はありなむ。」とのみあり。尼君の悲しと思ひ給へること限りなし。明石の上は南の御殿におはしけるが、こなたに渡

りて見給ふに、げに堰き止めむ方ぞなかりける。

右衛門の督の君、三の宮をいと口惜しき心地すれば、なほ思ひ離れず。「紫の上の御氣配に押され給ひて。」など、世の人も傳ふるを聞きて、女房の小侍從に語らひ給ふ。三月ばかりの空うららかなるに、六條院に兵部卿の宮、右衛門の督など參り給ひ、君出で、御物語などし給ふに、右大將の君は花散里の御方にて人々數多して鞠もてあそび居給ふと聞し召して、こなたにと召し給へば、人々參りぬ。明石の姫君は若宮具し奉りて春宮に參り給ひにし頃なれば、こなたにて遊び給ふ。やうく暮れかゝるに、「風吹かず、よき日なり。」と興じて、頭の辨、衛門の督も下り立ち給ひて、花の蔭にさまよふ夕映いと清げなり。我劣らじと思ひ顔なる中に、右衛門の督の君に並ぶ人なかりけり。君、兵部卿の宮も出で、御覽す。大將の君、御階の中程に休み居給へば、督の君もつゞきて、姫君の御前の方を後目に見れば、いろいろの袖口のこぼれ出でたる御簾の端々、御几帳などしどけなく引き遣りたるに、唐猫のいと小さくをかしげなるを、少し大きな猫の追ひて、俄に御簾の端より走り出づるに、綱いと長く着きたりけるを、物に引き懸け鞭はれにけるを、逃げむとひこじろふ程に、御簾の側いとあらはに引き上げられたれど、とみにも引き直す人もなし。几帳の際少し入りたる程に、袿姿にて立ち給へる人あり。いとあらはに見入れらる。御髪いと美しげに七八寸ばかりぞ長に餘り給へる、いひ知らずあてにらうたげなり。猫のいたく鳴けば、見返り給へる面持、若く美しの人や、とふと見えたり。やをら引き入り給ふに、猫

の綱緩めつれば、御簾も下りぬ。人々、南の御殿に歸りて、御土盃參れど、督の君はいといたく思ひしめりて、やゝもすれば花の木を眺めやる。(三ノ世)ほのかに見奉りつるも、我が昔よりの志の驗にやと、嬉しき心地すれど、院の御有様の匂ひやかに清らなるを見奉りては、「かゝる人に馴れ給へる姫宮の、いかでか御心を移すべき。」と思ひ廻らすにいと心苦しく、胸のみ塞りてまかんでぬ。この君は太政大臣の東の對に獨住にておはす。殿に歸り給ひても、胸いたくいふせければ、例の小侍従に、「あやなく今日をながめ暮らし侍る。」など書き遣り給ふ。

○あやなく今日を、古今集、見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今日をながめ暮らさむ。

「あやなく」は、何とも分別し難きをいふ。

小侍従は一日の情を知らねば、何心なく宮に見せ參らすに、宮は御簾の明きたりしを思し出で、恥かしと思し給へり。

若 菜 わかな 下

督の君人知れぬ思や紛るゝと、春宮に參り給へば、御猫の數多歩くを見るに、まづかの猫を思ひ出でらるれば、「六條の院の姫宮の猫こそいとをかしう侍りしか。」と啓すれば、ゆかしく思して、召させ給

へり。げにいと美しげなり。督の君また參り給へるに、春宮、げにいとをかしき様したりけり。されどもまだ人になづき難くて。」など宣へば、預り奉りて撫で養ひ給ふに、いとよくなづきたりければ、春宮より召すにも參らせず、且暮これと語らひ給ふ。式部卿の宮は、眞木柱の姫君の御後見にこの君を思し寄り給へど、君は猫よりも思ひ貶しけるにや思しも寄り給はず。姫君は母君の怪しく僻めるに、玉盞の君をゆかしく思す。兵部卿の宮、なほ獨住におはし、思し給ひしことども皆違ひて、人笑へにも思しければ、この姫君におはし申し初め給ひぬれど、御容貌など、亡き北の方に劣り給へれば、御志も深からで頼もしげなきを、玉盞の君聞し召して、我もしさやうならむ世を見ましかばと、あはれになむ思し出でける。

はかなく年月も重なりて、内の帝、御位に即かせ給ひて十八年にならせ給ひぬ。日頃いと重く惱ませ給ふことありしかば、俄に下り居させ給ひぬ。太政大臣も致仕の表奉りて籠り居給ひ、左の大將、右の大將になりてぞ世の中の政仕うまつり給ひ、右の大將は左に移り給ひける。明石の女御の一の宮、春宮に居給ひぬ。女御は御子達數多添ひて、いと御覺並びなし。源氏の君は住吉の御願果し給はむとて、紫の上具しまるらせ給ふ御響、世の常ならず。上達部も數多仕うまつり給ふ。明石の女御、紫の上は一つ車に乗り給へり。次の御車には、明石の上、尼君、忍びて乗り給へり。十月中の十日なれば、神の齋垣に這ふ葛も色變りて、松の下紅葉など、秋の氣色いと著し。夜一夜遊び明かし給ふに、二十日の

月遙かに澄みて、海の面、白く見え渡るに、霜のいと多く置きて、松原も色粉ひて、面白さも立ち添ひたり。紫の上、御門より外の物見をさし給はず、ましてかく都の外の御歩きは、また馴らひ給はねば、珍しくをかしく思さる。ほのくくと明け行くに、霜はいよ／＼深く、歸るも口惜しく、歸さはよろづの逍遙を盡し給ふ。かゝる御有様を、かの入道の聞かず見ぬ世にかけ離れ給へるのみなむ飽かざりける。

院(山ノ)かの姫宮をいと懐かしく思し給へば、君は、「この度五十に足り給はむ年、御賀に若菜調じて参り給ひなむ。」と思して、その御用意せさせ給ふにも、「院は古も物の音に御心止めさせ給へりしかば。」と思して、舞人樂人など優れたる限りをととのへさせ給ふ。姫宮はもとより琴の御琴をなむ習ひ給ひければ、院、「参り給はむ序に、かの御琴の音なむ聞かまほしき。」と宜ふと聞き給ひ、君もいとほしく思して御心止めて教へまるらせ給ふ。姫宮もやう／＼心得給ふまゝにいとよくなり給へば、明石の女御もこの琴の音ゆかしく思して、たゞ暫しと御暇申して、まかんで給へり。

年も返りぬ。二十日ばかりになれば、空をかきしき程に、風温く吹きて御前の梅も盛になり行くまゝに、大方の花の木ども皆氣色ばみ霞み渡りにけり。廂の中の御障子を明けて、こなたかなた御几帳ばかりを隔にて御方々集へ給ふ。明石の上に琵琶、紫の上に和琴、明石の女御に箏の御琴、姫宮には御琴奉り給ふ。御琴どもの調ども整ひ果て、掻き合へる程、大將の君拍子取りて唱歌し給へば、君も時々

扇うち鳴らして加へ給ふ御聲、昔よりもいみじく面白く、夜の静かになり行くまゝに、いふ限りなく懐かしき夜の御遊なり。更け行く月の氣配冷やかに、臥待の月はつかにさし出でたる心許なしや。君、「春の朧月夜よ。秋のあはれも、またかやうなる物の音に、虫の聲縫り合はせたる、たゞならずこよなき響添ふ心地す。」と宜へば、大將の君、「秋の夜の隈なき月には、よろづの物滞りなきに、琴笛の音も明らかに澄める心地はし侍れど、なほ殊更に作り合はせたるやうなる空の氣色に、花も露もいろ／＼目移ろひ心散りて、限りこそ侍れ。春の空のたど／＼しき霞の間より、朧なる月影に、笛の音なども靜かに吹き合はせたるやうには、いかでか艶に澄み上り果てむ。懐かしく物の整ふことは、春の夕暮こそ殊に侍りけれ。」など申し給ふ。君は對へ歸り給ひぬ。紫の上は止り給ひて、姫宮に御物語など聞え給ひて、曉にぞ歸り給へる。君、さまざまなる御物語の序に、「中宮の御母六條の御息所なむ、心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でらるれど、恨むべき節をぞ長く思ひ詰めて、深く怨ぜられしこそいと苦しかりしか。」など宜ひぬ。

紫の上は、院のおはしまさぬ夜は、人々に物語など讀ませて聞き給ひ、「我は怪しく浮きても過しつるかな。げに人より異なる宿世にて、物思ひ離れぬ身にてや止みなむ。」など思ひつゞけて、夜更けて大殿籠りぬる曉方より御胸を病み給ふ。君聞き給ひ、胸潰れて急ぎ歸り給へるに、いと苦しげにておはす。日一日添ひおはしてよろづに見奉り歎き給ふに、起き上り給ふことも絶えて、日頃經ぬ。御祈ど

も數知らず始めさせ給へど、験も見えず胸は時々おこりつゝ堪へ難く苦しげなり。いみじく心細く悲し
 と見奉り給ふに、同じ様にて二月も過ぎぬ。試に所を變へ給はむとて、二條の院に移し奉り給ひつ。こ
 の人失せなば、君も必ず世を背く御本意遂げ給ひなむと、大將の君なども心を盡して見奉り扱ひ給ふ。
 げにいと頼み難げに弱りつゝ、限りの様に見え給ふ折々多かれば、いかさまにせむと思し惑ひつゝ、姫
 宮の御方にはあからさまにも渡り給はず。明石の女御も渡り給ひて、諸共に見奉り扱ひ給ふ。上は若宮
 のいと美しうておはしますを見奉り給ひても、いみじく泣き給ひて、「大人び給はむ見え見奉らすなり
 なむこと。おのれを忘れ給ひなむ。」など宜ふ。少しよろしき様に見え給ふ五六日うち混ぜつゝ、また
 重り煩ひ給ひて、いつとなく月日を経給ふは、なほいかにおはすべきにかと思し歎けど、御物怪などい
 ひて出で來るもなし。

衛門督は中納言になり給ひき。この姫宮の御兄の二の宮になむ通ひ給ひける。宮の人柄もこよなくお
 はすれど、なほこの姫宮を戀しくのみ思して、こなたは人目に咎めらるまじきばかりにもてなし給ふ。
 小侍従は、三の宮の乳母の女にて、その乳母の姉ぞ督の君の乳母なりけり。督の君、小侍従を迎へ取り
 ていみじく語らふ。「たゞ一言物越にて。」と切に宜へば、小侍従もえいなび果てゝ、さるべき折窺ひつ
 けて消息おこせたり。四月十餘日ばかりのことなり。宮の御前の方、人繁からず、たゞこの小侍従はか
 り近くさぶらふ折にて、やをら御帳の端に君を据ゑ奉りつ。宮は何心もなく大殿籠り給ひしに、近

く男の氣配すれば、君のおはしたると思したるに、抱き下し奉れば、物に壓はれし心地して、見上げ給
 へれば、あらぬ人なりけり。あさましくなりて人召せど、近くもさぶらはねば、聞きつけて參るもな
 し。わななき給ふ様、水のやうに汗も流れて物も覚え給はぬに、督の君さまに宣ふに、宮もこの人
 なりけりと思して、露御答もし給はず。君はいたくうち歎きて、「哀れとたに宣はせば、それを承りて
 まかんでなむ。」とよろづに聞え給ふ程、宮はいとあさましく現とも覚え給はず、悲しく心細くてうち泣
 き給ふを、いと辱しと見奉る。明け行く氣色に、「たゞ一言御聲を聞かせ給へ。」と、涙に濡れたる袖
 を引き出で、

起きて行く空も知られぬ明暮に
 いづくの露のかゝる袖なり

宮、
 明暮の空にうき身は消えなむ
 夢なりけりと見ても止むべく

とはかなげに宜ふ御聲の若くをかしげなるを聞きさすやうにして出でぬる魂は、誠に我が身を離れて止
 りぬる心地す。御殿に歸りてもなかくなる心地のみまさりて、起き臥し明かし暮らしわび給ふ。祭の
 日なども物見にも出でず。二の宮、何事とは知り給はねど心憂く、箏の琴弾きおはす氣配も、さすがに

あてになまめかしけれど、心の中に、

諸鬘落葉を、何に拾ひけむ

名は睦じきかざしなれども

○「諸鬘」は、桂と葵、何れも祭のかざしにす。こゝは二の宮と三の宮をいふ。「睦じきかざし」は、

姉妹の意。

○「同じ姉妹なれど、何しに劣れる姉宮を娶りしならむ。」

○この歌によりて、この二の宮を「落葉の宮」といふ。

宮はひたぶるに物怖ぢし給ひ、明るき所にだにえ出で給はず、惱ましげにおはせば、君聞き給ひて、これもまたいかならむと驚かせ給ひて渡り給へり。宮、さやかにも御目を見合はせ奉り給はぬを、君は恨めしく思すにやといとほしく、さまざまに慰め給ふに、宮はなかく心苦しく、人知れず涙ぐましく思さる。君は稀々に渡り給ひしなれば、ふとも立ち歸り給はぬに、「上、絶え入り給ひぬ。」と、人参りたれば、更に何事も思し分かれず、御心も暮れて歸り給ふ。道の程も心許なきに、げにかの二條の院は、ほとりの大路まで人立ち騒ぎたり。院はいとよく御心鎮め給ひて、いよ／＼いみじき願どもを立て添へさせ給ひ、優れたる験者ども、頭より誠に黒煙を立て、加持し奉る。院もたゞ、「今一度目を見合せ給へ。」と思し惑ふ。いみじき御心の中を佛も見奉り給ふにや、月頃更に現れざりし御物怪、小さき

童女に移りて、上はやう／＼生き出で給へり。嬉しくも忌々しくも思すに、たゞ昔見給ひし六條の御息所の御靈なりけり。「中宮の御事にていと嬉しく辱しとなむ思ひ侍れど、思ふ同士の御物語の序に、憎かりし有様を宣ひ出でたりしなむいと恨めしく。よし、今はこの罪輕むばかりの業をせさせ給へ。」などいひつゞくるに、いみじくあさましと思し給ふ。君はいかなる業をしてか上の御命懸け止め奉らむとのみ夜晝思し歎くに、惚れ／＼しきまで、御顔も少し面瘦せ給ひにけり。五月などはまして晴れ／＼しからぬ空の氣色に、さわやぎ給はねど、ありしよりは少しよろしき様なりしに、いと／＼暑き程は、御息も絶えつゝいよ／＼弱り給へば、いはむ方なく思し歎きたり。上は、「我が身には更に口惜しきこと残るまじけれど、かく思ひ惑ひ給ふにいとほしく、いかで空しき様を見え奉るべき。」と思ひ起して、御湯などいさゝか參る故にや、六月になりてぞ時々御頭もたげ給ひける。
姫宮は怪しかりしことを思し歎きしより、やがて例の様にもおはせず惱まししくし給ふ。御乳母達見咎め奉りて、「君の渡らせ給ふもいとたまさかなるを。」とつぶやく。君聞き召して渡り給へり。紫の上は、暑しとて御髪洗して少しさわやかにもてなし給へり。御前の池はいと涼しげにて、蓮の花の咲き渡れるに、葉はいと青やかにて、露さら／＼と玉のやうに見え渡るを、起き上りて見出し給へるもいと珍し。君は出で給はむも物憂けれど、内裏にも院にも聞し召さむ御心を憚りて渡り給ひぬ。姫宮は御心の鬼に恥かしう、御答もなければ、人召し出で、御心地の様など問ひ給ひ、怪しと思せど、「珍しき御事

にも。」とばかり宜ふ。辛うじて渡り給ひしなれば、ふとも歸り給はで、二三日おはす。督の君かくと聞くに、いみじき事どもを書きつゞけて小侍従のもとにおこせたり。君、南の對に渡り給へる人間に、忍びて宮に見せ奉るに、人の參れば苦しく御几帳引き寄せて去りぬ。宮はいと胸潰るゝに、君入り給へば、御褥の下に挟み給ひつ。夜さり二條の院に歸り給はむと、晝の御座にうち臥し給ひて、御物語など宜ふ程に暮れにけり。少し大殿籠りけるに、鯛の華やかに鳴くに目覺めて、御衣など着直し給ふ。宮、

夕露に袖濡らせとや日ぐらしの

鳴くを聞くく起きて行くらむ

君御返、

待つ里もいかゞ聞くらむかたぐくに

心さわがす日ぐらしのこゑ

など思しためらひて、この日も止り給ひ、またの日まだ朝涼みの程に歸り給はむとて、疾く起き給ふ。「前夜の蝙蝠を落して。」とて、昨日うたゝ寝し給へりし御座のあたりを、立ち止りて見給ふに、御褥の少し迷ひたる棲より、淺緑の薄様なる文の押し卷きたる端見ゆるを、何心もなく引き出で、御覽するに、男の手なり。細々と書きたるを見給ふに、紛るべき方なくその人の手なりけりと見給ひつ。小侍従

遙かに見つけて胸つぶんと鳴る心地すれど、それにはあらしと思ひなす。姫宮は大殿籠りておはす。君出で給ひぬれば、小侍従、宮に寄り來て、「昨日の物はいかにせさせ給ひてし。」と申せば、あさましと思して、涙のたゞ出で來に出で來。君は、この文のなほ怪しく思さるれば、人見ぬ方にてうち返しつ見給ふに紛ふべくもあらず。さてもこの宮をばいかゞもてなしまぬらすべき。珍しき様の御心地もかかる事よりなりけりと、とやかくと申し亂る。

督の君かくなむと聞きて、いとあさましく、空に目つきたるやうに覺えて、朝夕涼みもなき頃なれど、身も氷る心地していはむ方なく覺ゆ。いかでかは目をも見合せ奉らむ。さりとてうち絶えて參らざらむも、人目怪しく、君の御心にも申し合はせ給ふらむと、安からず思ふに心地もいと惱まし。

源氏の君は尙侍の君、遂に世を背き給ひてけりと聞き給ふに、いと哀れに口惜しく御心動く。紫の上は、朝顔の宮もまたいみじう勤めて紛れなく行に染み給ふなど聞き給ふに、羨ましく思ひ給へり。山の院の御賀も延びて秋とありしを、十月にと思し設け給へれど、姫宮いたく惱み給へばまた延びぬ。督の君の二の宮なむその月には參り給ひける。山の院は姫宮の御惱を聞き召して、らうたく戀しと思し給ふ。十二月になりにけり。院の御賀十餘日と定めて、殿の内揺りてのゝしる。紫の上はこの試樂をゆかしく思して、六條の院にぞ歸り給へる。明石の女御の君も里におはします。督の君をかゝる折にさぶらはせざらむは、いと榮なく、人も怪しと疑ひぬべきことなれば、取り分きて御消息あり。父太政大臣も

そゝのかし給ふに、苦しと思ふく参りぬ。げにいといたく瘦せく青び給ひしを、いと罪赦し難しと御目止れど、さりげなくいと懐かしく、「舞の童の用意などよく加へ給へ。」と宣ひつくるを、嬉しけれども苦しく、顔の色違ふらむと覚えて御答もとみにうち出です。言少なにて御前をすべり出でぬ。暮れ行けば、御簾上げさせ給ひて、物の興まされど、院のさりげなく宣ふことも、督の君、心の鬼に頭痛く覺ゆれば、まだ事も果てぬにまかんで給ひ、やがていといたく煩ひ給ふ。父大臣、母北の方思し騒ぎて、餘所々々にてはいと覺束なしとて、御殿に迎へ給ふに、二の宮の思したる様、またいと心苦しく、御母御息所もいとみじく歎き給ふ。月頃御膳など更に参らざりけるに、いとさはかなき柑子などをだに觸れ給はず。世の中惜みて御訪に参り給はぬ人なし。六條の院にもいと口惜しきことなりと思し驚きて、御訪懇にあり。左の大將の君はましていとよき御中なれば、氣近くおはし給ひつゝいみじく歎き歩き給ふ。御賀は二十五日なりけり。

柏 木 かしはぎ

衛門の督の君、悩み給ふことなほ怠らで年も返りぬ。心づから害ひつるにこそと思ふに、恨むべき人もなし。などく所狭くしなつる身ならむと、掻き暮らし思ひ亂れて枕も浮きぬばかりなり。人々立ち

去り給へる程に、三の宮に御文奉り給ふ。

今はとて燃えむ煙も結ばれ

絶えぬおもひのなほや残らむ

哀れとだに宣はせよ。」と申し給ふ。小侍泣くく宮に、「誠にこれをとぢめにもこそ。」と御返そのかし奉れば、宮、「我も今日か明日かの心地して物心細ければ。」と、更に書き給はず。されど御硯など参らせて責めまゐらすれば、溢々に書き給ふを取りて、忍びてかしこに参りぬ。督の君、「この世はかくはかなく過ぎぬれど、心苦しき御事を、いかで平らかにとだに聞き置き奉らむ。」など、思ひ染み給へる様の深きに、小侍従もいみじう泣く。紙燭召して宮の御返見給ふ。

立ち添ひて消えやしなまし憂き事を

思ひ亂るゝ煙くらべに

後るべくやは。」とばかりあるを、哀れに辱しと思ひ宣ふ。

姫宮はこの暮つ方より惱ましうし給へば、君も渡り給へり。夜一夜悩み明かさせ給ひて、日さし上る程に生まれ給ひぬ。男君におはす。御方々様々に御産養参らす。姫宮は、「この序に死なばや。」と思し給ひたりしかば、尼にもなりなばやの御心つき給ひ、君にそのこと聞え給へば、君、「いと心憂く忌々しき御事なり。などてかさまで思す。」と宣へど、御心の中にては、「誠にさ思し寄り給はむ、さやうに

て見奉らむはあはれなりなむ。」と思す。山の院は、宮の珍しき御事平らかなりと聞き召して、ゆかしう思すに、なほ引きつゞき惱み給ふと聞き給ひ、夜に隠れて御山を出で渡り給へり。君、驚きて御對面あり。墨染の御姿、いと清らに見奉り給ふ。姫宮いと弱氣に泣き給ひて、「生くべくも覺え侍らねば、かくおはしましたる序に、尼になさせ給ひてよ。」と聞え給ひて、君、さまざまに止めまらせ給へど、宮は頭振りて聞き入れ給はねば、山の院も御心の中に、「この院の御志も深からぬ様に聞けば。」と思して、夜明け方になりぬと急ぎ給ひ、御髪下させ給ひて、歸り給ひぬ。かの衛門の督はかゝる御事を聞き給ふに、いとゞ消え入るやうにし給ひて、むげに頼む方少なり給ひにたり。内にも惜み給ひて俄に權大納言になさせ給ひぬ。

大將の君、常にいと深く思ひ歎き訪らひまらせ給へば、今日もこの御悦に參り給ふに、督の君、今年となりては起き上ることもをさくし給はねど、臥し給へる枕上に入れ奉り給ふ。いと弱げに息も絶えつゝ、「六條の院に聊かなる事の違ひ目ありて、月頃心の中に畏り申すことなむ侍りしが、山の院の御賀の試樂の時、なほ免されぬ御目尻を見奉りて、世に長らへむこともあぢきなう思ひ侍りし。事の序あらばよろしう明らめ申させ給へ。」など宜ふに、大將の君は心の中に思ひ合はする事どもあれど、確かには推し量り難く、「などか今まで隔て残し給ひつらむ。」と悲しく思さる。督の君、「また一條におはす二の宮のこと、事に觸れて訪ひまらせ給へ。」など宜ふ程に、御心地せむ方なくなりければ、「さ

らば出でさせ給ひぬ。」といへば、大將の君も泣くく出で給ひしに、二の宮にも遂に對面しまらせす、泡の消え入るやうにて失せ給ひぬ。父大臣、北の方などましていはむ方なし。「我こそ先立ため。」と焦れ給へど、何の甲斐もなし。尼姫宮もさすがにいと哀れに思し給ひ、様々物心細くてうち泣かれ給ひぬ。

三月になれば、空の氣色もうらゝかにて、この若君五十日の程になり給ひて、いと白う美しう物語などし給へば、君も今は日々に渡り給ひてもてなしまらせ給ふ。若君を抱き取り給へば、いと心安くうち笑みて、つぶくと肥えて、いとあてに愛敬づき、まみの薫りて笑みがちなるを、いとあはれと見給ふ。思ひなしにや、なほいとよう似たりかし。人知れずはかなき形見ばかりを止め置きて、我が心もて身を失ひつるよと哀れに思しければ、憎しと思ふ心も引き返し、うち泣かれぬ。

一條の二の宮は、日頃経るまゝに心細く、もて使ひ給ひし琵琶和琴なども、音を立てず。御前の木立いたう煙りて、花は時忘れぬ氣色なるを眺め給ひて、物悲しくつれ々なる晝夕方、前驅華やかに追ふ音して、こゝに止りぬる人あり。大將殿のおはしたるなりけり。いと清らなる御もてなしにて入り給へれば、御母御息所ぞ對面し給へる。大將殿、「今はの際にも宜ひ置くこと侍りしかば、疎ならずなむ思ひまらする。」とて、しばく目押し拭ひ鼻うちかみ給へば、御息所、「常なき世のさかなれど、宮の思し入りたる様のいと忌々しきまでにて、いと靜心なくなむ。」とて、いといたう泣き給へば、大將殿、懐

かしよう細やかに申し給ひて、やゝ程経てぞ出で給ふ。

この後も、大將殿、常に一條の宮を訪ひまゐらせ給ひ、四月ばかりの空は、そこはかとなく心地よげに、一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたれど、物思ふ宿は心細く暮しかね給ふに、例の訪ひ給へり。柏木と楓との、物より異に若やかなる色して、枝さし交したるを見給ひて、

ことならば馴らしの枝に馴らさなむ

葉守の神のゆるしありきと

○「同じ事ならば、木の神の許もありしこと故、今まで馴れしやうに枝と枝と馴れ給へ。」にて、「御門首の遺言もありしなれば、今は己と親み給へ。」

御息所御返、

柏木に葉守の神はまさすとも

人馴らすべき宿の梢か

○「御門の首は死しても他の人に親むべきにあらず。」
○本篇の題はこの歌による。

御息所はこの頃惱み給へど、少し出で給ひて御對面あるに、大將殿、「よろづの事、さるべき宿世にこそは。」など慰めまゐらせ給ふ。

横 笛 よこぶえ

督の君のはかなく失せ給ひにしを、飽かず口惜しと戀ひ忍び給ふ人多かり。六條の院にも、朝夕に親しく参り馴れし人なれば、赦し難しと思し出づる罪はあれど、折々につけて忍び給ふ。大將の君、事ども多く懇に營み給ひて、かの一條の宮をも御志深く訪ひまゐらせ給ふ。秋の夕べの物あはれなるに、うち解けしめやかに御琴など弾き給ふ程なるべし、例の御息所對面し給ひて昔の物語ども宜ひ交し給ふに、大將は御座近き和琴を引き寄せ給ひて掻き鳴らし給ふ。督の君の常に弾き給ひし琴なりけり。月さし出で、曇なき空に、羽うち交せる雁も列を離れぬは、羨ましく聞き給ふらむかし。大將殿出で給ふに御息所より御贈物に笛を添へて奉り給ひ、「この笛になむ舊き事も傳はるべく聞き置き侍りしを、かゝる蓬生に埋もるゝも口惜しく見侍れば。」と宣へば、大將殿見給ひて、げに故君の身に添へて翫ひ給へりと思ひ出で給ふに哀れ多く添ひて、試に吹き鳴らす。御息所、

露繁さむぐらの宿にいにしへの
秋に變らぬ虫の聲かな

大將殿、

横 笛

横笛の調はことに變らぬを

空しくなりし音こそ盡させぬ

○「横笛の調は變らぬに、君は空しくなり給ひしが、笛の音は長く傳はるべし。」
○本篇の題はこの歌による。

殿に歸り給へれば、格子などを下させて、皆寢給ひにけり。「一條の宮に心掛け給ふ。」と、人の知らせければ、生憎く思ふなるべし。格子上げさせ給ひて、「かゝる夜の月に、心安く夢見る人のあるものか。少し出で給へ。」など宜へど、女君は心やまじう思ひ給へば、御答もなし。殿、少し寢入り給へる夢に、かの督の君、たゞありし様の桂姿にて、この笛を取りて見給ひ、

笛竹に吹き寄る風のことならば

末の世長き音に傳へなむ

○「この笛を吹くもの多からむが、同じく我が子孫に傳へたし。」

我が思ふ所は異に侍りき。」といふを、なほ問はむと思ふ程に、若君の寢おびれて泣き給ふ御聲に覺め給ひぬ。

大將殿、六條の院に參り給へば、院は明石の女御の御方におはします。入道の姫宮の若君もおはしませば、大將は、「この若君をまだよくも見ぬかな。」と思して、御簾の隙よりさし出で給へるを、花の枝

の枯れて落ちたるを取りて、見せ奉りて招き給へば、走りおはしたり。いみじう白う光り美しく、いとよく故督の君に似給へりと見るに、なほ心得難く思ひ寄る方なし。君、對へ歸り給ひ、のどやかに御物語など宜ふ程に、日も暮れかゝりぬ。少し近く參り寄り給ひて、かの夢語を申し給へば、思し合はする事どもあり。「かれは故式部卿の宮の古くより傳へ給へるを、萩の宴せられる日、督の君に贈物に取らせ給へるなり。」など宜ふ。大將、今しも事の序に思ひ出でたるやうにおぼめかしうもてなして、「亡からむ後の事どもいひ置き侍りし中に、しかゝなむ申し侍りしは、いかなることにか侍りけむ。」と申し給ふに、君、「しが人の恨止るばかりの氣色を、何の序にか漏らし出でけむ。」とのみ宜ひてをささ御答もなかりけり。

鈴 虫 すむし

夏頃蓮の花の盛に、入道の姫宮の御持佛供養させ給ふ。紫の上、懐かしう心殊なる唐の錦を選びて幡縫はせ給へり。姫宮の御持經は、君ぞ御手づから書かせ給ひける。堂飾り果て、講師參り上り、人々集ひ給へば、君もあなたに出で給ふ。姫宮はいと小さく人氣に押され給へり。例の親王達もいと數多參り給ひ、御方々より我もくと營み出で給へる御捧物の有様、所狭きまで見ゆ。君も、今しもいとほし

き御心添ひて、限りもなくかしづき奉り給ふ。

秋頃、西の渡殿の前、中の垣の東の際をおしなべて野に作らせ給ひ、この野に虫ども放たせ給ふ。十五夜の月のまだ影隠したる夕暮に、佛の御前に姫宮おはして、端近う眺め給ひつゝ念誦し給へるに、君渡り給ひて、「虫の音いと繁く亂るゝ夕べかな。」とて、我も忍びてうち誦し給ふ。げに聲々聞えたる中に、鈴虫の振り出でたる程、華やかにをかし。「松虫は名に違ひて、命の程はかなき虫にぞあるべき。鈴虫はいと心安く、華やかなるこそらうたけれ。」など宜へば、姫宮、

大方の秋をば憂しと知りにしを

振り棄てがたき鈴虫の聲

○「秋はすべて憂きものと知りしかど、鈴虫の聲は棄て難し。」「秋」は裏に君の「厭」きをいふ。

君、

心もて草の宿を厭へども

なほ鈴虫の聲ぞふりせぬ

○「宮は心から世を厭ひ給へど、なほいと若々し。」

○本篇の題はこれらの歌による。

琴の御琴召して珍しく弾き給へば、宮、御数珠もひき怠り給ひて、御琴の音に心入れ給へり。月さし出

で、いと華やかなるもあはれなるに、空をうち眺めて、世の中様々にはかなく移り變る有様も思しつゝけられて、例よりもあはれなる音に掻き鳴らし給ふに、兵部卿の宮、大將の君など具して参り給ひ、御琴の音を尋ねて、こなたに参り給ふ。「今宵は鈴虫の宴にて明かしてむ。」と宜ひて、御土盃二わたりばかり参る程に、院より、「同じくは」と、御消息あれば、

○同じくは、後撰集、「あたら夜の月と花とを同じくは、心知れらむ人に見せばや。」による。同じ

くは、源氏の君に見せたき意なり。

君、「いと辱し。」とて、俄なるやうなれど、参り給はむとす。人々の御車、次第のまゝに引き直して出で給ひぬ。院はいたう悦び給ひ、明方に文など講じて、人々まかんでぬ。

夕 霧 ゆふぎり

まめ人の名を取り給へる大將の君、この一條の宮の御有様をゆかしと思して、人目には昔を忘れぬ御志に見せつゝ、下の心には、かくては止むまじくなむ、月日に添へて思ひまさり給ひける。いかならむ折にかと思し渡るに、御息所、御物怪にいたう煩ひ給ひて、小野といふわたりに山里持ち給へるに渡り給へり。早うより御祈の師にて、山籠りして出でじと誓ひたる律師を、麓近く請じ給ふ爲なりけり。御

車より始めて御前驅など、大將殿よりぞ奉り給へる。御息所は惱み給へば、宮ぞ御返申し給ふ。御手はいとをかしげなるに、大將はいよ／＼見まほしう目止り給ふ。八月の十日ばかりなれば、野邊の景色もをかしき頃なるに、山里の有様のいとゆかしければ、君も、御前驅など事々しからで出で給ふ。宮の御方の御簾の前に入れ奉りて、人々御消息傳ふ。宮は奥の方にいと忍びておはしませど、事々しからぬ假の御しつらひなれば、御衣の音なひなど聞ゆるに、心も空に覺えて、例の少將の君などに物語し給ひて、「年頃といふばかりになりぬるを、かう物遠くもてなさせ給ふ恨めしさ。」と宣ふ程に、日入り方になり行けば、空の氣色もあはれに霧り渡りて、山の蔭は小暗き心地するに、蛸鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうち靡ける色もをかしう見ゆ。御前の前裁は、心に任せて亂れ合ひたるに、水の音いと涼しげにて、山下し心凄く、松の響木深く聞え渡されなどして、經讀む聲、うち鳴らす鐘の音に合ひて、いと尊く聞ゆ。宮の中いと人少な／＼るに、霧のたゞこの軒のもとまで立ち渡れば、大將、

山里のあはれを添ふる夕霧に

立ち出でむ空もなき心地して

○本篇の題はこの歌による。

年頃の恨ほめかし給へど、御答もなければ、御消息傳へに入る人の影につきて入り給ひぬ。宮はいとむくつけく、北の御障子の外に出でさせ給ふを、いとよう探り寄りて引き止め奉りつ。御身は出で給

へれど、御衣の裾の残りければ、汗は水のやうにわな／＼きおはす。人々も呆れていかにすべき事とも思ひ得ず、泣きぬばかりに申せど、大將は様よくもて鎮めて、思ふこと多く申し給ふ。障子を押し給へるは、いと物はかなき固めなれど、大將は引きも明けず、風いと心細う、更け行く夜の氣色、虫の音も、鹿の鳴く音も、瀧の音も、一つに亂れて艶なる程なれば、心なき人だに寢覺めしぬべき空の氣色を、格子もさながら、入り方の月の山の端近き程、涙止め難く物哀れなり。月明き方に誘ひまゐらすを、あさましと思して心強うもてなし給へど、はかなう引き寄せ奉りて、「心安く思しなし給へ。御許あらでは。」など宣ふ程に、明方近くなりけり。月隈なく澄み渡りて、霧にも紛れずさし入りたり。宮は、「人の物いひいかならむ。」といとわびしく、「明かきでだに出で給へ。」とやらひまゐらすより外の事なければ、霧に立ち隠れて出で給ふ心地空なり。

晝つ方日中の御加持果て、僧ども下りて、かの律師一人止りてなほ經讀み給ふ。「よろしうおはします。」と悦びて、その序に、「そよ、この大將はいつよりこゝには通ひ給ふぞ。」と問ひ申し給ふ。御息所、「さることも侍らす。」いで、某に隠さるべきことにもあらず。今朝某後夜に參り上りつるに、

○後夜 夜を初夜後夜に分つ。後夜は夜半以後をいふ。

かの西の妻戸より、いとうるはしき男の出で給へるを、某は見分け奉らざりつれど、この法師はらなむ、大將殿の參り給ひけると口々申しつる。この事いと切にあるまじき事なり。本妻強くおはします。

人の御怒出で来なば、長き絆(はだし)となりなむ。」といひ放てば、御息所、御心の中に、「さる事やありけむ。人少なにおはする氣色を見て、這ひ入りもやし給ひけむ。」と思す。律師の立ち給ひぬる後に、少將の君を召して問ひ給ふに、委しく申す。「障子(まじ)はさして。」と、よろづよろしきやうに聞ゆれど、御息所、「内々の御心は清うおはすとも、人にいかでいひあらがひ給ひなむ。」と疎(おろ)ならず思し歎き給ふ。「こなたへ。」と御消息あれど、宮は様々に思し亂れつゝ、夕つ方を渡り給へる。宮の心憂しと思したる御氣色を見奉るにいとほしく、いかなりし事とも問ひまゐらせす。大殿油(おほのあぶら)急ぎ參らせて、御臺(みだい)などこなたにて參らせ給へど、宮は聞し召さず。(大將ヨリ)かしこよりまた御文あり。心知らぬ人取り入れたれば、御息所は、「いかなる御文にか。」と召し寄せて御覽するに、「あさましき御心の程を見奉りて。」など恨み給へるを見も果て給はず。御心地の掻き亂るゝを、目を押し絞りて、御返(おんかへ)、怪しき鳥の跡のやうに書き給ふ。文の端押しひねりて、御使出し立て、いといたる苦しがり給ふ。人々いひ騒ぎて例の驗(しるし)ある僧どもいと騒がしうのゝしる。

大將殿はこの晝つ方より三條殿におはしにけり。女君は、かゝる御歩(みち)きの氣色ほの聞きて、心(こころ)やましと思ひ給へど、知らぬやうにて君達(きみたち)もてあそび紛らはしつゝ、我が晝の御座(みま)に臥し給へり。宵過ぐる程にぞ御息所の御返(おんかへ)もて參れど、かく例にもあらず鳥の跡(あと)のやうなれば、大將殿とみにも見解き給はで、大殿油(おほのあぶら)近く取り寄せて見給ふを、女君いと疾く見つけ給ひて、這ひ寄りて御後(おんご)よりふと取り給ひつ。大

將殿あさましく、「こはいかにし給ふぞ。六條の東(ひがし)の上(うへ)の御文なり。見給へよ。懸想(けんさう)びたる文の様か。」と、惜しみ顔にもし給はねば、女君もさすがにふとも見で持ち給へり。大將は、この文を、さる氣色なく欺き取らむの御心にて、様々にこしらへ宜ふ。女君はとかくいひしろひて、引し隠し給ひつれば、大將は切(せき)にもあさり取らで、さりげなく大殿籠りぬれど、「いかで取り返してしかな。何事かありつらむ。」と、目も合はず臥し給へり。女君の寢給へるに、前夜の御座(みま)の下など、さりげなく探り給へど、なし。明けぬれどとみにも起き給はず。女君の起き出で給ふにぞ、我も今起き給ふやうにて、よろづ窺ひ給へど、見つけ給はず。女君はかく求め給はむとも思ひ給はず、「げに嫌疑(けんぎ)なき御文なンめり。」と、心にも入らざりければ、思ひ出で給はず。男君は異事(こと)も覚え給はず、かしこに疾く御返(おんかへ)をと思せど、昨夜の御文の様見ぬやうならむは、「失ひてける。」と推し量り給ふべしなど思ひ亂れ給ふ。晝つ方、思ひわびて、「昨夜の御文は何事かありし。怪しう見せ給はで。」と宜ふが、いとさりげなければ、女君、嗚呼(なげ)がましよう取りてけりとすさまじう思す。「その文よ、いつら。」と宜へど、とみにも引き出だし給はず。暫し臥し給へる程に暮れにけり。朝の聲(あさのこゑ)に驚きて、あさましや、今日この御返をだにと、硯押し磨りて、「御文をいかにしつとか取りなさむ。」と、ながめおはすに、御座(みま)の奥の方少し上りたる所を、試に引き上げ給へれば、こゝにさし挟み給ひてけるなりけり。いと嬉しく嗚呼(なげ)がましく、うち笑みて見給へば、いと心苦しきことなむ書き給へりける。胸潰れ給ひて、「昨夜だにいかにも思ひ明かし給ひけむ。

今日も今まで文をだに。」と、いはむ方なく覺えて、女君ぞいとつらう心憂き。すべて泣きぬべき心地し給ふ。急ぎ出で立ち給はむとすれど、宮は心安く對面もあらざらむとまづこの御返を聞え給ふ。御腕に足疾き馬を引き出で、御使奉り給ふ。「昨夜より六條にさぶらひて、只今なむまかんでつるといへ。」と教へ給ふ。

かしこには、昨夜も御返だに見えず。今日の暮れ果てぬるに、あさましう思すに、心も碎けてよろしかりつる御心地、またいといたう惱み給ひ、「こよなう情なき人の御心にも侍りけるかな。」と、大將の君を恨みて泣き給ふ。物怪などは、かゝる弱目に所得るものなりければ、俄に消え入りて、たゞ冷えに冷え入り給ふ。宮の泣き感ひ給ふこといと道理なりかし。かく騒ぐ程に、大將殿よりとて御文取り入れたるを、ほのかに聞き給ひて、「今宵もおはすまじきなゆめり。」と、いと心憂く、やがて絶え入り給ひぬ。所々よりの御用、いつの間に聞き召しけむと見ゆ。大將殿限りなく聞き驚き給ひて、まづ御使して御用申し給へり。山の院も聞き召して、いと哀れに御文書き給へり。やがて歛め奉るとて、御甥の大和の守にてありけるぞ、よろづ扱ひまゐらせける程にぞ、大將殿おはしたる。道の程さへ遠くて、入り給ふ程いと心凄し。常なき世の有様の人の上ならぬもいと悲しきなりけり。宮は御息所もこの人の爲に多くは御心亂れにしぞかしと思すに、いとつらく、御答をだにし給はず。「いかにしてかく俄に。」と問ひ給へば、人々御有様片端づゝ申して、「かう申せば恨みまゐらす様になむなり侍りぬべき。」と申

すに、宜ひ出づることも口塞がれば、近き御庄の人々召し仰せて、さるべき事ども仕うまつるべく定めて出で給ひぬ。大和の守いとあり難しと悦び、畏りまゐらす。宮は明け暮るゝも思し分かねど、日頃経ければ、九月になりぬ。

山下しいと烈しう、木の葉の隠るへなくなりて、宮は涙の干る間もなく思し歎き給へば、人々もよろづに物悲しう思ひ感へり。大將殿は日々に御使して訪ひ給ひ、宮には心深き言の葉を盡して恨み給へど、取りてだに御覽せず、一行の御返だになきを、暫しは御心感はし給へるなど思しけれど、あまりに程経ぬれば、いと恨めしう、つれづれと物をのみ思しつゞけて明かし暮らし給ひ、心許なきに思しわびて、また渡り給へり。九月十餘日、野山の氣色は深く、見知らぬ人だにたゞにやは覺ゆる。山風に堪へぬ木々の梢も、峰の葛の葉も心あわたゞしう争ひ散る紛れに、尊き讀經の聲かすかに念佛の聲ばかりして、人の氣配いと少なう、木枯しの吹き拂ひたるに、鹿はたゞ籬の下に佇みつゝ、山田の引板にも驚かず、色濃き稻どもの中に混りてうち鳴くも憂へ顔なり。大將は例の妻戸のもとに立ち寄り給ひ、少將の君を召し寄せて、「かく山深く分け入る志を。」と切に宣ふ。少將は大和の守の妹なれば、衣の色いと濃く染めてけり。大將、様々に語らひ給ひて、「畏けれど、今は誰をかは寄邊に思ひ給はむ。よろづのことさるべき契にこそ。」と宣へど、宮は、「かくあさましき夢の世を、少しも思ひ醒ます折もあらばなむ、絶えぬ御訪の悦も聞ゆべき。」とのみ直くよかにいはせ給ふに、いみじういふ甲斐なき御心なりけりと

歎きつゝ歸り給へれど、また思ひ廻らして、「今は、いつあり初めしことごとく紛らはしてむ。」と思ひ給ひて、宮の一條に歸り給ふべき日を、何の日ばかりと定めて、大和の守召して、殿の内拂ひ繕はせ給ふ。

その日は自らおはし居て、御車、御前驅など奉り給ふ。宮は更に歸らじと宣ふを、人々いみじう聞え、大和の守も、「更に承け引かじ。」などいひつゞけて、人々、「時過ぎぬ。夜も更けぬべし。」と皆騒ぐ。時雨もいと心あわたゞしう吹き粉ひ、よろづに物悲し。御心一つには強く思せど、御鉢などやうの物も皆取り隠して人の守りまゐらすれば、泣く／＼御車に乗り給ふ。浦島が子の心地しておはしまし着きたるに、殿の内悲しげもなく、人氣多くて、あらぬ様なれば、御車寄せても更に故郷とも思はえず。大將殿は東の對の南面を我が御方にしつらひて、住みつき顔におはす。こなたに渡り給ひて少將の君をいみじう責め給へど、少將、「誠に淺からぬ御志ならば、今日明日を過ぎて聞えさせ給へ。」と申す。宮は塗籠に御座一つ敷かせて籠り給ひ、内より鎖して大殿籠りにけり。

○塗籠 四方を壁にしたる間。家具など置く所なり。

大將は目覺しうつらしと思し給へど、のどかに思して明し給ふ。山鳥の心地ぞし給ひける。

○山鳥の心地 山鳥は雌雄谷を隔てゝ寝るといふ。

六條の院におはして休らひ給へば、花散里の君、委しう問ひ聞き給ひて、「人の偽にやと聞き侍りつれ

ど、誠にこそ。皆世の常のことなれど、三條の姫君の思さむことこそいとほしけれ。」と宣へば、「らうたげに姫君など、宣ひなすかな。いと鬼々しう侍るものを。されどなどてそれをも疎にはもてなし侍らむ。」と宣ふ。日開けて我が御殿には歸り給へり。入り給ふより若君達うつくしげにて纏はれ遊び給ふ。女君は御帳の中に臥し給へり。入り給へれど、目も見合せ給はず。御衣を引き遣り給へれば、女君、「まろは早う死にき。常に鬼と宣へば、同じくはそれになり果てなむ。」と宣へど、大將殿、何くれとこしらへ慰め給へば、いと若やかに心美しうおはする人なれば、おのづから和みつゝおはすを、いとあはれと思せど、心は空にて、暮るればめでたう繕ひ化粧じて出で給ふを、女君、火影に見出して、脱ぎ止め給へる單衣の袖を引き寄せて、

馴るゝ身をうらみむより は松島の

あまの衣に裁ちや、かへまし

○「添ひ馴れし身を恨みむよりは、尼になりぬべし。」

かしこにはなほ塗籠にさし籠り給ひ、その夜も對面し給はず。大將いたく恨みて、少將を責め給へば、げにもと思ひ、塗籠の北の口より入れ奉りてけり。宮はあさましく、音をのみ泣き給ふ様いとほしければ、大將もいと心憂く歎き明かし給ひつ。今日は止りて心のどかにおはす。内は暗き心地すれど、朝日射し出でたる氣配濡り來たるに、亂れたる御髪掻き遣りなどしてほの見奉り給へば、いとまゝに女し

うなまめいたる氣配し給へり。

かく強ひて住み馴れ顔作り給ふ程、三條の女君、「今は限りなンめり。まめ人の心變るは、餘波なくなむと聞きしは誠なりけり。」と、世を見果つる心地して、太政大臣の御殿に渡り給ひて、弘徽殿の女御の御里におはする程なるに、少し物思の晴るけ所に思されて、急ぎ歸り給はず。大將殿聞き給ひて迎に人奉り給へど、御返だになし。輕々しと思せど、太政大臣の見聞き給はむ所もあれば、暮して自ら参り給へり。「今更に若々しや。」と恨み給へど、「何事も今はと見厭き給ひける我が身なれば。」と動き給はねば、大將殿も強ひて歸り給へとも宜はず。

御法 みのり

紫の上いたく煩ひ給ひし御心地の後、いとあつしくなり給ひて、そこはかとなく惱みわたり給ふこと久しくなりぬれば、君の思し歎くこと限りなし。上は、いかで世を背きて、暫しにても命の程は、行を紛れなくと思し宜へど、君は更らに許し給はねば、年頃私の御願にて書き給ひける法華經千部、急ぎて供養し給ふ。我が御殿と思す二條の院にて嚴めしくせさせ給へば、内、春宮、明石の中宮を始め奉りて、御方々捧物などし給ひ、花散里の君、明石の上なども渡り給へり。三月の十日なれば花盛にて、空

の景色などもうらゝかに物面白く、佛のおはする所の有様、遠からず思ひ遣らる。夜もすがら舞ひ遊びて、上下心地よげに興ある氣色どもなるを見給ふにも、残少しと身を思したる御心の中には、よろづの事哀れに覺え給ふ。今日や見聞き給ふべきとちめならむとのみ思さるれば、さしも目止るまじき人の顔ども、あはれに見渡され給ふ。誰も久しく止まるべき世にはあらざれど、まづ我獨り行方も知らずなりなむ心細さ思しつゞくる、いみじう哀れなり。事果ておのがじ、歸り給ひなむとするにも、これや遠き別れめきて惜まる。花散里の御方に、

絶えぬべき御法ながらぞ頼まるゝ
世々にと結ぶ中の契を

結び置く契は絶えじ大方の
残り少なき御法なりとも

○「年老い残り少くなりて、一通りの法會にても佛に結ぶ契は絶えざるべし。ましてかくばかり貴き法會を今より修め給へば、佛も感應ましますべし。」
○本篇の題はこれらの歌による。

夏になりては、例の暑さにいと消え入り給ひぬべき折多かり。明石の中宮、この二條の院にまかん

で給へば、久しき御對面の途絶を珍しく思して、御物語細やかに聞え給ふ。明石の上も涉り給ひて、心深げに静まりたる御物語ども聞え交し給ふ。物の序などにぞ、「この人、かの人、おのれ侍らすなりなむ後に、御心止めて、尋ね思はせ。」など宣ひける。三の宮は數多の御中にも、いとをかしげに、何心なく走り歩き給ふを、前に据ゑ奉り給ひて、「まろが侍らざらむに、思し出でなむや。」と宣へば、「いと戀しかりなむ。まろは内よりも宮よりも母をこそまさりて思ひまゐらすれ。」とて、目押し磨り紛らはし給へる様のをかしければ、ほゝ笑み給ひながら涙は落ちぬ。「大人になり給ひなば、こゝに住み給ひて、この對の前なる紅梅と櫻とは、花の折々に御心止めてもてあそび給へ。さるべからむ折は佛にも奉り給へ。」と聞え給へば、うちうなづき給ふ。

秋待ちつけて、世の中少し涼しくなりて、身に染むばかり思さるべき秋風ならねど、露けき折がちにて過し給ふ。風凄く吹き出でたる夕暮に、前栽見給ふとて脇息に寄り居給へるを、君渡りて見奉り給ひ、「今日はいとよく起き居給ふは、宮の御渡りにて、こよなく御心も晴れくしげなめり。」と宣ふ。上、心苦しく、

おくと見る程ぞはかなきともすれば

風に亂る、萩の上つゆ

君、御涙を流し給ひて、拂ひあへさせ給はず。上、「今は歸らせ給ひぬ。亂り心地いと苦しくなり侍り

ぬ。」とて、御几帳引き寄せて臥し給へる御様の、げに常よりもいと頼もしげなく見え給へば、中宮は御手を捉へ奉りて、泣くく見奉り給ふに、誠に消え行く露の心地して、限りに見え給へば、御誦經の使ども數も知らず立ち騒ぎのしりたり。前々もかくて生き出で給ふ折ありしに馴らひて、暫しは御物の怪の仕業と疑ひて、一夜様々の事をし盡させ給へど、甲斐もなく、明け果つる程に消え果て給ひぬ。院は思し静めむ方もなく、御顔の色もあらぬ様に、御涙の止らぬを、人々道理に悲しく見奉り給ふ。古も悲しと思すことも數多見給ひし御身なれど、いとかう下り立ちてはまだ知り給はざりけることを、すべて來し方行く先類なき心地し給ふ。やがてその日、とかく歛め奉る。遙々と廣き野に所もなく人のみ立ち込みて、限りなく嚴めしき作法なれど、程なくいとほかなき煙に上り給ひぬるもあへなくいみじ。院は空を歩む心地して人にかゝり給ひてぞおはしましたける。世の中思しつゞくるに、いと厭はしければ、後るとても幾世かは經べき。かゝる悲しさの紛れに、御本意も遂げまほしく思せど、心弱しと人の見るらむと思せば、この程を過してと思す。めでたき人も世に猜まれ、善きにつけても、心驕りて、人の爲苦しきこともあるを、上は怪しきまで人に承けられ、はかなくし出で給ふことも世に譽められ、らうくじくあり難かりし御心ばへなりかし。さればさしもあるまじき人さへ、その頃は風の音、虫の聲につけつゝ、涙落さぬはなし。千年をも諸共にと思しゝかど、限りある別れぞいと口惜しきことなりける。今日や世を背かむとのみ思しわたるに、はかなくて月日の積りにけるも夢の心地のみし給ふに、明

石の中宮なども思し忘るゝ時の間なく戀ひまゐらせ給へり。」

幻

まぼろし

春の光を見給ふにつけても、御心一つはいと暮れ惑ひたるやうにのみ、悲しさの改まるべくもあらぬに、御簾の内におはす。餘波なく御道心の深くなり行くにつけても、紫の上、中頃物恨めしう思したる氣色の、時々見え給ひしを思ひ出で、などてさやうなる心を見せ奉りけむと、いとほしく悔しう覚え給ふ。入道の姫宮の渡り給ひし頃、雪降りたりし曉に、袖のいたう泣き濡らし給へりけるを引き隠して紛らはし給へりしを、夢にても、またいかならむ世にか見奉らむと、夜もすがら思しつゞける。明石の中宮は内裏に渡らせ給ひて、三の宮をぞ寂しき御慰めにおはしませ給へば、宮、母の宜ひしかば。」とて、對の御前の紅梅、取り分きて後見歩き給へるを、いと哀れと見奉り給ふ。

二月になれば、花の木どもの盛なるも、またしきも、梢をかしう霞み渡れるに、かの御形見の紅梅に、鶯の華やかに鳴き出でたれば、

植ゑて見し花の主もなき宿に

知らず顔にも來居る鶯

遅く疾き花の心をよく思し分きて、いろ／＼を盡し植ゑ置き給ひしかば、時を忘れず匂ひ満ちたるに、三の宮、「まろが櫻は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木の周圍に几帳を立て、帷子を上げずば、風もえ吹き寄らじ。」と、賢う思ひ得たりと思ひて宜ふ顔のいとうつしきにもうち笑まれ給ひぬ。いとつれ／＼なれば、入道の宮の御方に渡り給ふに、宮は佛の御前にて經をぞ讀み給ひける。のどやかなるまゝに思ひ澄まし給へるもいと羨しく、かゝる女にだに後れぬること、口惜しう思さる。夕暮の霞ただどしうをかしき頃なれば、明石の上の御方に渡り給ひ、のどやかに昔物語などし給ひて。「あるまじき絆に多くかゝづらひて、今まで過してけるが、心弱うもどかしきことかな。」と宜へば、女君、いとほしう見奉りて、「なほ暫しのどめさせ給ひて、宮達なども大人びさせ給ひ、誠に動きなかるべき御有様に見奉り給ひてこそ。」など聞え給ふも目安し。

祭の日いとつれ／＼にて、今日は物見るとて世の人々心地よげならむかしとて、御社の有様など思し遣る。「女房などいかにさう／＼しからむ。里に忍びて出で、見よかし。」など宜ふ。

五月雨はいとゞながめ暮し給ふより外の事なく寂しきに、十餘日の月、華やかにさし出でたる雲間の珍しきに、大將の君、御前にさぶらひ給ふ。花橋の月影にいとときはやかに見ゆる薫も懐かしきに、俄に立ち出づる村雲の氣色、いと生憎にて、おどろ／＼しく降り來る雨に添ひて、さと吹く風に燈籠も吹き惑はして、空暗き心地ぞする。待たれつる時鳥のほのかにうち鳴くに、

大將殿、

亡き人をしのぶる宵の村雨に
濡れてや來つる山ほととぎす

ほととぎす君につてなむ故郷の
花橘は今ぞさかりと

○ほととぎすは冥土に通ふといふによりてなり。

いと暑き頃、涼しき方にてながめ給ふ。日も暮るゝに、蛸の聲華やかなるに、御前の撫子の夕映を、一人のみ見給ふは、げに甲斐ぞなかりける。七月七日も、例に變りたること多く、御遊などもし給はで、つれづれにながめ暮し給ひて、星合見る人もなし。風の音たゞならずなり行く頃しも、今まで經にける月日よと思すにも、呆れて明かし暮らし給ふ。御正日には上下の人々皆齋して、かの曼陀羅など今日ぞ供養せさせ給ふ。

○曼陀羅、淨土の圖。紫の上生前志して描かせたるなるべし。

神無月には、時雨がちなる頃、いとどながめ給ひて、雲居を渡る雁の翼も羨ましくまもられ給ふ。

大空をかよふ幻夢にだに

見え來ぬ魂の行方たづねよ

○「幻」は仙術を修むる道士、飛行をよくす。唐の玄宗の寵妃楊貴妃の死後、臨卭の道士その魂を尋ねて蓬萊に入り、證據として鏡を得て歸りし故事による。

○「空を飛ぶ道士は夢にも見えぬ亡き魂の行方を尋ねよ。」

○本篇の題はこの歌による。

今年をばかく忍び過しつれば、今はと世を背き給ふべき程近く思し設くるに、哀れなること盡きせず。やうくさるべき事ども、御心の中に思しつゞけて、さぶらふ人々にも物賜ひなどす。破れば惜しと思されけるにや、少しづつ残し給へりける人の御文どもを、物の序に御覽じつけて、破らせ給ひなどする中に、かの須磨の頃ほひ、上の御手なるは、殊に結び合はせてぞありける。自らし置き給ひけるとなれど、久しうなりにけると思すに、只今のやうなる御墨付など、げに千歳の形見にしつべかりけれど、これもやがて見すなりぬべき世と思して、押し破りて皆焼かせ給ふ。

御佛名も今年ばかりにこそと思せばにや、常よりも異に哀れに思さる。年暮れぬと思すも心細きに、

三の宮の儼やはむと走り歩き給ふも、やがてかゝるをかしき御有様を見すならむことよろづに忍び難し。

物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に

年も我が世も今日や盡きぬる

雲 隱 くもがくれ

本篇は題のみ傳はりて本文なし。始より本文なかりしか、傳寫の際に失ひしか、明かならず。この篇は源氏の終焉を叙すべき所にして、出家して嵯峨に隠れ二三年の後薨去せられたること、後の卷に極めて簡單に見ゆ。傳寫の際に、この篇だけ失ふことは普通にはあり難きことなる上、幻の卷に出家の用意を委しく述べたるを見れば、例の大省筆にてこの篇の本文は始よりなかりしなるべく、題の「雲隱」も後人の作り添へたるものなるべしといふ。「雲隱」を加へざる時は、「若菜」を上下に分ちて五十四帖とす。本書はこれに據りたり。

匂 宮 にほふのみや

光源氏の君薨れ給ひにし後、立ち繼ぎ給ふべき人、御族の中にあり難かりけり。明石の中宮の御腹なる三の宮と、入道の姫宮の若君と、この二所なむとりくりに清らなる御名取り給ふ。三の宮は紫の上の御遺言のまゝに、二條の院におはしし、御元服し給ひては、兵部卿の宮と聞ゆ。御方々泣くく遂に

おはすべき住所に、おのく移ろひ給ひし中に、花散里の君は東の院に渡り給ひ、入道の姫宮は、御私の御殿、三條の宮に移り給ふ。明石の中宮は内裏にのみさぶらひ給へば、六條院の内寂しく人少なくなりければ、右の大入道、我が世にあらむ限りは、この院荒らさじ。と宣ひて、丑寅の町に、かの一條の落葉の宮渡し奉らせて、三條院と夜毎に十五日づつ通ひ住み給ひける。二條の院とて作り磨き、六條の院とて世にのしりし玉の臺も、たゞ明石の上一人の御末の爲なりけりと見ゆ。

○明石の上一人の御末の爲、二條院は明石の上の孫三の宮の御殿、六條院は明石の中宮の御里。

入道の姫宮の若君は、源氏の君の聞えつけ給へりしまゝに、院取りわきてかしづき給ひ、御元服などもこの院にてせさせ給ふ。十四にて侍従になり給ひ、その秋右近の中將になり給ふ。幼心地には聞き給ひし事のいぶかしう思ひ渡れど、問ふべき人もなし。御母宮も、いかでかく盛の御容貌を俄に世を背き給ひけむ。同じうは我も同じ道にや入りなまし。と思ひ静まり給へり。御身の香の香ばしさぞこの世の匂ならず。遠く隔てたる追風も、誠に百歩の外も薫りぬべき心地して、うち忍び給へる物の隈も隠れなきにうるさかり給ふ。かくいと怪しきまで香に染み給へるを、兵部卿の宮、異事よりも挑ましく覺して、よろづの優れたる薫物を染め給ひ、朝夕の事業に、種々の香を合はせ營み給ひければ、世の人は、匂の宮、薫中將といひつゞけたり。

○本篇の題はこの「匂の宮」による。